

先生方とともに  
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉  
高校版  
2019  
Volume 5

12月

# VIEW21

## 明日への振り返り

特集

### 0学期からの 新「高3指導」考

改革事例から導く！  
「学校教育デザイン」を描く道標

東京都・私立山崎学園富士見中学高校

主体的・対話的で深い学びへ  
実践 アクティブ・ラーニング

日本史 栃木県立黒磯南高校 野澤宏光

数学 東京都・私立高輪中学高校 射手基

指導変革の軌跡

千葉県立浦安高校

岡山県立笠岡高校



## 対話で築くクラス

**生徒** 大貫クラスは、1学年の中でもチームワークがよいクラスだと思います！学校祭の催し物を縁日にした時も、クラス全員で出し合った考えを取り込みながら1つのアイデアがどんどんよい形になっていく、その過程が楽しかったです。

**先生** 昼休みや放課後に自分たちで集まって、準備を進めていたよね。先生は安全面を確認するだけで、安心して任せることができました。

**生徒** 今回のこの雰囲気があるのは、入学式の前に初めてこの教室に集まった時、先生が「5分間、できるだけ多くの人と挨拶をしよう」と、自己紹介の場を設けてくれたからだと思います。それで緊張感が一気に解けて、和やかな空気になりました。

**先生** 最初に打ち解けるきっかけがあれば、あとは自分たちで仲よくなれると、先生は思っていたよ。

**生徒** 意見をはっきり言う一方で、否定的なことは言わず、他者の意見も聞けるクラスメートばかりだから、中学校時代は遠慮しがちだった私も、積極的に発言できるようになりました。黙っている人がいたら、「どう思う？」と自然に聞けるのも、このクラスのよさだと思います。

**生徒** どの人とも話しやすいから、授業でのペアワークやグループワークも活発に行えています。

**先生** 対話的な活動では、みんなが発言しやすいように、最初は基礎的なことを問い、最後の方にグループ全員で考えを出し合って解くような発問をして、話しやすくする工夫もしているよ。分からないことも、力を合わせれば解決できることを経験してほしいんだ。

**生徒** 他者の考えを聞くと、自分の考えが深まり、さらに、日頃、学習している様子が分かって刺激も受けます。先生に学習についての相談をした時、朝早く学校に来て学習することを続けて、成績がぐんぐん伸びた先輩の話がされましたよね。私も頑張ってみようと、朝、それまでよりも1本早い電車に乗るようにしました。

**生徒** 図書室で勉強しているよね。その姿を見て、私も早起きして、家で勉強してから登校するようになったよ。

**先生** ホームルームなどでセルフマネジメントの大切さをよく話すのは、自分自身が成果を上げることで周りにもよい影響を与えられるようになってほしいという先生の願いもあります。クラスのよさを伸ばして、学び合いがさらに深まるよう、応援していくよ！

**大貫宏明先生** 教職歴21年。同校に赴任して8年目。進路指導部副部長。1学年担任。

**栃木県立栃木女子高校** 全日制/普通科/女子校/1学年 約240人/2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、宇都宮大、お茶の水女子大、東京外国語大などに95人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ472人が合格。

## 2 特集

# 0学期からの新「高3指導」考

### 4 座談会

自走できる学習者を育てるために「高3・0学期」からできること

茨城県立水海道第一高校 菅原冬樹 / 京都府・京都市立西京高校・附属中学校 岩佐峰之 / 佐賀県立致遠館中学・高校 山崎俊明

### 8 実践1●思考力・判断力・表現力等の育成

新潟県立長岡高校

課題の精選や授業・定期考査の改善を組織的にを行い、思考力や主体性等を養う

### 12 実践2●面談指導の強化

岡山県立倉敷青陵高校

生徒に考え、語るさせるカウンセリング型の面談で、生徒の内なる変容を促す

### 16 実践3●推薦・AO入試の指導

東京都・私立広尾学園中学校・高校

研究過程での生徒の変容・成長を丁寧に見取り、推薦書や志望理由書を練り上げる

## 20 特別企画

20 理解! 習得! 自校に展開! 生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント  
ワークショップ参加者の今

22 改革事例から導く! 「学校教育デザイン」を描く道標

22 東京都・私立山崎学園富士見中学高校

生徒の状況を見ながら築く探究学習で「17の力」の育成を目指す

26 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

26 日本史

栃木県立黒磯南高校 野澤宏光

歴史から生きるヒントを獲得し、学び方を学ぶ「2ターム授業」で、学びへの意欲を高める

30 数学

東京都・私立高輪中学高校 射手 基

生徒主体の問題解決を通して数学の面白さに気づかせ、確かな学力と主体性を養う

34 指導変革の軌跡

34 千葉県立浦安高校

社会と連携した学校改革

学校と地域・大学・企業が連携した活動で、生徒の学びに向かう意欲を醸成

38 岡山県立笠岡高校

探究学習を軸にした学校改革

全校体制で資質・能力ベースの指導改善を推進し、自己実現への「志」を育む

42 改良! 指導ツール ビフォーアフター

全学年 部活動目標達成シート

46 学校を飛び出し、学びを巡る 高校教師 study-tour

義務教育学校の「総合的な学習の時間」

真正な課題設定と問いかけにより、課題に対する当事者意識を高める

48 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

48 名古屋商科大学 留学プログラム

1年次から多様な留学機会を与え、学びの意欲を高めるきっかけに

50 吉備国際大学 農学部 地域創成農学科

淡路島を舞台に幅広く農学を学び、地域創成に貢献するリーダーを養成

52 これからの会議・研修のあり方、つくり方

実践者に聞く!

長崎県・私立長崎南山中学校・高校

教師全員で学校の課題に向き合い、学びやすく、働きやすい環境をつくる

60 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「岡山の教育をどうしたいのか」

岡山県立総社高校 三村美紀

### 今月の表紙メッセージ

### 明日への振り返り

◎ 2019年は先生方にとってどのような年だったでしょうか。元号が令和に変わり、新たな時代が幕を開けましたが、高校教育にとっての新時代の幕開けは、制度変更後の大学入試を初めて受験する現高2生が入学した2018年ではないかと、本誌18年4月号の本欄で述べました。その生徒も来年は高3生です。これまでと環境が異なり、社会の変化が一層激しくなるからこそ、新たな「高3指導」のあり方と、これまでの指導を振り返ることが必要だと考え、今号の特集は「過去と未来をつなぐ今」をコンセプトとしました。本年も、ありがとうございました。2020年も、よろしくお願いいたします。

『VIEW21』高校版  
編集長 柏木崇

<https://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます。

印刷/(株)協同プレス 製本/日宝綜合製本(株) 編集協力/(有)ペンダコ 執筆協力/中丸 満、二宮良太、長谷川教 撮影協力/荒川 潤、川上一生、木村琢磨、田中秀和、ヤマガチイキ

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。

©Benesse Corporation 2019

教科間や学年間での目線合わせや  
研究授業の実施などを通じて  
**授業改善に力を入れてきた**成果もあり、  
**主体性や積極性の面で生徒の成長**を  
感じています。

1年次からの計画的な進路ガイダンスに加え、今後は  
**面談の機会を増やし、**  
生徒を精神面で支えていきます。

地方公立高校  
管理職

# 新「高3指導」考

首都圏公立高校  
進路部

毎年9月の2学年の学年集会で、  
受験生への意識づけをしていますが、今年は、  
**受験を自分事と考えていない生徒が  
例年より若干多い**と感じています。

ただ、3年次までの指導の流れを確定させ、  
その流れに生徒を乗せることができているので、今後は  
**ポートフォリオをきちんとつくることを  
徹底させていきたい**と考えています。

高校2年生の3学期は、これまでも「高3・0学期」と呼ばれ、大学進学を目指す生徒に受験生としての自覚を持たせるべく、指導の切り替えをする時期として重要視されてきた。現2年生は、制度変更後の大学入試を初めて受ける世代であり、そうした環境変化も踏まえると、「高3・0学期」における指導の切り替えは、一層重要なものとなるだろう。また、それは3年次の指導につながるものでなくてはならない。そこで今号では、現2年生から始まる、新たな「高3指導」について、0学期を起点に考えていく。

私立高校  
総務部

現状では生徒の意識に大きな変化は  
見られませんが、今後は、  
**高校時代までの活動経験を利用した  
推薦・AO入試の受験希望者が多くなる**  
のではないかと感じています。  
これまで個別対応だった指導を  
全体での指導にすることも  
検討しています。

特集

# 0学期からの

2年生に入学からの1年半の学習を  
振り返り、入試に向けて取り組むべきことを  
考えさせたところ、  
多くの生徒が普段の学習の重要性を挙げていました。  
それをいかに行動に移させるかが、今後の鍵。  
**高3・0学期中に、第1志望へのこだわりを  
言語化することをゴール**  
として指導を進めます。

地方公立高校  
進路指導主事

\* 2019年度の高2生の指導状況について、『VIEW21』高校版読者モニターアンケートで聞いた  
結果（アンケートは2019年10月にウェブとファクスで実施。回答数は81）を基に作成。

## 実践3

### 推薦・AO入試の 指導

東京都・私立  
広尾学園中学校・高校

p.16

## 実践2

### 面談指導の 強化

岡山県立  
倉敷青陵高校

p.12

## 実践1

### 思考力・判断力・ 表現力等の育成

新潟県立  
長岡高校

p.8

## 座談会

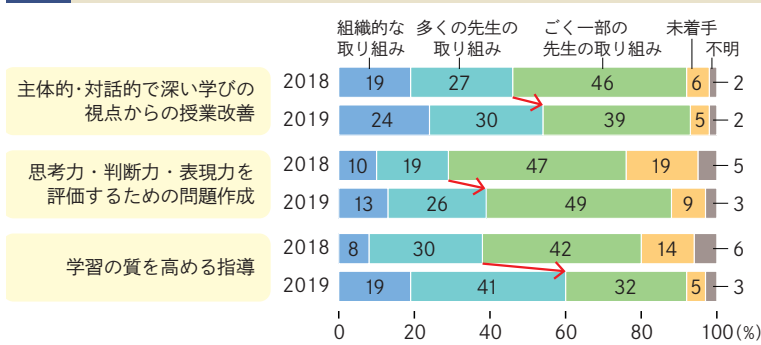
自走できる  
学習者を育てるために  
「高3・0学期」から  
できること

p.4

# 自走できる学習者を育てるために 「高3・0学期」からできること

受験生への切り替え時期として重視されている「高3・0学期」。入試制度に変化がある現高2生に、これからの社会を生きるために必要な資質・能力を育むため、学校・学年団はどのような点に留意して、高3・0学期以降の指導を行えばよいのだろうか。学校改革の最前線に立つ管理職とミドルリーダーに話を聞いた。

図1 資質・能力の育成に向けた取り組み状況



出典／(株)ベネッセコーポレーション教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」(2019年)。全国の高校へアンケートを実施。有効回答数は約1400校。

学校改革や指導改善の目的を  
いま一度、学校全体で共有する

編集部 大学進学を目指す生徒が多い高校では、2年生3学期を「3年生0学期」と位置づけ、受験生への切り替え期としています。現2年生は、思考力・判断力・表現力等がこれまで以上に問われるようになり、入学者選抜全体で多面的・総合的な評価が推進されるなど、大学入試の

あり方も変わるため、様々な取り組みを行っている高校が多いと聞きます(図1)。現2年生を率いる学年団は、どのような点に留意して3年生0学期を迎えればよいとお考えでしょうか。

山崎 多くの高校が、思考力・判断力・表現力等の育成を掲げて教育活動に取り組んでいます。直線的に解答にたどり着く力が求められる時代は終わり、揺さぶられながら最適解に近づいていける生徒を育てていかなければ、Society 5.0の時代を生き抜くことはできないでしょう。主体的に軌道修正しながら、最適解を導き出せる生徒を育てるための学校改革であることを、改めて教師と生徒、保護者が共有することが大切だと考えます。

菅原 受験勉強が目的化していることが、これまでの高校教育の最大の課題だったと思います。何のために学ぶのかを生徒自身が理解しなければ、主体的に学習に向かうことはできず、その先にある大学の学びにも興味・関心を持ってないでしょう。3年生0学期は、主体的に学ぶ生徒を育てるために何ができるのかを一度考える、よいタイミングだと思

茨城県立  
みづかいどう  
水海道第一高校  
2年次主任  
菅原冬樹  
すがわら・ふゆき

教職歴23年。同校に赴任して3年目。



## 茨城県立水海道第一高校

◎2004年度、進学重視型単位制普通科に移行。校訓は、「至誠剛健・快活」。グローバル社会で活躍する人材育成を目的とした「海高プロジェクト」を実施。  
◎設立 1900(明治33)年  
◎形態 全日制/普通科/共学  
◎生徒数 1学年約280人  
◎2019年度入試合格実績(現浪計)  
国公立大は、茨城大、筑波大、宇都宮大、東京学芸大などに43人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大などに延べ586人が合格。  
◎URL <http://www.mitsukaido1-h.tok.ed.jp>

います。

岩佐 私たち教師が生徒と確認すべきことは、「なぜ、思考力・判断力・表現力等を身につける必要があるの

か」です。これからの社会を生きる生徒には、こういった資質・能力が必要なのかを、一人ひとりの教師がぶれない指導の軸として持つておかなければいけません。



京都府・京都市立  
西京高校・附属中学校  
副校長  
**岩佐峰之**  
いわさ・みねゆき  
教職歴30年。同校に赴任して12年目。

**京都府・京都市立西京高校・附属中学校**  
◎校是は、「進取・敢為・独創」。2015年度、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」指定校。  
◎設立 1886（明治19）年  
◎形態 全日制／エンタープライジング科／共学  
◎生徒数 1学年約280人（全日制）  
◎2019年度入試合格実績（現浪計）  
国立大は、北海道大、東京大、京都大、大阪大、神戸大などに213人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ671人が合格。  
◎URL <http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/saikyo>

**編集部** 資質・能力の育成の必要性は、どのようにすれば校内で共通理解ができるのでしょうか。  
**山崎** 社会が大きく変化していることを、教師や生徒が実感する機会が



佐賀県立致遠館  
中学・高校  
進路指導主事  
**山崎俊明**  
やまさき・としあき  
教職歴19年。同校に赴任して9年目。

**佐賀県立致遠館中学・高校**  
◎県立の併設型中高一貫教育校。佐賀藩10代主鍋島直正公の精神が息づく学校。2017年度、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校（第3期）。  
◎設立 1988（昭和63）年  
◎形態 全日制／普通科・理数科／共学  
◎生徒数 1学年約240人  
◎2019年度入試合格実績（現浪計）  
国立大は、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、佐賀大、国際教養大などに168人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ340人が合格。  
◎URL <http://cms.saga-ed.jp/hp/chienkankoukou/>

必要だと思えます。本校では、キャリア教育の一環で講演会を行う際、講師に、社会の動きの速さを伝えていただくようお願いしています。社会でどのような資質・能力が求められているのかを、生徒だけではなく、教師も理解することで、旧態依然とした教育では立ちいかないと危惧意識を高めたからです。学校にしているだけでは、社会の変化に気づくことは容易ではありません。

**岩佐** 本校では、卒業生が同じような役割を果たしています。卒業生が後輩に、高校での授業の大切さや探究学習の意義を、大学での経験などを踏まえて語ってくれますが、教師にとっても、社会の変化や大学教育の現状を知る重要な機会になります。

**思考力等の育成の振り返りをどのように行うか**

**編集部** 思考力・判断力・表現力等は、社会で生きていく上で必要な資質・能力です。3年生0学期を迎えるにあたり、それらの資質・能力が生徒に身につけているかどうか、2年生の12月までの教育活動をどのよ

うに振り返るとよいでしょうか。  
**岩佐** パフォーマンス評価による定観測で、評価すべきだと考えています。思考力・判断力・表現力等は直線的に向上していくものではありませんから、いろいろな場面でパフォーマンス評価を行いながら、スパイラル的に積み上げていく環境ができていくかどうかを、3年生0学期を迎えるまでの間に見直す必要があると思います。

**菅原** 進路検討会の方法を、従来とは変える必要があると思います。2年生11月までの模擬試験を振り返り、思考力・判断力・表現力等の評価を見て教育活動の成果を測るのも1つの方法だと思います。模擬試験の結果を見ると、意外な生徒が思考力の高さを評価されていることもあります。外部の指標を利用することで、知識・技能だけではない資質・能力を見取ることができます。

**山崎** 思考力・判断力・表現力等は、定性的な評価だけでなく、定量的な評価も試みていくべきでしょう。本校では、課題研究において、ルーブリックを用いた思考力・判断力・表現力等の自己評価、及び他者評価をさせています。それらに加えて、18

年度からは外部のアセスメントを活用して、思考力の育成状況を定量的にも見ています。今後は、外部のアセスメントの結果と大学入試の結果との相関を見ていくつもりですが、そうした評価や分析を何年か継続して積み上げていく中で、自校としての評価軸が定まってくるのではないのでしょうか。

## 「なぜ、その志望なのか」を徹底的に突き詰める

**編集部** 現2年生は、安全志向の生徒が例年よりも多いと聞きます。希望進路実現のため、どのようなことに配慮して生徒を支援すればよいとお考えでしょうか。

**岩佐** 最初、生徒は安全志向になりがちです。しかし、生徒が主体的に考えずに、「合格できそう」という理由だけで選んだ大学に安易に入学してしまうと、最悪の場合、退学してしまうこともあります。自分は大学で何がしたいのか、本当に行きたい大学はどこなのかを突き詰めて考えさせることが、これからはますます大切です。

本校では、2年生10月に「受験生

宣言」を行ってきましたが、今年度からは、クラスを横断する形で、同じ学部系統を志望する生徒を4〜5人のグループにし、「なぜ、この大学・学部なのか」を書いた用紙を読み合う活動を始めました。志望理由が明確でなかった生徒は、自分の夢を熱く語れる人や、大学・学部こだわりの持つ人がいることに気づき、改めて自分の志望校と向き合うようになります。

この活動では、志望が決まっていない生徒のグループも設けました。そのグループでは、生徒同士が話し合うだけでなく、いろいろな教師がかかわり、自然と個人面談が行われていました。普段接したことのない教師と話をし、視野を広げた生徒がいるなど、よい刺激になったと思います。

**菅原** 現2年生に対しては、入学時から面談などで、「なぜ」を徹底的に問うようにしてきました。進路希望調査、コース選択などで生徒が表明した志望に対して、教師は面談で「なぜ、その大学・学部なのか」を問いかけます。生徒の志望理由は表面的なものも多く、深く問いかけると、自己の内面の矛盾に気づけるよ

うになります。対話を通して、生徒が自分と向き合うようにする指導が必要です。本校の3年生0学期からの指導では、主体性の涵養が大きなテーマになります。面談などで生徒の可能性を広げられるような声かけや助言をできるかが、教師の指導のポイントになると考えています。

**山崎** 教師がすべての生徒に対して個別に指導するのは限界がありますから、生徒が自走できるようにすることが必要です。そこで、本校では、自分の力で飛び続けることができる「飛行機型人間」の育成を目指して、1年次から指導のサイクルを工夫してきました(図2)。自走に向けた意識づけのためには、生徒が自身の状況をメタ認知する面談が有効であり、本校では、面談力向上のための教員研修も行っています。資質・能力を身につけることの必要性を生徒が実感できる面談にすれば、最後の自走の部分が大きく変わるはずで

す。そこで、2年次の2学期末には、ポートフォリオを使って生徒にリフレクションを行わせ、生徒が自走できるときは姿勢になっているか確認したいと考えています。

図2 佐賀県立致遠館中学・高校の指導サイクル

◎指導のサイクルを高速回転させる

1年次7月(第1期 Adaptation)

↓ 中学4年生≠高校1年生

1年次8月~2年次8月(第2期 Basis)

↓ 思考(基礎積み) > 判断 > 表現 → 型を知る

2年次8月~3年次8月(第3期 Challenge)

↓ 思考 < 判断(演習・経験) > 表現 → 経験する

3年次8月~3年次3月(第4期 Doing)

↓ 思考 < 判断 < 表現(自己表現を含む) → 自走する(飛行機型人間)

\*山崎先生提供資料を基に編集部で作成。

## 自律への芽を的確に見取り、成長させる声かけが大切

**岩佐** 本校では、「自律」という言葉で共通理解していますが、最後は生徒がいかに当事者意識を持って学習に取り組めるかがポイントになると考えています。学習方法についても、「この問題が分かりません」と言って教師を頼る生徒は、自律にはまだ遠い状態です。それに対して、「この解き方はどうですか」などと、質問が具体的になってきた時がチャ



ンスです。自分で考えて課題を見つめる行為は自律への第一歩です。教師は、教えずに、伴走しながら生徒の悩みを理解することで、主体性を涵養する存在でありたいと思っています。

**山崎** 確かに、学力や進路意識が高くなるほど、質問の内容は変わってきます。志望校選びにしても、この大学に行きたいので調べてみたという動きが出てきたら、志望が明確

になりつつあるということです。そういう生徒は、壁にあたってもぶれずに目標に向かうことができるでしょう。自走の芽を摘み取らず、成長させられるような指導が大切です。

**菅原** 内発的な動機づけによって主体性が表れるのが理想ですが、生徒の状態によっては、教師の仕かけによる外発的な刺激が必要な場合もあります。ただ、その際も、面談などを通して、自分が何を大切にしているのか、本当にしたいことは何か

など、内面に目を向けさせ、自律的な学びを促す働きかけが欠かせません。主体性を涵養する場づくりは低学年次から必要ですが、3年生0学期からでも遅くはないはずです。自走できる力を備えた時、生徒は私たちの想定を超えて大きく成長し、それぞれの志望を実現するはず。

**教師間での連携が一層求められる**

**編集部** 現2年生の3年次の指導に

おいては、どのような視点を持っておくとよいでしょうか。

**岩佐** 推薦・AO入試の選抜方式も

変更・拡大したり、調査書の様式が変わったりするため、生徒の情報を2学年団から3学年団へどのように引き継いでいくか、教師間で連携することが非常に重要になります。

**山崎** 本校では、ポートフォリオに生徒の学びや活動を蓄積していますが、それらをどのように調査書や推薦書、志望理由書に反映させるかを校内で検討する必要があると考えています。21年度入試では、入試制度の変更があるため、その対応も含め、時間切れとならないよう、教師も生徒も早めに動くよう心がけています。その意味でも、現2年生の3年生0学期は例年以上に重要になると思います。

**菅原** 現2年生は、11月の修学旅行後に「受験生宣言」を行います。その後は、3か月のスパンで区切って進路指導の計画を立てていきます。また、推薦・AO入試への対応も例年より前倒しで行う予定です。早めに受験希望者を把握し、具体的にどのようにサポートしていくのかを検討する会議も行います。

**岩佐** 同じ高校の生徒であっても、生徒によって学びや経験は多様になっている今、それを大学入試にど

のように結びつけ、一人ひとりの志望をどのように実現するのかを、3年生0学期の段階で教師が話し合うことは、これまで以上に大切になります。一方で、生徒に対して、教師がむやみに危機感をあおらないようにしたいものです。私たち教師が、これまで行ってきた教育活動の本質や目的を確認して、粛々と準備することが重要です。

**菅原** 入試制度がどのように変わったとしても、しっかりと基礎学力が身につけていなければ、何も不安に思うことはありません。これまで通り、教師が問題の傾向をしっかりと分析し、生徒が落ち着いて対応できるように準備を進めていくつもりです。

**山崎** 生徒には、明確な志望を描いて、その実現に向けて全力を尽くしてほしいですし、私たち教師は、それをサポートしていきます。

次ページからは、座談会で、現2年生の3年生0学期以降の指導において考えるべき具体的な視点に挙げられた思考力・判断力・表現力等の育成、面談指導、推薦・AO入試に向けた指導のヒントとなる実践を見ていく。

## 新潟県立長岡高校

## 課題の精選や授業・定期考査の改善を組織的に行い、思考力や主体性等を養う

新潟県立長岡高校では、思考力・判断力・表現力や主体性などの資質・能力を育むことこそ、これからの教育では重要になると考え、2018年度入学生（現2年生）から、課題の精選や授業・定期考査の改善などを通して、それらの資質・能力の育成に努めてきた。3年次も同様の方針の下、一層発展させた指導を展開する予定だ。

## 週末課題などを精選し、主体的な学習を促す

例年170人程度が国立大学に進学する新潟県立長岡高校では、生徒や保護者の教育・進学への期待は入学当初から高い。2018年度の新入生オリエンテーションでは、グローバル化・情報化が一層進むこれからの社会を生きていく生徒に、学校として育成を目指す資質・能力について重点的に説明したと、2学年主任の長谷川孝先生は振り返る。

「中学校までは知識重視の暗記型の学習が中心だったかもしれない

が、これからの入試や大学・社会で必要とされる資質・能力を身につけるためには、自分の頭で考える学習を積み重ねることが重要になると説明しました。そのためには、普段から自分で課題を見つけて深く学ぶ必要があり、本校ではそうした学びができるよう支援すると伝えました」

1学年団の立ち上げに際しては、担任が集まり、新たな指導方針を話し合った。主要な議題の1つとなったのが、週末課題を始めとした課題の出し方だ。同校は、元々、生徒の主体性を尊重し、課題の量を少なくして自主学習を促していた。ところ

が、教科・科目間で課題の量を調整せず別個に設定するうちに、生徒が負担に感じる量になってしまいうケースが見られていた。

「若手教師から、生徒の主体性を育むために課題を精選してはどうかという問題提起があり、多くの教師が賛成しました。ただ、いきなり課題を減らして自分で学習するように伝えても、困惑する生徒が少なくないのではないかと考え、学年を追って段階的に精選する方針としました。また、教科の特性があるため、減らし方は各教科・科目で考えてもらいました」（長谷川先生）

さらに、生徒が見通しを持って課題に取り組めるよう、各教科・科目の週末課題を整理したプリントを、生徒に配布することにした。それは、当時の2学年団が始めていた取り組みを参考にした。2学年担任（現3学年担任）の山崎健太先生は、プリントに課題をまとめた意図を次のように説明する。

「各教科・科目の課題を整理して提示すれば、生徒は学習の見通しを持ちやすくなることに、教師も他教科・科目の状況を意識して計画的に課題を設定できるようになります。また、本校は部活動が盛んなため、長期休業中は遠征や合宿などで忙しい生徒が多いのですが、早めにまとめて課題を提示すると、学習計画を立てやすくなります。生徒によつては長期休業に入る前に課題を終わらせ、その後は自分の状況に合わせた自主学習に取り組む姿がみられるようになりました」

## 自ら立てた課題を行う習慣をつける

では、具体的にどのような課題を精選したのか。



**2学年担任**  
**牧口昌範**  
まきぐち・まさのり  
教職歴8年。同校に赴任して3年目。進路指導部。数学科。



**2学年担任**  
**石川絵梨子**  
いしかわ・えりこ  
教職歴12年。同校に赴任して7年目。英語科。



**3学年担任**  
**山崎健太**  
やまざき・けんた  
教職歴15年。同校に赴任して4年目。進路指導部。理科(物理)。



**2学年担任**  
**長谷川 孝**  
はせがわ・たかし  
教職歴17年。同校に赴任して4年目。進路指導部。数学科。



**2学年担任**  
**本田大輔**  
ほんだ・だいすけ  
教職歴20年。同校に赴任して7年目。進路指導部。英語科。



**3学年主任**  
**木山和幸**  
きやま・かずゆき  
教職歴30年。同校に赴任して5年目。進路指導部。理科(生物)。

従来の数学科は、週末課題は問題集のページや個別の問題を指定し、期日までに全員に提出させていた。それに対して、現2年生の理科では、1年次の最初から、2週間ほどの期間ごとに大まかな範囲を示し、「自分のペースで計画的に取り組む」

**新潟県立長岡高校**

- ◎「和而不同」「剛健質樸」「豪爽快活」を伝統の精神に掲げる。2018年度、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校(3期目)。
- ◎設立 1872(明治5)年
- ◎形態 全日制/普通科・理数科/共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2019年度入試合格実績(現役のみ)  
国公立大は、北海道大、東北大、東京大、新潟大、大阪大などに176人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、立教大、早稲田大、立命館大などに延べ455人が合格。
- ◎URL <http://www.nagaoka-h.nein.ed.jp/>

「簡単に解けると判断した問題はやらなくてよい」といった方針で課題に取り組むように指示した。初めは生徒の学習状況を把握するため、各自が取り組んだ範囲のノートを提出させた。そして、生徒が主体的に学ぶ姿が見られた2年次半ばからは、週末課題を出さず、各自が計画的に学習を進めるように指導している(図1)。

「理数科には数学が得意な生徒が多いため、最初からほとんどの生徒は主体的に取り組んでいました。簡単に解ける問題に取り組まなくてよい分、自分が設定した課題の学習に時間を充てられるようになり、学路上位層の中には、早々に課題を終わらせて、発展的な問題や大学で扱う

図1 1年次と2年次での週末課題の変化(数学科の例)

**1年次**

指針や解説をよく読み、以下の内容を専用のノートに解答して提出すること。

- ①使用教材 問題集(数学I・A)
- ②範囲 【普通科】練習6~8、10~12、14~16  
※さらに上を目指す者は、練習9、13、17~19  
【理数科】練習10~19
- ③提出 4月23日(月)  
※ノートに解答だけでなく、「問題文」も必ず書くこと。  
※分からなかったら、練習問題の上の「例題」を見ること。または仲間と協力すること。  
※解答は誰が見ても分かるように丁寧にすること。  
※解答が終わったら、○つけ、直しをすること。  
提出は数学係の指示に従うこと。

**2年次**

【普通科文系】小期末考査の復習及び期末考査に向けての学習を進める。6月17日(月)に学習したノートを提出してください。問題集もこつこつ進めよう。

【普通科理系】期末考査の範囲が配られました。計画的に学習しよう。土曜講習の解き直し、小期末考査の解き直し、問題集、何でも結構です。数学係は学習したノートを6月17日(月)に回収し、担当の先生へ提出してください。

普通の学習は数学の力を上げていくことが目的ですから、答えを出すことにこだわってはいけません。1年後を見据えて、正しい努力を積み重ねましょう。

【理数科】別紙参照。自分に必要な勉強を考え、計画的に学習すること。

\* 学校資料を基に編集部で作成。

問題にチャレンジし、質問に来る生徒もいました」(長谷川先生)

一方、同2年生の普通科では、1年次には例年通り小刻みに課題を設定し、まずは学習習慣の確立を目指した。2年次になると、定期考査や小テストの範囲を1~2か月前に提示し、自分で学習計画を立てさせるようにしたと、2学年担任の牧口昌範先生は説明する。

「生徒には、結果だけでなく、自

分で課題を見つけて解決していくプロセスが大切だと話しました。多くの生徒は自分なりに目標を設定し、しっかり取り組んでいる印象を受けました。以前と比べて『やらされている』という感じを受けなくなったのは、大きな変化です」

英語科でも、課題の出し方を再検討している。1年次は文法やエッセー・ライティングなどの基礎をしっかりと身につけさせるため、例年

と大きく変わらない量を設定したが、課題の内容によって提出を任意とするなどして、生徒の負担軽減を図った。

### 主体的に学べない生徒には 課題設定の仕方をサポート

課題の精選に伴い、学力が低下するのではないかとの懸念もあったが、定期考査や模擬試験の結果から、例年と比べて大きな変化はないと捉えていると、長谷川先生は語る。

「学力が低下しなかったことは、大きな安心材料となりました。生徒の主体性は高まっていますから、3年次に例年以上に大きく伸びてくれることを期待しています」

一方、少数ながら、主体的に学びに取り組めていない生徒がいるのも事実だ。

「そうした生徒の中には、自分の学力や学習状況に合わせた課題を見つけれず、いきなり難しい問題を解こうとする者がいます。結果、解けず、学習意欲が低下してしまう姿が見られました。そのため、どのようにして自分のレベルに合った問題を見つければよいのかといった点に

ついてもサポートしていきます」(長谷川先生)

3年次までの課題については、2年次3学期までの生徒の学習状況を踏まえて検討するが、2年次よりも一層課題を精選し、教科・科目によっては課題を出さない方針を採ることも考えている。

「これまで、自分の課題を見つけて学習計画を立て、学習するというプロセスを繰り返し、主体性を育んできました。そうした資質・能力が、3年次から本格化する入試対策にも生かせるようなサポートを検討していきます」(長谷川先生)

### 定期考査を改善し、 思考力や表現力などを問う

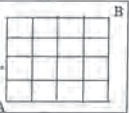
現2学年では、定期考査の出題内容・方法も以前と変えた。課題の精選と同様、新学年の立ち上げに際し、思考力・判断力・表現力を高める上では、定期考査の改革が欠かせないと考えたからだ。

数学科では、1年次2学期から、定理・公式を使いこなせれば解ける問題のほかに、日常生活の事象を扱ったり、会話形式で事象について

図2 普通科1年次「数学I・A」の2学期中間考査(抜粋)


5 ある日、数学の授業で次のような宿題が出された。

宿題 <例>のような最短経路の数の問題を自作せよ。ただし、自分で答えられるものにする。  
<例> 右の図において、AからBまでの最短経路は何通りか。



次の授業で、太郎さんと花子さんはペアになってお互いの作ってきた問題を解き合うことになった。二人の会話を録んで、以下の問に答えよ。

<花子さんの問題>  
右の図において、AからBまでの最短経路は何通りか。



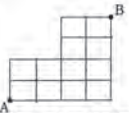
太郎: これは授業で習ったようにして計算できそう。最短経路は、右に4回、奥に4回、上に1回進めばいいから、同じものを含む順列と考えると、(あ)という式で計算ができるね。答えは(い)通り!

花子: 正解!(あ)の式は(う)という式でも計算ができるよ。

(1) (あ) (う)に入る計算式を答えよ。ただし、解答の順番は問わない。また、(い)に入る数を答えよ。

(あ) (う) (い)

<太郎さんの問題>  
右の図において、AからBまでの最短経路は何通りか。



花子: 最短経路は右に4回、上に4回進めばいいけど、簡単には計算できなさそう。

\*学校提供資料を抜粋して掲載。

考察したり、答えだけでなく過程を記述させたりする問題を、理科で3〜4割、普通科で1〜2割出題している(図2)。定期考査ごとに作問を担当する教師を決め、その教師が作成した問題案について、教科内で意見交換をし、実際に出す問題を完成させていく。

「学力上位層の生徒も深く考えないと解けない問題が多く、平均点はやや下がりました。それでも解答用紙には意欲的に解こうとする姿が見られ、多くの生徒が前向きにチャレンジしています」(長谷川先生)

英語科では、小説の読解が苦手な生徒が多かったため、授業においてサイドリーダーで海外の文学作品を扱い、長文読解に慣れさせた。その上で、定期考査の配点の3割ほどは、サイドリーダーから抜き出した長文の読解問題を出している。また、書く力も評価するよう工夫している。

2学年担任で英語科の本田大輔先生は、次のように説明する。

「教科書に登場したテーマに関連するエッセー・ライティングを課題に出し、定期考査ではその類題を出して書く力を評価しています」

国語科では、今年度から、それまで50分間だった試験時間を60分間とし、長文を読ませたり、自分の考えをしっかりと考えて記述させたりする出題内容にした。

2年次までの取り組みを引き継ぎ、3年次も各教科・科目において思考力・判断力・表現力等を評価する出題を増やしていく方針だ。

### 思考力や主体性の育成を念頭に、各教科・科目で授業改善を推進

思考力・判断力・表現力や主体性を高めるための授業改善も進めている。長谷川先生は、担当する数学の授業で、毎授業、学び合いの時間を設定している。

「長時間、グループ学習にすると緊張感が薄れてしまうので、数題のうち1題をグループで取り組ませています。話し合いを重ねるうちに、それまで受け身の姿勢が目立った生徒が、数学が得意な生徒に質問して能動的に取り組む姿が見られるようになりました」（長谷川先生）

理科では、グループで問題作成に取り組ませるなど、発展的な活動も取り入れている。そうした学び合

いが定着するにつれ、授業中に自然と近くの生徒と相談し始めたり、放課後に自主的に勉強会を開いたりする姿が見られるようになった。

現3学年でも思考力・判断力・表現力等の育成を目指した授業改善を進めており、次年度の3学年の授業づくりの参考に考える。

現3学年の理数科発展クラスの英語科では、教科書で学習したアパルトヘイトについての発展的な内容として、「共同体として、過去の罪にどう向き合うか」をテーマに、知識構成型ジグソー法（\*）で思考を深め、英語で議論した後にエッセーを書く授業を行った。授業を担当した進路指導主事で英語科の石川絵梨子先生は、考えを話したくなる授業構成が重要だと話す。

「ほかにも、遠距離恋愛について本文を基にロールプレイを行うなど、生徒が話したいと思うテーマを年数回設定しています。さらに、英文を読んでその内容を要約し、自分の考えをつけ加えて話すなどのパフォーマンステストで、英語運用力を評価しています」（石川先生）

また、多くの教科・科目で、教科書の学習の終了後は問題演習が中心

となるが、3学年主任の木山和幸先生の生物では、グループ学習を積極的に取り入れている。

「グループ学習では、クラスメートが解き進める様子を見たり、他者に教えてもらったりする中で、『そういう考え方があるのか』『問題文のここに注目すればよかったのか』といった発言から、視野が広がったり、考えが深まったりする様子が見られます。また、生物は暗記科目と捉えている生徒もいますが、自分が解けなかったのは、実は思考力が足りないからだと気づく者もいます」

3年次の物理でも、積極的にグループワークを取り入れている。

「生徒の中に、入試科目でないことを理由に、授業に消極的に臨む者がいても、グループワークを取り入れることで、そうした生徒も他者に貢献する喜びから前向きに学ぶようになります」（山崎先生）

### 2回の志望理由書の作成を通して、目標を明確にさせる

生徒を主体的に学習に向かわせるためには、自主学習に取り組む時間

習に対する明確な動機づけも不可欠だ。そこで、1年次からキャリア教育を通して自分の生き方や社会とのかわりをじっくりと考えさせて、2年次の7月と12月に、志望理由書を書かせる指導を取り入れた。

「1回目は、考えがまとまらず書けない生徒が多くいます。その後、研修旅行やオープンキャンパスなどの経験を通じて、自分に何が足りなかったのかを深く考えさせてから2回目の志望理由書の作成に取り組ませます。目標を明確にさせることで、学習への意欲を高めることをねらいとしています」（長谷川先生）

今後、2年生から3年生に進級するにあたり、教科・科目間の目線合わせを一層大切にし、生徒の希望進路実現に向けてサポートしていく。

「例年は教科・科目ごとの指導が主体でしたが、学年団内で意見を交換する機会を増やして組織的に取り組んでいきます。そして、教科学習に加え、ポートフォリオとして蓄積した学びや部活動、行事などの記録と振り返りを促す指導も充実させて、一人ひとりの生徒が人間的に成長していけるような支援を続けていきたいと考えています」（長谷川先生）

\* ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

## 岡山県立倉敷青陵高校

## 生徒に考え、語らせるカウンセリング型の面談で、生徒の内なる変容を促す

岡山県立倉敷青陵高校では、生徒との面談を「キャリアカウンセリング」という名称とし、生徒に自分の内面に向き合わせて、その考えを語らせ、教師はじっくり聞く、カウンセリング型の面談を行っている。生徒自身の言葉で将来や志望について語らせることで、高い志望を選択する支援をしている。

## 生徒が自身の生き方を考え、その実現に向けた課題に気づく場

県内でも有数の進学校である岡山県立倉敷青陵高校は、生徒の志望をより大切にしながら進路指導を行っている。進路指導課長の田中誠一郎先生は、そのねらいを次のように語る。

「生徒の志望は、自身の夢や思い描く未来を踏まえたもの、最大限に努力して達成するような高いものであってほしいと考えています。そうした志望を持てるようになるためには、自分の内面を客観的に捉え、今後どういった生き方を望んでいるの

か、大学で何を学びたいのか、その志望を実現するために自分に何が足りないのかを、自分の言葉で語れるようにすることが必要です。自身の夢や思い描く未来を踏まえた進路であれば、必然的に高い志望となります。そこで、生徒と1対1で向き合う面談で、生徒が自身の課題に気づき、目標達成に向けた道筋を描けるような指導をしようと考えました」

同校では、以前から生徒との面談を重視してきたが、必ずしも生徒の自己認識を促し、主体性を引き出す場になっていたわけではなく、教師の方から生徒の課題を指摘し、叱咤

激励する場になるケースも少なくなかった。

また、1年次から進路学習を積み重ねてきても、自身の将来の希望を答えられない生徒もいた。そうした生徒の中には、模擬試験等の成績が下がると弱気になり、合格可能性が低いという理由だけで志望校を変えてしまう者がいることも、進路指導上の課題だった。そこで、2018年度から、生徒との面談を「キャリアカウンセリング」という名称とした。

「生徒が自身のキャリア形成の視点で進路を考えているかどうかを、

## 岡山県立倉敷青陵高校

◎校名の由来は「永遠の理想を追求する青春の陵(おか)。「文武不岐」をモットーとし、「高質な学力の養成」を学校経営目標に掲げる。部活動では、弓道部や陸上部、競技かるた部などが全国大会で活躍。

◎設立 1908(明治41)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2019年度入試合格実績(現浪計) 国

公立大は、北海道大、東京大、名古屋大、

京都大、大阪大、神戸大、岡山大、九州大

などに228人が合格。私立大は、慶應義

塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関

西学院大などに延べ387人が合格。

◎URL <http://www.seiyo-okayama-c.ed.jp>



進路指導課長  
田中誠一郎  
たなか・せいちろう

教職歴25年。同校に赴任して5年目。学習指導研究室。



進路指導課主任  
岡本崇志  
おかもと・たかし

教職歴15年。同校に赴任して11年目。学習指導研究室。



進路指導課主任  
湯浅太一  
ゆあさ・たいち

教職歴15年。同校に赴任して5年目。ICT活用推進室。

教師は面談でしっかり確かめなくてははいけません。「面談を『キャリアカウンセリング』という名称にすることで、キャリア教育の視点とカウンセリングマインドを持った面談に、全校的に転換することをねらった

図1 3年間の進路指導と、キャリアカウンセリングの時期とテーマ例

	第1学年	第2学年	第3学年
目標	学校活動への適応 適性、能力に基づく文理選択 期限を区切って成功体験	志望校群の設定 文系/理系らしい学力 受験学年に向けての意識づけ (難関大学志望者は早めのスタート)	併願大学の組み合わせの確定 実力の見極め カウンセリングを通じて学力/ 心境のフォロー
4	ビギニングセミナー・模擬試験 【入学直後・習慣形成】 1日総合学習	ビギニングセミナーⅡ 【春季休業中の過ごし方】 【連休前後・中だるみの回避】	ビギニングセミナーⅢ 実力考査 進路希望調査 模擬試験
5	【連休明け】 地域総体 中間考査 【中間考査の結果】	【連休明け】 地区総体 中間考査	【連休明け】 地区総体 中間考査 【引退後の焦り】
6	実習生講演 県総体 実力考査 進路希望調査 進路 LHR 【実力考査の結果】	実習生講演 県総体 実力考査 進路希望調査	県総体 実力考査 進路希望調査 模擬試験 【センター試験/個別学力検査の 学習方針】
7	期末考査 模擬試験 保護者懇談 模擬試験  【1学期の締め→文理選択への意識】	期末考査 模擬試験 保護者懇談  【夏季休業に向けて】	期末考査 模擬試験 第1回検討会 【三者懇談 夏季休業中のテー マ、志望校の広がり、推薦入試 の布石】 模擬試験
8	Future Watching (職場) 【夏季休業明け】  青陵祭準備	Future Watching (大学) 【夏季休業明け】  青陵祭準備	サマーセミナー 【夏季休業明け・個別学力検査へ の対応力養成 (特に難関大学)】 模擬試験 青陵祭準備
9	青陵祭 【青陵祭明け】 学習実態調査 進路希望調査  【文理選択予備調査】 【文理選択予備調査前後】	青陵祭 【青陵祭明け・受験生への変身】 実力考査 進路希望調査	青陵祭 【青陵祭明け・切り替え・模擬試 験への意識づけ】 実力考査 進路希望調査 模擬試験
10	模擬試験 合同保護者会【保護者会後】  模擬試験	【科目選択予備調査】  模擬試験	第2回検討会 模擬試験 【推薦・個別学力検査・併願大学 の組み合わせ・センター試験対 策の時期】 模擬試験
11	【実力考査前後】 実力考査 進路希望調査 【期末考査前】	【実力考査前後】 実力考査 進路希望調査	【実力考査前後】 実力考査 進路希望調査 推薦入試
12	期末考査 保護者懇談 【保護者懇談前後】 【冬季休業前】	期末考査 保護者懇談 【保護者懇談前後】 【冬季休業前】	期末考査 第3回検討会 【併願パターン・二次科目】
1	【冬季休業明け】 模擬試験 【実力考査前後】 実力考査 進路希望調査	【冬季休業明け】 【3年生0学期】 模擬試験 実力考査 進路希望調査	センター試験 第4回検討会 【出願指導・個別学力検査の見極 め・今までの経緯】
2	模擬試験	模擬試験	個別学力検査指導
3	学習会 模擬試験 【春季休業前・中だるみの回避】	模擬試験 【春季休業前・先行スタート最後 のチャンス】	【最後まで粘る】

【 】内は、キャリアカウンセリングのタイミング・テーマ例。

\*学校資料を基に編集部で作成。

ものです」(田中先生)  
年間行事に組み込まれているキャ  
リアカウンセリングは、年5回(4・  
6・9・11・1月)で各10日間。キャ  
リアカウンセリングという名称にし  
た後も、実施の時期や頻度は以前の  
ままとした。実施の時間帯は昼休  
みや放課後で、全生徒を対象に行う。

3年次は、それに加えて7・10・  
12・1月の進路検討会の直後に保護  
者懇談(三者懇談)も実施。以上が  
定期的なものであるが、面談自体は、  
必要に応じて随時行っている。  
学年・時期ごとのキャリアアカウン  
ティングの主なテーマは、進路指  
導の年間計画の中に示している(図)

1)。例えば、1年次の7月は「1  
学期の締め→文理選択への意識」  
2年次の4月では「連休前後・中だ  
るみの回避」、3年次の5月は「引  
退後の焦り」と、生徒の状況や行事  
などを考慮したテーマとしている。

### 教師が話しすぎて、 生徒が考える機会を奪わない

キャリアアカウンティングを効果的  
に行うポイントは、生徒が自分で考  
え、語る場にあることだと、進路指  
導課主任の岡本崇志先生は語る。

「教師は、つい一方的に助言をし  
てしまいがちですが、それでは、生  
徒は受動的に話を聞くだけで、教師  
の助言の枠を超えて考えることはで  
きません。結果的に、生徒の可能性  
を狭めてしまうことになってしま  
います。教師は、言いたいことがあ  
っても、いったんはぐっとこらえ、生  
徒が自分の考えを整理し、それを言  
葉にするのを根気強く待つ姿勢が求  
められます。長い沈黙が続くことが  
あっても、それでも待つのです」  
生徒に考えさせるためには、その  
場で無理に結論を出させないように  
することも重要だ。せっかくなら  
んでいるのだから、生徒も教師も何  
かしらの方向性を決めようとしがち  
だが、必ずしも1回のキャリアアカ  
ウンティングで結論を出す必要はない  
というのが、同校の方針だ。

また、考えることを生徒に委ねた  
ため、面談時間が長引かなくなった。

「教師が生徒に合った方策を考え、納得のいく結論を出そうとすれば、当然時間はかかります。しかし、キャリアアカウンセリングでは、必ずしもその場で結論を出すとはいりません。生徒が結論を出せないなら、『1週間考えてみたら』と生徒に投げかけ、潔くその日のカウンセリングは切り上げています」(田中先生)

### 内省を繰り返し、自己分析力やメタ認知能力を高める

教師がジャッジをしないことも、キャリアアカウンセリングの重要なポイントだと、田中先生は言う。

「時に、教師は生徒から信頼を得ようと、自身の価値観に基づいて生徒の行動や考えを評価しようとすることがあります。しかし、カウンセリングは、あくまで生徒自身に自己認識を深めさせ、内面的な成長を促す行為です。教師の主観に基づいたジャッジをするのではなく、客観的なアセスメントを返す場であること意識するようにしています」

キャリアアカウンセリングで教師が重視しているのは、生徒に自身の状況をメタ認知させるための問いかけ

だ。例えば、成績不振に悩む生徒に、「ここができていないね」「この点数で志望校合格は大変だよ」と言うのではなく、「今どんな気持ち?」「自分に足りないものは何か?」など問いかけることで、生徒自身に課題に気づかせるようにしている。

「教師が生徒を変えるのではなく、生徒自身が『自分は変わった』『ここを変えよう』と思えるような声かけが大切です」(岡本先生)

教師が問いかけても、課題に気づけない生徒には、専門的な立場から助言する。その際も、「○○をしない」といった指示ではなく、校内実力テストや模擬試験の結果を生徒と一緒に見ながら、「どこが課題だと思う?」「これから何をすればよいか?」と内省を促す。

また、課題の対応策を考えられない生徒には、「同じ部分でつまづいている生徒は、○○することで解決する場合がありますよ」「先輩の体験を見ても、合格した人はこの時期にここまでできていたよ」と、教師の経験の中から事例を示す。進路指導課主任の湯浅太一先生は、こう語る。

「教師の助言をどう受け止めるかは、生徒次第であり、本人が納得し

なければ変容は起こりません。生徒自身に判断させ、その後の行動を教師は見守る。そうした内省の繰り返し、生徒の自己分析力やメタ認知能力を高めていくと考えています」

### 内面を揺さぶられる経験がその先の人生の糧に

生徒が志望理由を明確に持てるようにすることも、キャリアアカウンセリングの目的の1つだ。

同校では、2年次の2学期に、今後の努力で十分合格が見込める「実力相応校」を基準に、さらなる努力が必要でも本当に入りたい「チャレンジ校」と現状維持で合格可能性の高い「合格確実校」を確認させ、「チャレンジ校」を志望校群における第1併願パターンとして意識させて志望校群を考えさせる。そうした指導もあり、3年次までに大半の生徒は志望校が明確になるが、それが本当に志望する大学なのかを突き詰めて考えさせる場を3年次に設けている。

その1つが、3年次5月に行う志望理由書の作成だ。大学で学びたい学問や、それが将来にどう結びつくのかを800字にまとめる活動を

通じて、志望校への思いを強くする生徒もいれば、志望理由があいまいだったと気づき、悩む生徒もいる。

「志望校への強い思いがあれば、厳しい状況になっても意志を貫こうと努力し、結果的に合格可能性が高まります。面談を丁寧に行っているからか、この時期にすらすらと書ける生徒が多いです」(湯浅先生)

志望理由書の内容があいまいな生徒には、個別に「大学で何をしたいの?」「志望を実現するためには、次の模擬試験で何点取る必要がある?」などと問いかけ、なりたいた自分をイメージさせるとともに、今の自分と理想とのギャップに気づかせることで、生徒の変容を促している。

教師と対話を積み重ねても、明確な理由がないまま志望校に合格し、進学する生徒もいる。それでも、生徒がキャリアアカウンセリングを通して自分自身と向き合った経験は無駄ではないと、田中先生は強調する。

「自分の可能性について考えたり、自分の思い描くキャリアと実社会を照らし合わせたりすることは、生徒の成長にとって必要なプロセスであり、結論は出なくても、そうしたプロセスを経験することが重要です。

将来、人生の岐路に立った時、自ら未来を切り開いていけるようにするためにも、キャリアアカウンセリングでは、生徒の心を揺さぶり、葛藤させる場を意図的につくっています」

**生徒の発言を記録するカルテで連続性のある進路指導を実現**

同校の教師は、平均年齢が50代とベテランが多い。指導経験が豊かで、自分なりの面談スタイルを持っていて、当初はキャリアアカウンセリングへの転換に戸惑いの声もあった。そこで、19年5月、高校での勤務経験のあるキャリアコンサルタントの講演会を行った。当日は、講演以外に、参加者が教師役・生徒役となつてカウンセリングのロールプレイングも行い、カウンセリングで求められるマインドやスキルを学んだ。

教師同士でカウンセリングスキルを高め合う機会も設けている。同校は2人担任制のため、キャリアアカウンセリングを担当2人と生徒1人で行う場合もあれば、クラスを半分に分けて1対1で行うこともある。若手教師や異動してきたばかりの教師は、同校の赴任歴の長い教師とペア

を組み、2対1でキャリアアカウンセリングを行うことで、カウンセリングのノウハウを共有している。

職員室は、学年団ごとに机が配置されており、キャリアアカウンセリングの時期には、職員室のあちこちで生徒と教師が向き合う姿が見られ

る。教師がどのような姿勢で生徒に接しているのか、どんな話をしているのかを見聞きでき、それらも教師の学びにつながっている。

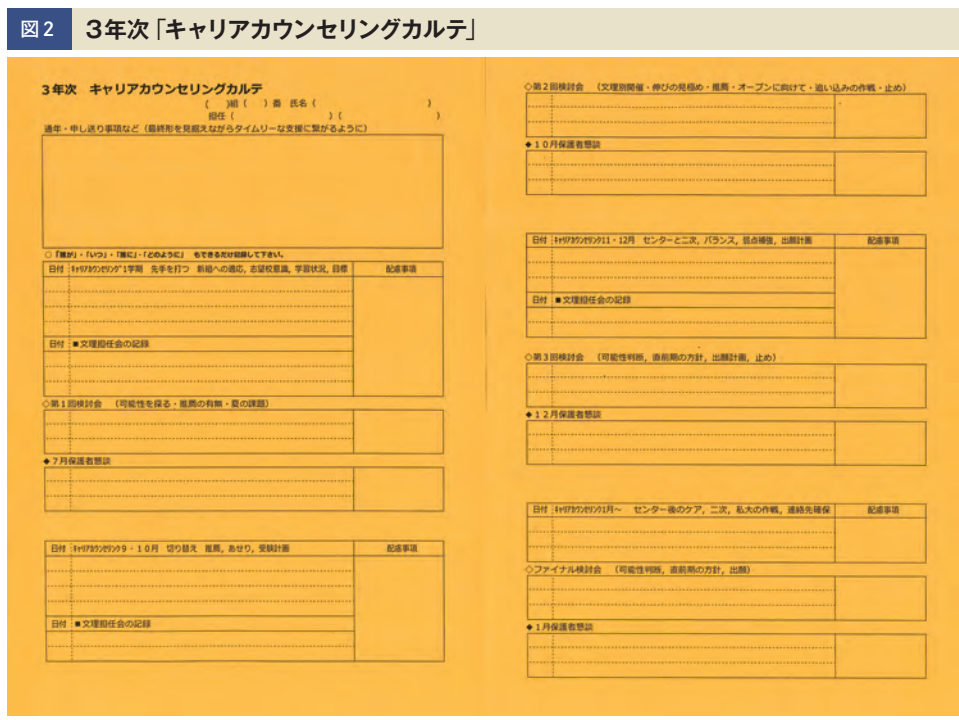
キャリアアカウンセリングや保護者懇談の内容は、生徒一人ひとりの「キャリアアカウンセリングカルテ」

に記録する(図2)。カルテの書式は、全学年で統一し、進級時には次の担任にカルテを渡して、生徒の志望や内面の変化を学年を超えて共有し、指導に生かしている。同カルテは、教師のカウンセリングマインドを高める面でも効果があるという。

「カルテに記録された生徒がカウンセリング時に語った内容から、教師がどのように生徒と接してきたのかが分かります。そこで、生徒の言葉を改めて捉えて、生徒が考えを深められるカウンセリングができていくのかを振り返り、次のカウンセリングに臨んでいます」(岡本先生)

新しい入試制度の下、受験をすることになる高校2年生。その変化を成長の糧にしてほしいと、田中先生はエールを送る。

「難関大学に合格したから、手に職をつけたから、一生安泰という時代ではもはやありません。変化に応じて自身を柔軟に変えるしなやかさや、打たれ強さがより求められる社会になっていく中で、それを試されているのが今の高校2年生なのかもしれません。変化を乗り越えることで、自ら人生を切り開いていく力に身をつけてほしいと願っています」



キャリアアカウンセリングで生徒が語った内容や、教師の気づきを記録する「キャリアアカウンセリングカルテ」。年間計画に組まれているキャリアアカウンセリングについて、実施月とテーマが記載されている。  
\*学校資料をそのまま掲載。

## 東京都・私立広尾学園中学校・高校

## 研究過程での生徒の変容・成長を丁寧に見取り、推薦書や志望理由書を練り上げる

私立・広尾学園中学校・高校の医進・サイエンスコースでは、生徒が学びで得た成果の本質に気づけるよう、振り返り指導を徹底している。ポートフォリオに日々の学びを蓄積し、志望理由書の作成や面談などを通じて気づきを促して、教師は生徒を丁寧に見取る。そうした指導の結果、学びのプロセスの評価に重きを置く推薦・AO入試でも、多くの合格者を輩出している。

## 研究室など、教育環境まで調べ、志望校を選択

東京都・私立広尾学園中学校・高校の医進・サイエンスコースは、医学部や理系学部を目指す生徒向けに設置されているコースだ。授業、研究活動、中高大産学連携を教育活動の3本柱とし、それらを支えるツールとして、英語教育やICT教育にも積極的に取り組み、生徒が本物に触れながら、本質を捉え、楽しみながら学ぶための環境が整備されている。

教育活動の3本柱の中で、生徒の

進路選択に大きな影響を与えているのが、中高6年間を通して行われる研究活動だ。中学校から「理数研究」という授業で研究の基礎を学び、自身の興味・関心を基に、幹細胞、植物、環境化学、理論物理、数論、現象数理の6つの研究チームの中から1つを選び、自身で研究テーマを設定して、研究に取り組む(写真)。

そうした同コースの教育活動は、大学が求めるような資質・能力の育成に結実しており、学びのプロセスを評価する東京大学の推薦入試や京都大学の特色入試などで合格者を輩出するに至っている。

志望校選択では特に、生徒の志向が明確であることと、その志向が大学の求めるものに合致していることが重要になると、医進・サイエンスコース統括長の木村健太先生は指摘する。

「生徒が適切な進路を選ぶためには、大学が育成を目指す学生像や、その実現に向けて行う教育の内容を調べて、自分が学びたい内容と合致している大学かどうかを、生徒自身が主体的に考えることが重要です。ただ、生徒の知識の及ぶ範囲で考えた結果が、自分が選ぶべき志望に合致していないこともあります。例えば



医進・サイエンスコース統括長  
木村健太  
きむら・けんた  
教職歴13年。同校に赴任して11年目。

ば、本人は、自分のやりたいことは生物学にかかわるものだと思っても、実際は化学の分野で解析が進められているといったことはよくあります。そうした不一致を防ぎ、最適な進路指導を行っていくのが、学問に精通している教師の役割だと捉えています」

生徒は、大学が掲げるディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーはもちろん、研究室についても調べて、大学の特徴を理解した上で志望校を考え

東京都・私立広尾学園中学校・高校  
◎ 順心女学校として設立。2007年度、現校名に改めて共学化。現在は、本科、医進・サイエンス、インターナショナルの3コースから成る。本科コースは完全中高一貫教育を行う。

◎ 設立 1918 (大正7) 年

◎ 形態 全日制/普通科/共学

◎ 生徒数 1学年約280人

◎ 2019年度入試合格実績(現浪計) 国立大は、北海道大、筑波大、東京大、京都大、大阪大などに54人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大学、早稲田大に延べ168人が合格。医学部医学科に73人が合格。海外大学に74人が合格。

◎ URL <https://www.hiroogakuin.edu.jp>



写真 同校では、物理、化学、生物それぞれに「サイエンスラボ」を設計、最先端の実験機器、設備を完備。生徒は、授業だけでなく、放課後や土曜日も活用して、研究活動に取り組んでいる。

ていく。それでも、生徒の目では自身の志向とその大学が合致しているのかを、見通し切れない場合もある。そこに適切な情報に触れられる機会をつくっていくことが進路指導の役目だと、木村先生は捉えている。

### コースに所属する教師団で常に生徒の情報を共有

同コースの生徒は、研究活動の過程で数多くの研究論文を読む。そこで興味深い論文を見つけた際には、論文の著者である大学教員が所属する大学・学部・学科や研究室のウエ

ブサイトを閲覧し、教育内容や研究テーマを調べることで、自分の志望に合った大学・学部・学科を絞り込んでいくケースが多い。そして、その中から、推薦・AO入試での受験を希望する生徒も現れる。

「学科や研究室の内容を調べる際には、この数年間で出された論文の数と質、科学研究費助成事業（\*1）などに採択されている研究テーマ、教員1人あたりの学生数など、着目すべき項目を確認していきます。志望が明確ならば、それが実現できる環境かどうか、入学後のキャリアも考えながらできるだけ具体的に検討していきます」

生徒は、推薦・AO入試を見据えて研究活動に取り組むわけではない。研究を進める過程では、専門科目への理解が深まるのはもちろん、他教科・科目への興味も広がっていく。結果的に一般入試で求められる力も身につけていく。推薦・AO入試は、あくまでも受験の際の選択肢の1つという認識だ。

研究指導は、それぞれの分野を専門とする教師が担当するため、生徒は、担任や授業担当者以外の多くの教師とかかわりながら高校生活を送

る。そうして、多様な分野の価値観に触れながら、自らの進路を模索していく。

「それぞれの生徒の情報は、教師間で常に共有しています。複数の教師によって、生徒の長所や課題を多面的に捉えることで、研究活動の指導を適切に行えるとともに、生徒一人ひとりの個性に応じた対応が可能になっていきます。推薦・AO入試の出願書類の作成にも複数の教師がかかわるため、多様な観点からの推薦事由を記載できています。そうした指導体制が構築できていることは、本コースの大きな強みです」

今後の推薦・AO入試の募集定員が拡大していけば、受験希望者が増え続けることが予想される。担任1人に生徒への指導や出願書類の作成を負わず、教師団で協働することがますます重要になると、木村先生は考えている。

### 推薦書には、生徒の成長のストーリーを書き込む

推薦書の準備にあたっては、教師は生徒と適宜面談を行い、生徒から内面の変容などを聞き出しながら推

薦書に書く内容を練り、完成度を高めている。

木村先生は、コンテストでの受賞歴など、実績をアピールするだけの推薦書にはしないと語る。

「生徒がどういった課題意識の下に研究テーマを設定し、そのテーマをどのように深めていったのかを、推薦文に盛り込むこともあります。研究活動のプロセスと、それを通して生徒が得た気づきや学び、生徒の変容・成長を、具体的なストーリーにして伝えることが大事だと考えています」

推薦・AO入試での面接は、通常、出願書類の内容を掘り下げる形で質疑応答が行われる。そのため、推薦書は、サッカーに例えれば、教師からのゴール前の生徒へのアシストパスだと、木村先生は言う。高校での活動内容や実績を列挙しただけの推薦書では、面接官からの質問は表面的なものにとどまってしまう、限られた面接時間の中で、生徒は自分という人間を面接官に知ってもらうことが難しくなる。つまり、教師からの生徒へのパスは通らない。生徒はシュートを打つチャンスを得られず試合終了となってしまう。

\*1 文部科学省及び独立行政法人日本学術振興会が行う事業で、国内の研究機関に所属する個人・グループが行う研究に対する助成金のこと。

☒ 推薦・AO入試の推薦書に記載した内容と、推薦文作成の留意点

■推薦理由

本生徒は、理学研究者としての姿勢が確立した生徒である。とりわけ、生徒自らが研究テーマを策定してきた過程とその姿勢は特筆に値する。研究テーマを探すにあたっては、単に興味があるというだけでなく、社会的なニーズがあること、ある程度の実現可能性が見込めること、そして、高い新規性を有することというハードルを意識してきた。そのため、高校1年生の段階から読んできた原著論文は40本近くにのぼる。[高校入学当初は、デュシェンヌ型筋ジストロフィーの遺伝子治療に関心を寄せていたが、その関心は、骨格筋の幹細胞である筋衛星細胞の維持機構へと移り、さらには、ES細胞を含めた幹細胞全体に共通した未分化能の維持機構やiPS細胞の初期化のメカニズムへと広がった。そこから、再生医療への応用を踏まえて、細胞培養における条件検討(酸素濃度がES細胞に与える影響)へと落とし込んでいった。]

ポイント1

本生徒に理学的なセンスを感じるのには、低酸素条件下で培養しているとES細胞のコロニーの顔つきがおかしくなるという日々の観察に基づく漠然としたものを最終的なテーマに選んだことだ。一般に、初めて原著論文を読んだ生徒はその論文にこだわり、内容を少し発展させただけの重箱の隅をつつくようなテーマを立てる傾向がある。しかし本生徒は違う。「iPS細胞を扱いたかったんじゃないの?」という問いに対して、「iPS細胞は山中先生が面白くしてきた分野ですよね。現段階ではまだ面白くないと思われるものを面白くすることが私の仕事だと思っているので、iPS細胞よりも私らしいテーマを進めます」と語る。本生徒には、大いなる可能性を感じている。(以下、略)

ポイント2

◎ストーリー作成のポイント

活動実績とともに、どんな課題意識の下でテーマを設定し、どのように深めていったか、生徒が研究に取り組んだプロセスと、それを通じて生徒が得た気づきや生徒の変容・成長を、1つのストーリーにした。

ポイント1

生徒の研究テーマに対する課題意識の深さや研究活動のレベルを示す。生徒が、限られた面接時間内に相応の質問を受けて、面接官に自分のことを十分伝えられるようにするための工夫。

ポイント2

生徒が「何をしたか」だけでなく、「何を考えたか」まで具体的に記載した。生徒の資質・能力や興味・関心の方向性と成長を伝えるための工夫。

\*学校資料を基に編集部で作成。

一方、生徒の研究テーマに対する課題意識の深さや、研究活動がどのレベルにまで達しているかが具体的に推薦書に書かれていれば、面接官は、それらを踏まえた深い質問を面談の冒頭からできるようになり、生徒は自分のことを十分に伝えることができる。生徒は、教師からの絶妙なパスを受けることで、シュートチャンスが生まれるというわけだ

☒。

研究活動では、テーマが確定するまでに長い時間を要したり、想定していた仮説が否定されるような実験結果となったりすることもあるため、すべての生徒が何らかの賞を受けるような研究成果を得られるわけではない。しかし、そこに至るマイルドやステップが本質的なものであれば、大学は評価してくれるはずだ

と、木村先生は言う。

「大学がプロセス評価の中で見ようとしているのは、入学後に伸びるためのマインドを高校生活で身につけたかどうかのほうです。それが大学側に伝わるような推薦書を書くことを心がけています。そして、生徒が何を学びたいかを具体的に示します。それが大学が求める方向性と合致していれば、たとえ高校段階での研究が最終的な結論に到達していなかったとしても、大学はその生徒を評価してくれると考えています」

生徒に問いかけ、内面を言語化させる

志望理由書の作成は、希望する学問や研究に取り組む意義を生徒が意識する上で非常に有効だと、木村先生は感じている。そこで、2019年度は、「高3・0学期」に、2年生全員が第1志望の大学・学部・学科についての志望理由書を書く機会を設ける予定だ。早い段階から志望理由書の草稿を書くことで、今すべきことが明確になることもある。

生徒が初めて書く志望理由書は、「自分は○○の研究に興味があるの

で、貴学の学部・学科で学びたい」といった内容になりがちだ。そこで、教師は、「大学は、あなたの好奇心を満たすためだけに存在しているわけではない」と指摘して、生徒に再考を促す。そして、「なぜ、その研究をしようと思ったのか」「研究を通じて、その学問分野や社会にどう貢献したいと考えているのか」「そのために、高校生活ではどんな資質・能力を身につけてきたのか」「やりたいことを実現するためには、今後、どんな資質・能力を身につける必要があると思うか」などと問いかけ、生徒自身が考え、言語化できるようになるまで面談を繰り返す。

初めは、自分のことだけを前面に押し出した志望理由を語っていた生徒が、問いをきっかけに自問するうちに、「自分がやりたいことは、社会的にはどういった意味を持つのか。そして、それをどのように実現しようと考えているのだろうか」と、自分を取り組もうとしていることを俯瞰し、それを言語化できるようになる。そして、志望理由書も、格段に説得力のある内容に変わっていく。

医進・サイエンスコースの推薦・AO入試指導

取り組み時期・体制

- 3年次までは入試の選抜方法を意識しない  
低学年では興味を深め、視野を広げていくことに注力。
- 医進・サイエンスコースの所属教師がチームで指導  
複数の教師の目で生徒を見て、生徒の力を伸ばす。

取り組みのポイント

- 研究室まで調べた上で志望校を選択  
生徒は、大学のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーはもちろん、研究室単位で教育・研究の内容を調べた上で、志望大学・学部・学科を絞り込む。
- ストーリー性のある推薦書を作成  
図を参照。
- 貢献にまで昇華した思いが伝わる志望理由書に  
教師と面談を重ねる中で、生徒は、志望している大学・学部・学科で、「なぜ、その研究がしたいのか」「その研究は社会的にどのような意味を持っており、大学での学びを通じてどう実現したいと考えているのか」などを突き詰めて考える。その上で、志望理由書を作成。
- ポートフォリオには内面の変化も記録  
ポートフォリオは、6年間を通じて随時記録する。その際、活動内容だけでなく、その時にどう思ったのか、何を感じたのか、それを次にどうつなげたいと思ったのかといったことまでを記録する。

今後の課題

医進・サイエンスコースの推薦・AO入試指導の取り組みで得られた知見を全学的に共有していく。

\*取材を基に編集部で作成。

活動を通じて何を感じたかを、ポートフォリオに記録

同コースでは、研究活動や学校行事などについて、生徒が書き留めておきたいことをeポートフォリオに蓄積している。

「生徒は日々、数多くの学びを得ています。しかし、その学びが自分にとってどんな意味があるのか、その都度、言語化できているわけではありません。そこで、節目に振り返りを促しています。生徒は、蓄積したポートフォリオを読むことで、『この時のあの経験は、自分にとってこ

んな意味があったのか』と気づきを得ます。時には、教師と一緒にポートフォリオを見ながら、生徒が気づきを言語化するのを手助けします。また、そこで言語化されたことを、推薦書や志望理由書におけるストーリー作成に生かすこともあります」

同校では、ポートフォリオには活動の内容と結果に加えて、その時に感じたことや考えたことも記録するよう指導している。例えば、複数の生徒が同じ企画に参加しても、その経験を同じ企画に参加したことや考えたことは、生徒によって異なる。「何をしたか」という結果ではなく、「ど

う感じたか」「何を考えたか」というプロセスこそ、その生徒が自分の資質や興味・関心の方向性をつかむためのヒントがある。そして、活動内容とともに、感じたことや考えたことを記録しておけば、生徒がそれを読み返した際、「この時に抱いた疑問から、このテーマに興味を持つようになり、追究してこまできた」といったように、学びへの意欲を高めてきたストーリーとして振り返ることができる。

「とは言え、生徒を見てみると、何かを経験した時に、自分の内なる声に耳を傾け、感じたことを言語化

する力がまだ不足していると思います。それでは、ポートフォリオに記録した内容が浅くなってしまい、ひいては推薦・AO入試における志望理由書や面接でも、読み手や面接官に対して、自分の心の奥にある本当の思いを伝え切ることができません。そこで、普段から生徒には、活動を行う度に、『どんなことを感じたの?』『それはなぜかな?』といった、自分の内面を探らせるような声かけを意識的にしています」

そうして蓄積したポートフォリオを「高3・0学期」の節目の振り返りにも活用し、志望理由書の草稿を作成する。医進・サイエンスコースが推薦・AO入試においても実績を上げているのは、そうしたきめ細かな指導によるところが大きい。

「今後の課題は、この取り組みで得られた知見を、コースを超えて共有していくことです。これまではコース内での取り組みだったため、かかる教師の数が少なく、意思疎通もさほど難しくありませんでした。しかし、今後は指導の進め方のマニュアル化や、組織として取り組んでいくための体制づくりを進める必要があると考えています」

**理解・習得！ 自校に展開！**  
**生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント**

# ワークショップ参加者の今

本誌2019年6月号の特集でレポートした通り、19年3月、VIEW21編集部的主催で、カリキュラム・マネジメント(以下、カリマネ)への理解を深め、自校での展開を考えるワークショップが実施された(図)。それから8か月余りが経った今、参加者はワークショップでの学びをどう生かし、どんな課題に直面しているのだろうか。

## 参加者が語る 自校のカリマネ推進「成果と課題」

**カ**リマネ推進プロジェクトチームで作成した「育てたい生徒像」の素案を、全教師で共有・議論する場を複数回設けました。そこで得られた意見を反映させ、自校の「育てたい生徒像」を策定。それを基に作成したルーブリックを行事の場で生徒に示しています。各教科・科目では、「育てたい生徒像」を踏まえた授業改善に取り組み始めているところです。(広島県・公立)

**3**月のワークショップ後、カリキュラムの柱となる「総合的な探究の時間」を進める上で重要な「探究課題の設定方法」について、校内研修を実施しました。ただ、プログラムがまだ確定していないため、教科学習や学校行事とのつながりを明確にする段階には至っていません。今後、先生方のモチベーションを高めながら、負担をかけずに検討を進めていけるかが重要であると感じています。(広島県・公立)

**ワ**ークショップで同じグループになった全国の先生方と、カリマネの推進を約束したことが大きなモチベーションになっています。学校として育成を目指す資質・能力の設定に向けて、校長も、カリマネ推進チームに対するバックアップを全教師に向けて表明してくれました。校内の中心課題として、カリマネ推進が全校の取り組みに昇華されつつあります。(広島県・公立)

**3**月のワークショップに参加した先生方とは、今でもSNSを通じて、カリマネの進捗状況などを共有しています。各分掌の協力もあって、カリマネの視点でのグランドデザインの策定も進行中です。ただ、現在の定期考査の内容を見ると、先生方の理解・認識の差はまだ大きいようです。(福岡県・公立)

- ワークショップの大まかな流れ ※参加者5~6人を1グループとして進行。
- 課題整理 「なぜ、カリマネなのか？」関西大学教育推進部 教授 森 朋子
  - 事例報告 「静岡県立御殿場高校の取り組み」静岡県立御殿場高校 教諭 美那川雄一
  - グループワーク 御殿場高校の取り組みに対するの共感点・疑問点などを語り合う/美那川先生と参加者の質疑応答
  - 3つの分科会 ※3つの中から1つ選んで参加
    - 学校教育目標のブラッシュ・アップ
    - カリマネと学習評価のあり方
    - カリマネを学校全体に浸透させるポイント
  - ワーク 個人のカリマネ行動計画立案  
グループのカリマネ行動計画を検討・立案



## 多くの高校がカリマネを推進中

ワークショップ開催から約半年が経過した9月末、参加者の学校におけるカリマネの進捗状況を確認すべくアンケートを実施した。参加者からは、「校内にプロジェクトチームを立ち上げた」「校長が教師向けの校内通信で、カリマネの推進を宣言した」「若手中心で育てたい生徒像や探究学習のあり方について検討が進んでいる」といった声が寄せられ、教員や学年、分掌の違いを超えて教師が協働し、カリマネを推進している学校が少なくない様子がうかがえた。



## 新学習指導要領の実施まで2年余り、 カリマネの実現が学校の重要課題の1つに

2019年3月に実施したワークショップでは、すべての参加者が講師の話に真剣に耳を傾け、グループワークで活発に語り合うその様子に、カリマネが現場の重要な課題の1つになっていることを改めて実感しました。そして、今回のアンケート結果からも分かるように、参加者はワークショップで得た学びや気づきを生かしながら、自校に合ったカリマネを推進しようと試行錯誤されています。本ワークショップを特集した本誌19年6月号の発刊後、VIEW21編集部には、カリマネをテーマにしたワークショップ型の講演や研修のご依頼を、学校や教育委員会から以前にも増していただくようになりましたが（下記、VIEW21編集部による講演・研修実施例）、そうしたことから、カリマネへの関心の高まりがうかがえます。

22年度から年次進行で実施される高校の新学習指導要領において各校に求められている、「社会に開かれた教育課程」の編成・実施と、それを通じた新しい時代に必要となる資質・能力の育成には、カリマネの実現が必要不可欠です。VIEW21編集部は、これからも、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの実現に資する知見や情報を、様々な形で現場の先生方にお届けしてまいります。

VIEW21編集部 統括責任者 柏木崇

### ◎ VIEW21 編集部によるカリマネをテーマとした講演・研修実施例

- ・茨城県教育委員会研修（19年6月）
- ・全国工業高等学校長協会「工業高校生の専門的職業人として必要な資質・能力の評価手法の実践研究」研究校会議（19年6月）
- ・福岡県高等学校工業教育研究会主催・工業に関する学科を有する高等学校の主幹教諭・指導教諭等研修会（19年8月）
- ・第2回宮崎県高等学校副校長教頭会（19年10月）
- ・鹿児島県・高大接続改革セミナー（19年11月）
- ・福岡県立福岡工業高校・第2回校内職員研修会（19年11月）

**本**校におけるカリマネの推進のきっかけは、間違いなくVIEW21編集部主催のワークショップです。同じグループだった先生の紹介で先進校訪問の機会を得たことなどを通じて、校内でのカリマネ推進の意欲が一層高まりました。これまでに、有志の教師がチームをつくり、グランドデザイン作成のためのワークショップを、生徒・教師対象で1回ずつ、自由参加の話し合いを2回、行いました。現在は、「学校教育目標の達成のために必要となる資質・能力」を明確化し、年度内でのグランドデザインの完成やルーブリックの作成を目指しているところです。（徳島県・公立）

**本**県では、公立高校の2021年度入学者選抜から、各学校で「育てたい生徒像」を明確にした上で選抜を行うことが求められるようになります。本校でも、3月のワークショップで活用したワークシートを使って、学校の強みや強化すべき点を整理しながら、育てたい生徒像を検討し、全教師での共有を目指しています。また、「総合的な探究の時間」の充実と、授業改善を目指すプロジェクトチームを発足し、若手中心で議論を進めています。ただ、校内全体の関心が、今年度は「総合的な探究の時間」に向いていて、教科の垣根を超えた授業改善の取り組みが思うように進んでいない状況です。

（長崎県・公立）

### ワークショップ概要

- 日時 2019年3月23日（土）10時30分～17時30分
- 会場 株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社（岡山市北区）
- 参加者 全国の高校教諭42人
- 参加費 3,000円（税込み、昼食代を含む）
- 監修・ファシリテーター  
関西大学教育推進部 教授 森 朋子  
「三四郎の学校」事務局長 日賀優一
- 講師 関西大学教育推進部 教授 森 朋子  
静岡県立御殿場高校 教諭 美那川雄一  
岡山県立林野高校 校長 三浦隆志（2019年3月現在）

次号では、  
ワークショップの講師と  
参加者による、カリマネ  
推進の進捗振り返り会  
(12月に実施)の内容から  
カリマネ推進上の  
課題と具体的方策  
について考えます

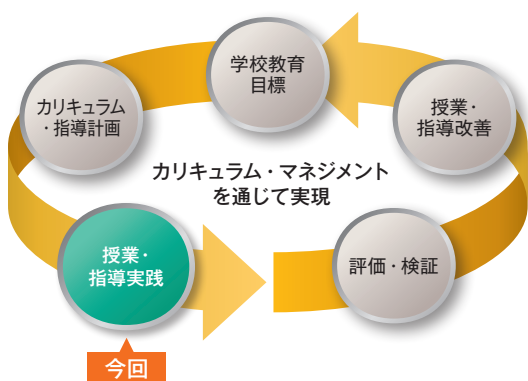
走り始めた学校現場が  
直面した課題とは

一方、壁に直面している学校もある。「育成を目指す資質・能力の絞り込みが思うように進まない」「育成を目指す資質・能力に対する理解・認識の差が、定期考査の内容の差に出ている」「資質・能力に関するルーブリックを活用する場面が具体的に分からない」などだ。そうした認識や実践の差の解消に向け、ワークショップ参加者を始めとするカリマネの理解者がいかにその知見を全校に広げ、リーディングしていくかが大きな課題の1つと言える。また、「働き方改革が進む中で、会議の時間の確保に苦労している」といった、対話の場の設定を課題に挙げる参加者もいた。

**改 革 事 例**

# 生徒の状況を見ながら築く探究学習で 「17の力」の育成を目指す

## 東京都・私立山崎学園富士見中学高校



◎建学の精神は、「純真・勤勉・着実」。2010年度に高校からの入学者の募集を停止し、完全中高一貫校へと移行した。教育目標として「社会に貢献できる自立した女性の育成」を掲げ、探究学習や多文化交流などの充実に力を入れている。

◎設立 1940(昭和15)年学校法人山崎学園設立

◎形態 全日制/普通科/女子校

◎生徒数 1学年約240人

◎2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、筑波大、千葉大、東京医科歯科大、東京外国語大、一橋大、九州大、首都大学東京などに27人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ770人が合格。

◎URL <https://www.fujimi.ac.jp>



### 探究学習のカリキュラム構築に向け、専門の委員会を発足

中高一貫教育を行う女子校の私立山崎学園富士見中学高校は、「探究委員会」(現・教育研究部)での検討を経て、2017年度、中高6年間で生徒に身につけさせたい資質・能力「17の力」を設定し、その育成を実現する探究学習のカリキュラム構築に力を注いでいる。佐藤真樹校長は、「育成を目指す生徒像の設定や探究学習の充実には、以前からその必要性を感じ、取り組んできました」と、検討の過程を振り返る。

まず、12年度、学校経営について検討する「校務運営委員会」が、生徒に身につけてほしい資質・能力についてのアンケートを、各学年や分掌に実施。その回答を基に、生徒に育成を目指す資質・能力として、「自分と向き合う力」「人と向き合う力」「課題と向き合う力」の3つを設定した。

そして、15年度、これからの社会に求められる資質・能力を育成する教育活動は、探究学習が柱になるという考えの下、既存の特別活動を、探究学習により結びつく内容へと改

善する方針を打ち出した。

「その際にまず必要としたのは、探究学習で育成すべき資質・能力を定めて評価項目とし、それらの評価基準を設定して、教師間で生徒を評価する際の目線合わせをし、生徒に目標を明示することでした。それにはルーブリックが有効であり、専任で検討する分掌が必要だと判断して、17年度、『探究委員会』を発足させました」(佐藤校長)

### 全教師参加のワークショップで育成を目指す生徒像を共有

探究委員会は、国語、社会、数学、理科、英語から、担当学年が重ならない5人の教師と、司書教諭を加えた計6人で構成した。

「学校図書館は、生徒が探究学習を行う上で不可欠な場です。また、司書教諭は、学年を超えて生徒の様子に目を配ることができると、委員に加えました」(佐藤校長)

司書教諭の宗愛子先生は、自身の役割を次のように語る。

「私は前任校で、探究学習の指導経験がありました。そこで、探究委員会では、探究学習のねらいや指導

\*「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。

のポイント、図書館の役割を話し、先生方が探究学習に関する理解を深められるように努めました」

探究委員会はまず、全教師参加のワークショップを実施。これからの社会について書かれた資料を読んだ上で、「本校の生徒が既に身につけている資質・能力と、まだ身につけられていない資質・能力」をテーマとして、数人ずつのグループで話し合った。同委員会主任（現・教育研究部主任）の三浦佳奈先生は、ワークショップの意義を次のように語る。



校長  
佐藤真樹  
さとう・まこと

教職歴38年。同校に赴任して38年目。

教育研究部主任  
三浦佳奈  
みづら・かな

教職歴13年。同校に赴任して13年目。社会科。

教育研究部  
田邊雅義  
たなべ・まさよし

教職歴19年。同校に赴任して19年目。数学科。

教育研究部  
宗愛子  
そう・あいこ

教職歴15年。同校に赴任して4年目。図書部。司書教諭。

「教師一人ひとりが自校や生徒への思いを語り、周りの考えにも耳を傾け、その中から育成を目指す生徒像が浮かび上がるような対話の場を目指しました。すると、実施後、『このような対話の機会をもっと設けてほしい』といった声が聞かれました。日頃から職員室などで、教師間で話をしていきますが、教育観や指導観について話す機会がさらに必要なのだと感じました」

そして、ワークショップで出された意見を基に、中高6年間で育成を目指す資質・能力を「17の力」として設定し、12年度に設定した3つの力を細分化する形で整理（図1）。同時に、それぞれの資質・能力の到達度を6段階で示したルーブリックも作成した（P.24図2）。

### 中学校は既存の活動を見直し、探究学習に組み込む

次に着手したのは、生徒に「17の力」を育むための探究学習のカリキュラムの構築だ。

まずは、17年度に中学校3年間のカリキュラムを作成した。その際に留意したのは、既存の教育活動を

図1 富士見中学高校が育成を目指す資質・能力

学校教育目標 社会に貢献できる自立した女性の育成

- ⑫課題を発見する力
- ⑬情報を活用する力
- ⑭多角的に考える力
- ⑮論理的に考える力
- ⑯創造する力
- ⑰社会に貢献しようとする力



- ⑥聴く力
- ⑦人を巻き込む力
- ⑧人とつながる力
- ⑨話し合う力
- ⑩発表する力
- ⑪記述する力

- ①自分の意見を形成する力
- ②チャレンジする力
- ③計画を立てる力
- ④やり遂げる力
- ⑤自らを振り返る力

\*学校資料を基に編集部で作成。

生かすことだ。初めて探究学習の指導を経験する教師もいたため、新たな教育活動を導入すると戸惑いや負担が生じると考えて、既存の行事の内容を見直し、探究学習に組み込むことにした。例えば、中学1年生7月に行う林間学校は、「自然をじっくり観察し、そこから疑問を持つこと」を目的とし、より探究的な活動をする教育活動であることを明確化した。

また、生徒も教師も探究学習のプロセスを順に積み重ねられるよう、

中学1年生は「問う」（課題の設定）、中学2年生は「調べる」（情報の収集）、中学3年生は「伝える」（整理・分析とまとめ・表現）ことを、それぞれ活動の中心に据えた。

そして、中学校での探究学習の集大成として位置づけたのが、中学3年生で取り組む卒業研究だ。それも、既存の卒業研究の内容を見直したものであり、1学期に生徒が教師と面談して課題を設定し、調べた内容を冊子にまとめ、9月の文化祭で中間発表、3学期のポスター発表会

に向けてさらに発表力を磨くという流れとした。教育研究部の田邊雅義先生は、新たな卒業研究としたことよって、生徒の成長の手応えを次のように語る。

「以前の卒業研究では、調べ学習にとどまっていたましたが、現在の進め方にしてからは、課題設定の段階から図書館を利用し、さらに生徒が各自でフィールドワークを行い、最後には自分の考えを深めていけるようになりました。ポスター発表では、自分の言葉で自信を持って発言する姿が見られています」

### 高校はSDGsに関連つけた内容とし、探究力を磨く

高校での探究学習は、社会的に関心が高まっているSDGs（\*1）を軸にしている。

「高校での探究学習は、生徒にどのようにすれば社会へ貢献できるのかといった意識を育み、視野を広げられるSDGsをテーマにすることにしました」（田邊先生）

19年度の活動内容は次の通りだ。高校1年生は、SDGsの目的や17の目標について学んだ上で、関心を

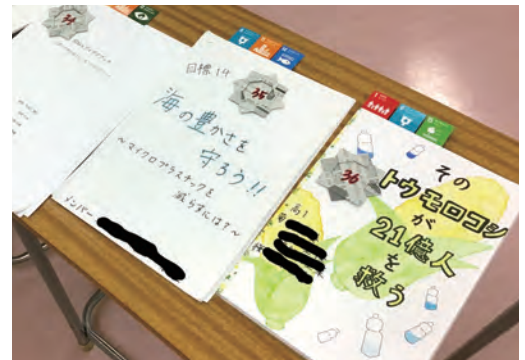


写真 文化祭では、各グループがアクションプランを冊子にまとめて展示。来場者に意見をもらった。

持った目標ごとにグループとなり、それぞれの目標の達成に向けて自分たちに何ができるのかを考え、アクションプランを立案。その内容を冊子にまとめ、文化祭で展示した（写真）。そして、来場者に書いてもらった意見を参考にしながら、アクションプランをさらに練り上げ、最終的に全校発表会でプレゼンテーションをする予定だ。

「17の目標は社会とのつながりが分かりやすく、生徒も考えやすいように、一生涯命取り組んでいきます」（田邊先生）

5月に沖縄体験学習に取り組み高校2年生は、それまでに学び、考えてきたSDGsをベースに、個人で

図2 「17の力」のルーブリック（抜粋）

評価項目	定義	E	D	C	B	A	S
① 自分の意見を形成する力	様々な情報を基に自分の意見を形成する力	自分の意見を持っていない。	意見はあるが、明確な理由がない。	少ない情報を基に、意見を形成している。	様々な情報を基に、自分の意見を形成している。	様々な情報を批判的に捉え、それを根拠にし、自分の意見を形成している。	どのような状況においても、様々な情報を批判的に捉え、それを根拠にし、自分の意見を形成している。
② チャレンジする力	自らを高めるための目標を設定し、達成しようとする力	これまでに自分が達成したことしがない。	未達成のことに取り組んでいる。	自分から未達成のことに取り組んでいる。	困難な課題に対して失敗を恐れず、自分から未達成のことに取り組んでいる。	困難な課題に対して失敗を恐れず、自分から未達成のことに取り組んでいる。また、失敗や経験を次に生かそうとしている。	どのような状況においても、困難な課題に対して失敗を恐れず、自分から未達成のことに取り組んでいる。また、失敗や経験を次に生かしている。
③ 計画を立てる力	課題解決のために計画を立てる力	指示を受けても計画を立てない。	指示された通りに計画を立てている。	指示された通りに、実現可能な計画を立てている。	自分で見通しを立て、実現可能な計画を立てている。	自分で見通しを立て、実現可能な計画を立てている。また、柔軟に修正できる。	想定外の事態が起こっても、実現可能な計画を立てている。また、柔軟に修正できる。
④ やり遂げる力	課題を最後まで諦めず取り組み、やり遂げる力	課題をやり遂げる前にやめてしまう。	課題をやり遂げているが不備がある。	課題を不備なく最後までやり遂げている。	様々な工夫をしながら、課題を最後までやり遂げている。	様々な工夫をしながら、課題を最後までやり遂げている。その工夫が成果物に反映されている。	どのような状況においても、様々な工夫をしながら、課題を最後までやり遂げている。その工夫が成果物に反映されている。
⑤ 自らを振り返る力	自分の考えや行動を振り返り、次の考えや行動につなげる力	機会を与えられても、振り返らない。	機会を与えられれば、振り返ろうとするが、自分の考えや行動の振り返りにはなっていない。	機会を与えられれば、次につながるように自分の考えや行動を振り返ることができる。	自ら機会を見つけて、自分の考えや行動を振り返ることができる。	自ら機会を見つけて、振り返ったことを次の考えや行動につなげ、改善しようとしている。	どのような状況においても、振り返ったことを次の考えや行動につなげ、改善しようとしている。

\* 学校資料を基に編集部で作成。ルーブリックの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp/>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け」をご覧ください。

\* 1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。



司書教諭として、探究学習の充実に貢献したい

宗 愛子先生

探究学習では、課題の設定や資料の収集、調べた結果を基に深める考察など、あらゆる場面で学校図書館が重要な役割を担うことになります。司書教諭に求められるのは、学習に必要な書籍や資料をそろえるだけではありません。探究学習を始めてから、図書館に来る生徒は、目に見えて多くなりました。生徒と資料と一緒に探しながら、彼女たちが学びの質を高められるような気づきになる言葉がけを心がけています。

司書教諭は、情報収集や情報活用のプロでもあります。先生方から、「生徒にこういったことを考えさせたいけれども、何かよい資料はないか」と相談された際に、学習内容や到達目標を把握した上で、適切なアドバイスをすることも求められます。生徒や先生から信頼され、気軽に相談してもらえ、司書教諭でありたいと思います。

テーマを設定。沖縄体験学習での調査や文献調査を重ねて、夏季休業中にレポートを作成した。

「提出されたレポートを読むと、多くの課題を感じました。問いが絞り切れていなかったり、情報収集をしているものの、整理・分析をしていなかったりといったことです。そうした生徒たちの現状を受けて、2学期には、図書館と連携して『探究型読書』を行うことにしました」（三浦先生）

探究型読書では、「科学道100冊」（\*2）の中から生徒が自分で書籍を選び、その表紙と目次から内容を考えさせたり、目次からキーワードを抜き出して書籍の帯を作成

生徒の状況に合わせて、実践しながら活動を構築

したりする活動を行っている。生徒がどのような課題意識を持ち、何に興味・関心があるかによって、同じ書籍でも抜き出されるキーワードや内容の類推は異なる。そこで、活動を通じて、生徒に自分の興味・関心やものの見方・考え方を自覚させることもねらいとした。

同校では、探究学習を本格的に始めたばかりであり、計画を変更して探究型読書を導入したように、今後も生徒の状況を見ながら活動内容を決めていく考えだ。

その際に、教育活動の指針となり、教師間の意識統一の基となるのが、「17の力」のルーブリックだ。そして、探究学習における活動が、どの力をどこまで育成することを目指すものなのかを整理した「探究プログラムで目標とするルーブリック項目案」を、教育部では作成し、運用中だ（図3）。その評価規準も、生徒の状況を見ながら随時見直していく考えだ。

三浦先生は、今後の展望を次のように語る。

「『17の力』は、すべての教育活動において育成することが可能であ

図3 「探究プログラムで目標とするルーブリック項目案」

学年	学習活動	ルーブリック項目																
		① 自分の意見を形成する力	② チャレンジする力	③ 計画を立てる力	④ やり遂げる力	⑤ 自らを振り返る力	⑥ 聴く力	⑦ 人を巻き込む力	⑧ 人とつながる力	⑨ 話し合う力	⑩ 発表する力	⑪ 記述する力	⑫ 課題を発見する力	⑬ 情報を活用する力	⑭ 多角的に考える力	⑮ 論理的に考える力	⑯ 創造する力	⑰ 社会に貢献しようとする力
中1	探究学習プレ						C	C		C	D		D	D				
	生き物探究教室				C	C	C	C	C		C	D	D	D	D	C	D	
	上野動物園FW				C	C				C		B		D	C	C		C
中2	個人探究	C	C	C	C	C							C	C	C		D	D
	上野浅草FW①			C	C	C	C	C	B		B	D	C	C	C	C	D	
	上野浅草FW②		C	C	C	C	B	B	C	B	C		C	C	C	C	C	C
中3	卒業研究			C		C	B						C	C				C
	卒業研究	B	C	B	B	B	B		C		B	B	B	B	B	B		C
高1	SDGs	A	B	A	B	B	A		B	B	B		B	B	A	A	B	B
	沖縄体験学習	A	A	A	B	A	A		B	B		A	B	A	A	A		B
高2	探究型読書	A	A		A	A	A				B		A	A	A	A	A	A

表中のA~Dは、ルーブリック(図2)で示した評価規準。\*学校資料を基に編集部で作成。

導かれた道標

教育活動の新設や変更の決定は、目標とする資質・能力が育成できるか、できているかで判断する。

り、授業でもそれらの育成を意識した発問や活動をする教師が増えていきます。探究学習以外の教育活動でも『17の力』を育成していけるよう、教師間で対話を重ねながら取り組みを築いていきたいと思えます」

\*2 国立研究開発法人理化学研究所と株式会社編集工学研究所の共同プロジェクトで、書籍を通じて科学者の生き方や考え、科学の面白さや素晴らしさを届ける事業。「元素ハンター」「美しき数学」「科学する女性」「科学道クラシックス」の4ジャンルで100冊を推薦。

13:50 前時の復習とテーマの確認



授業  
ハイライト

主体的・対話的で  
深い学びへ

実践  
アクティブ・ラーニング

日本史

●2年生「日本史B」の「武士の社会」で、全4時間のうちの2時間目。北条氏が鎌倉幕府の中で権力を掌握した過程をグループで議論し、課題に対しての解答を作成しながら、武士社会の成立についての理解を深めた。(P.29に単元の指導計画を掲載)

「もし皆さんの生きる社会が、生き方の選べない社会だったとしたら」。武士の社会について学ぶ中で、その課題を乗り越えるヒントを得る。前時では、北条氏が権力を得た過程を理解するために必要な、執権や世襲といった用語の意味を学んだ。それらの理解を基に考察を進める本時では、まず前時の復習として、挙手した生徒に概念を解説させた。

歴史から生きるヒントを獲得し、  
学び方を学ぶ「2ターム授業」で、  
学びへの意欲を高める

野澤宏光先生が授業改善に本格的に取り組み始めたのは、栃木県立黒磯南高校に赴任して最初の中間考査を終えた時だった。生徒から、「先生の授業は面白くて分かりやすいけれど、テストはできなかつた」と言われたことがきっかけだった。

野澤先生のアクティブ・ラーニング

日本史の授業を通じて生徒に  
身につけさせたいことを問い直す



栃木県立黒磯南高校

野澤宏光 のざわ・ひろたか

教職歴7年。同校に赴任して5年目。学習指導部長。地理歴史・公民科担当。校内外で研修や視察を重ね、独自の指導法構築に努めてきた。

### 栃木県立黒磯南高校

◎普通科高校として開校後、2013年度に総合学科に学科改編。校訓は「至誠敬愛・自律自尊・進取究明」。国際理解教育、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、街おこしを始めとするボランティア活動などに取り組む。2022年度、福祉系列を導入予定。

◎設立 1976(昭和51)年

◎形態 全日制/総合学科/共学

◎生徒数 1学年約160人

◎2019年度進路実績(現役のみ)

私立大は、足利大、埼玉工業大、文教大、神田外語大、工学院大、拓殖大、東京工芸大、日本大、立正大、神奈川大などに延べ39人が合格。短大、専門学校進学85人。就職33人。

◎URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/kuroisominami/nc2/>

## 14:02 グループワーク (前半)



各自が立てた仮説を基に、「子どもを将軍にして、その陰で自分が政治を操ろうとしたのではないか」「将軍にならなかったのではなく、なれなかったのではないか」など、グループで意見を出し合った。その途中、「執権と将軍はどちらが偉いか」などと、歴史用語の意味を調べ直しながら、生徒同士で議論を深めていった。

## 13:55 資料の確認と個人ワーク



グループワークの課題は、①鎌倉幕府の中で、将軍はどのような存在だったのか、②北条氏は、なぜ将軍にならなかったのか、という2つの問いについて、前時の学習内容と、中世社会の身分秩序や将軍と御家人の関係に関する資料を基に考えること。まず、グループの中の1人が資料を音読し、個人で①②それぞれについて仮説を立てた。

「その頃は、私が高校時代に受けた面白い授業を再現することを心がけていましたが、それでは、生徒は分かった気になっただけで、知識は生徒のものになっていませんでした。授業は、教師が上手に話して生徒を楽しませるショーの場ではないことに気づかされました」

野澤先生は改めて、授業を通じて生徒に何を身につけさせたいのかを考えた。そこでたどり着いたのが、歴史から生きていく上でのヒントを学ぶこと、そして、授業を通して学び方を学ぶことだった。

「歴史上の人物は、どのように困難を乗り越えて社会を築いていったのか。歴史を学ぶ中で得られる先人の教えは、人生に役立つと生徒に実感させることで、学びへの意欲を高められるのではないかと考えました」

目標に掲げた授業を実現するため、野澤先生は様々な方法を試した。最初に取り入れたのは、他校視察で知った知識構成型ジグソー法(＊)だった。やるなら徹底的にと、すべての授業で行った。生徒は楽しそうに取り組み、話が上手になったが、歴史への理解が深まったといった手応えや、学ぶ力が向上したという実感はなかった。

「学習内容への理解を深めるために必要な過程は、今学んでいる内容が何につながるのか、『見通し』を持たせることと、学びの意味づけをするための『振り返り』です。当時の授業には、それらの視点が欠けていました」

### 思考の活性化・深化への配慮

## 習得と活用の「2チーム授業」で先人の哲学に触れる

試行錯誤の結果、野澤先生は、2つのチームに分けて授業を構成する「2チーム授業」を考案した。両チームを通して生徒が考える問いを設定し、前半のAチームでは、問いの趣旨を理解させた上で、それを考えるために必要な知識を習得させる。そして、後半のBチームでは、問いについて生徒同士で議論し、歴史と自己を結びつける振り返りを行う。

今回の授業では、「もし皆さんの生きる社会が、生き方の選べない社会だったとしたら」をテーマとし、「鎌倉幕府の中で、将軍はどのような存在だったのか」「北条氏は、なぜ将軍にならなかったのか」を問いとした。官職が世襲だった鎌倉時代、将軍職に就くことができない北条氏は、役職に固執せず、執権として実権を握った。血筋という自分の力ではどうにもできない壁を柔軟に乗り越えた北条氏のしたたかさを、生徒に学んでほしいと、野澤先生は考えたのだ。

前時のAチームでは、野澤先生がテーマを伝え、「歴史の中に答えを出した人たちがいるよ」と言って授業への期待を高めた。生徒は、副教材を読みながらグループで空所補充問題に取り組み、時代の流れをノートにまとめた。その際、鎌倉時代の将軍や執権の地位など、問いへの解答に必要な情報を簡潔に、難しい言葉を知らな

\* ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

## 14:35 解説、振り返り



野澤先生が問いについて解説した。ポイントを説明した上で、「北条氏は、血統的に摂政・関白や将軍になれない」「将軍は権力を握るための道具だった」など、最低限理解すべき事柄を端的に伝えた。問いの模範解答は渡さず、定期考査までに各自で考えることとしている。最後に、振り返りシートに自己評価と授業で感じたことを記入して提出した。

## 14:25 グループワーク(後半)



制限時間内に結論を出せないグループが多かったため、野澤先生は活動を10分間延長した。「問いは『なぜ将軍にならなかったのか』だから、北条氏が摂政将軍を京都に追放したことまで書く必要はないと思う」など、何が問われているのかを確認しながら、解答を推敲した。まとめ終えたグループから、A3判の用紙に解答を記入し、黒板に掲示した。

### 場づくりへの配慮

## グループワークは3人とし、メンバーは1年間固定

野澤先生は、グループワークは3人が適切だと考えている。4人ではずっと発言しない生徒が出る場合があり、2人では議論が行き詰まることも多いが、経験上、生徒同士のやり取りは、3人が活発だという。なお、グループのメンバーは1年間固定としている。

「人間関係づくりが目的ではないので、問い

い中学生でも理解できる文章にまとめるよう指示した。必要な情報は何かを精選させることは、本質を見抜く目を養うための工夫だ。そして、野澤先生が15〜20分間、講義を行い、最後に復習プリントに取り組ませた。

Bチームである本時では、前時での学びを踏まえ、野澤先生が難関大学の入試問題をアレンジした問いについてグループで議論し、解答を作成。最後に、野澤先生が先人の教えを伝えた。「壁にぶち当たった時、北条氏のしたたかさ

を思い出し、逆境を乗り越えるアイデアとバイタリティーを発揮してほしいと思っています」

振り返りでは、主体性や協働性、思考力について5段階で自己評価し、授業で学んだこと、それを人生にどう生かしていきたいのかを書かせる。学習内容を整理し、自分とのかかわりを考えさせることで、学習内容を定着させる。

### 成果と課題

## 授業後も学び続け、定期考査に向けて解答を練り上げる

Bチームで出した問いは、定期考査でも出題する。生徒は、授業の終わりに共有された他グループの解答や野澤先生の解説を参考にし、ベストと思われる解答を作り、試験に臨む。

「授業では、必要な語句や概念が抜け落ちていたり、文章に整合性がなかったりする解答もあります。定期考査では多くの生徒が練り上げられた解答を書きます。難易度が高い論述問題に対応できるまで、生徒は授業後も深く考え、学んでいるのだと手応えを感じています」

生徒の日本史への学習意欲も高まっている。昨年度末に行ったアンケートでは、日本史が4月と比較して「好きになった」「得意になった」「もっと学びたい」と回答した生徒は8割以上だった。模擬試験の結果も、2年生11月から1月にかけて上昇した。

「当面の目標は、現在の授業スタイルで、思考力・判断力・表現力がより問われるようになる大学入試において結果を出せるようにすることですが、いずれは、生徒自身が問いを考え、必要な基礎知識を主体的に身につけていける授業に進化させたいと考えています」

## 単元の指導計画

【教科・科目】地理歴史・日本史 B 【分野・単元】中世社会の成立 武士の社会 【テーマ・作品】武士社会の形成 【設定時数】全4時間の中の2時間目 【単元目標】知識を活用しながら対話的・協動的に歴史の本質を考えるを通して、「武士の社会」について構造的に理解する。歴史から先人の教えを学び取り、自己と結びつけることで、歴史への興味・関心を高める。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	武士の社会① 「北条氏の台頭」 「承久の乱」「執権政治」  テーマ「もし皆さんの生きる社会が、生き方の選べない社会だったとしたら」 問い「鎌倉幕府の中で、将軍はどのような存在だったのか」「北条氏は、なぜ将軍にならなかったのか」	Aターム  • 学び方を身につけ、活動に前向きに取り組む。 • 基礎的・基本的な知識の定着。 【知識、技能、主体性】	①導入/テーマと問いの確認。 ②概観/グループ内でじゃんけんをし、負けた人から順番に、副読本の本時の範囲を音読。 ③情報整理/グループで「整理ノート」と「Aタームまとめプリント」に取り組む。本時の内容について、小テーマごとに「中学生が分かるように」「情報を精選して」まとめる。 ④解答・解説/講義形式で解答と解説。 ⑤振り返り/一問一答形式の復習プリントと振り返りシートに、個人で取り組む。	【主体的な学び】授業で「学びの流れ(概観→整理[精選]→補足・確認)」を繰り返すことで、学び方を学び、自身で学びのサイクルを回していけるようになる。(通年の目標) 【対話的な学び】グループで協力して活動できるか。足りない部分(学びに向かう姿勢、基礎的・基本的な知識など)をお互いに補い合っているか。 【深い学び】教科の内容を手段や視点を変えて何度も繰り返し、自身でアウトプットしながら精選してまとめる中で知識を構造化させる。	• Aタームまとめプリント • 振り返りシート
2	武士の社会② 「武士の生活」「武士の土地支配」  テーマ「もしめ事が起きた時、どう解決したらいいか」 問い「鎌倉時代の武士(地頭)と荘園領主はどんな関係だったか」	Bターム  • グループで協力しながら、難しい問いに粘り強く前向きに取り組む姿勢。 • Aタームで整理した知識を活用する過程で、知識を構造化できる。 • 学習内容を概念化し、先人の教えを自分の生き方やキャリアにどう生かせるかを考え、歴史と自己を結びつける。 【思考力、判断力、表現力、多様性、協働性】	①導入/テーマと問いの確認。 ②確認/グループ内でじゃんけんをし、負けた人から順番に、教科書の本時の範囲を音読。 ③深める/「資料プリント」に取り組む、問いへの解答をグループごとに作成。解答はA3判の用紙に記入して黒板に掲示。 ④共有/各グループの解答を共有し、必須の要素や解答の流れを確認。 ⑤振り返り/本時の学習内容について自分とのかかわりを考え、振り返りシートに記入。	【主体的な学び】「テーマ」や「問い」を通して、歴史の本質から「先人の教え」を学び取り、教科と自身を結びつけることで、学びへの意欲や教科への興味・関心を高める。 【対話的な学び】グループとしての意識を高める。多少の脱線は許容し、一人ひとりが発言できることを目指す。 【深い学び】知識を活用して、「問い」から歴史の本質を考えることを通して、知識を構造化・概念化していく。	• 振り返りシート • 定期考査での解答(Bタームの問いを定期考査で出題。他グループの解答や教師の解説を基に、解答を練り上げて試験に臨む。その過程を生徒の解答から評価) • 生徒の取り組みの様子
4	武士の社会③ 「武士の生活」「武士の土地支配」  テーマ「もしめ事が起きた時、どう解決したらいいか」 問い「鎌倉時代の武士(地頭)と荘園領主はどんな関係だったか」	Bターム  • グループで協力しながら、難しい問いに粘り強く前向きに取り組む姿勢。 • Aタームで整理した知識を活用する過程で、知識を構造化できる。 • 学習内容を概念化し、先人の教えを自分の生き方やキャリアにどう生かせるかを考え、歴史と自己を結びつける。 【思考力、判断力、表現力、多様性、協働性】	①導入/テーマと問いの確認。 ②確認/グループ内でじゃんけんをし、負けた人から順番に、教科書の本時の範囲を音読。 ③深める/「資料プリント」に取り組む、問いへの解答をグループごとに作成。解答はA3判の用紙に記入して黒板に掲示。 ④共有/各グループの解答を共有し、必須の要素や解答の流れを確認。 ⑤振り返り/本時の学習内容について自分とのかかわりを考え、振り返りシートに記入。	【主体的な学び】「テーマ」や「問い」を通して、歴史の本質から「先人の教え」を学び取り、教科と自身を結びつけることで、学びへの意欲や教科への興味・関心を高める。 【対話的な学び】グループとしての意識を高める。多少の脱線は許容し、一人ひとりが発言できることを目指す。 【深い学び】知識を活用して、「問い」から歴史の本質を考えることを通して、知識を構造化・概念化していく。	• 振り返りシート • 定期考査での解答(Bタームの問いを定期考査で出題。他グループの解答や教師の解説を基に、解答を練り上げて試験に臨む。その過程を生徒の解答から評価) • 生徒の取り組みの様子

\*野澤先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全4時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp/>)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

### 生徒の声



**水野瑠華さん** 私は、小学生の頃から歴史が好きでした。ただ、中学校時代は、日本史は暗記科目だ

と思っていました。しかし、野澤先生が授業で出される問いには、中学校の時の勉強の仕方では答えることができません。ただ知識を覚えるだけでは、歴史を本当に理解したことにはならないのだと気づきました。

野澤先生の授業の魅力は、自分の考えをみんなに伝え、他者の考えを吸収できることです。私は日本史が得意なことでもあって、グループワークでは説明する側によくりますが、メンバーの考えを聞くと「そういう視点もあるのか」と、自分があったり前だと思っていたことに改めて疑問を持ち、新鮮な気持ちで歴史を見つめ直すことができるようになりました。



**菅保琴美さん** 以前はグループワークに抵抗感がありました。自己紹介などをするアイスブレイクでメンバーと話しやすい関係ができました。グループワークでは話が脱線する時もありますが、授業を重ねる中で本題に戻すコツもつかめてきました。

野澤先生の授業には、どの時代でも面白いと思えることがあります。資料を読み取りながら自分なりに考えることで、深い理解や新たな発見が得られるからです。さらに、多様な視点を得られるのも、授業の醍醐味です。今回の授業で言えば、北条氏の権力の獲得手法は他の歴史上の人物とは異なりますが、役職にこだわらない生き方もあるのだと理解できました。そうして視点が広がることで、私自身のものの見方が厚みを増しているように感じます。

## 11:45 前時の復習テスト



冒頭の15分間で、前時の学習内容の復習テストを実施。射手先生は、机間巡視をして生徒の理解度を確認し、「先を急ぎたいのは分かりますが、増減表は丁寧に書きましょう」などと助言した。テスト開始から10分後、生徒の様子を見て、つまづいた場合のヒントを、パソコンの解説用モニターに映し出した。

## 授業 ハイライト

●2年生「数学Ⅲ」の「微分法の応用」で、全19時間のうちの15時間目。関数グラフ作成のソフトウェアを用いて、「陽関数」「陰関数」「媒介変数表示で表された関数」のグラフを作成し、関数の理解と考察を深めた。(P.33に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で  
深い学びへ

## 実践 アクティブ・ラーニング

## 数学

生徒主体の問題解決を通して  
数学の面白さに気づかせ、  
確かな学力と主体性を養う

### 射手先生のアクティブ・ラーニング

### 教師が教え込む授業から 生徒の主体性を生かす授業に

射手<sup>いいて</sup>基先生は、教職に就いたばかりの頃、大  
学入試対策を重視し、講義主体の授業を行って  
いた。当時から一定の実績を出していたが、一  
生懸命指導しても空回りしていると感ずること  
があったという。

「私の指導後の充実感と、生徒の意欲や学力



### 東京都・私立高輪中学高校

### 射手基 いいて・もとき

教職歴17年。同校に赴任して18年目。  
進路指導部。数学科主任。  
2010年頃から、ICTを活用した  
アクティブ・ラーニングの授業を実践している。

### 東京都・私立高輪中学高校

◎京都西本願寺によって創立された「普通教  
校」が前身。1947(昭和22)年に現校名に  
改称。2014年度、高校からの入学者の募集  
を停止して完全中高一貫校となった。校訓に  
「自主堅正」を掲げ、中高一貫教育を通じて「豊  
かな学力と自主精神」の育成を目指す。

◎設立 1885(明治18)年

◎形態 全日制/普通科/男子校

◎生徒数 1学年約200人

◎2019年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、筑波大、千葉大、電気通信大、  
東京外国語大、東京工業大、一橋大、横浜国  
立大、京都大などに27人が合格。私立大は、  
慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大  
などに延べ426人が合格。

◎URL <https://www.takanawa.ed.jp/>

## 12:05 陽関数のグラフ作成



本時のテーマに移った。演習プリントに沿って、各自、パソコンの関数グラフ作成ソフト GRAPES (\*) を使い、2次～4次関数のグラフを作成。続いて、未習の5次関数のグラフの概形や特徴をグループで予想した。射手先生は、「間違えてもよいかから、グループで考えをまとめて」と意見交換を促した。その後、グループごとにグラフを作成して予想を検証した。

## 12:00 模範解答の配布と自己採点



解答用紙を回収した後、模範解答を配布。生徒は自分の解答を思い出しながら、模範解答を読み、理解できなかった点を隣の席の生徒に質問するなどして、疑問点を解消した。射手先生は、多くの生徒が苦戦していたポイントを、モニターを使って解説しながら、「各自、できなかったところはしっかり復習して、理解を確かなものにしておきましょう」と助言した。

は、必ずしも比例していませんでした。私が一方的に生徒に教えてばかりで、生徒が問題を解決する楽しさを感じられる指導になっていないことに原因があると考えました」

そうした問題意識の下、9年程前から授業改善に取り組んできた。重視したのは、生徒の主体性を生かすことだ。教師による解説は、重要事項に絞ることと15分程度にとどめ、授業の大半を、生徒が自ら考えたり、周囲の生徒と相談したりして、演習プリントに取り組む活動に充てた。

「私が引っ張って、生徒を正解に導くのではなく、あくまでも生徒が自分で問題を解決する経験を積み重ねることで、数学を学ぶ楽しさに気づき、自信を持たせたいと考えています」

そのため、自分で問題を解く上で必要となる基礎・基本を身につけさせることにも力を入れている。

「『自分の力で解けた』といった達成感がないと、問題を解く楽しさを感じられず、『もっとやりたい』という意欲につながらないでしょう。そして、『自分の力で解く』ためには、基礎・基本が重要です」

毎回、授業冒頭の10～15分間で、前時の学習内容の復習テストを実施。解答の制限時間を過ぎると模範解答を配布し、解けなかった問題は模範解答を読んだり、周りに質問したりして、疑問点を解消するように促す。

理系クラスでは、週2回、朝学習で小テスト

を行う。事前に出題内容を伝え、「準備をすれば解ける」と自信を持たせるようにしている。

### 思考の活性化・深化への配慮

#### 発展的な学びを通じて、一層の関心と主体性を引き出す

生徒が演習プリントに取り組み、射手先生は教室を回り、生徒の理解度や進捗を確認する。生徒から質問を受けると、あえて教室全体に聞こえるように大きな声で、着目してほしいポイントなどを伝える。

「生徒がつまずくところは大体共通しているので、そのつまずきの解消に参考となる情報を提示します。私が最初に解説する内容を絞っている分、演習時に細かな点を補足しています」さらに、「間違えてもよいかから結論を出そう」と何度も言い、失敗を恐れずにチャレンジすることを促している。

「理解できないことに直面すると、途端に思考が止まってしまう生徒がいます。そうした分らない時こそ、粘り強く考え続けることが大事ですから、授業では、諦めずに取り組もうと繰り返し伝えていきます」

そうした指導によって確かな学力を養いながら、学期に数回、発展的な学びを通じて数学への関心を一層喚起し、主体的に学習に取り組む態度の醸成を図っている。

今回の「微分法の応用」の単元では、関数の

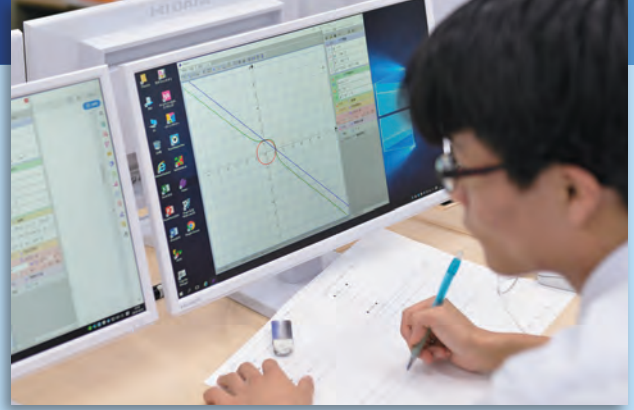
\* 元大阪教育大学附属高校池田校舎教諭の友田勝久先生が開発した関数図形描画のできるフリーソフト。

## 12:25 媒介変数表示で表された関数のグラフ作成



サイクロイド曲線やカージオイド曲線のグラフを作成し、グループごとにアステロイド曲線の概形・特徴を予測。難易度が高い課題に対して、活発に意見を交わしていた。射手先生が「今、作成したグラフはどこかで見なかった？」と問うと、表示方法は異なるが、陰関数で作成した例題のグラフと形が同じだと生徒たちは気づき、教室中から驚きの声が上がった。

## 12:15 陰関数のグラフ作成



陰関数の $x^n+y^n=1$ の $n=1,2,3$ の場合のグラフを作成後、 $n=6$ や $n=\frac{2}{3}$ とした場合の陰関数の概形や特徴についてグループで予想し合った。射手先生は、「 $n=1,2,3$ の3つのグラフをよく見ると、規則性が見えてこないかな？」などとアドバイス。グラフ作成後は、「グラフの凸性はどうなっている？」と、検証結果の考察において必要な観点を示した。

### 場づくりへの配慮

#### 学び合いを大切にしながら、1人で解きたいという思いも尊重

射手先生がグループワークを取り入れた当初は、話し合いがなかなか活性化せず、生徒間で沈黙が続くことがあった。

「学力の高い生徒ほど活発に意見を出すだろうと考えていましたが、実際には全く逆でした。『自分の力で解きたい』『ほかの生徒に負けたくない』といった意識の生徒が多く、1人で問題に取り組み姿が見られました」

それでも射手先生は、グループワークの時間を確保し続けた。一方で、生徒の思いを尊重し、「どうしても分からない時に相談すればよ

い」と、無理に話し合いを促すことはしなかった。すると、難易度が高い問題の時に生徒同士が話し合うようになり、次第に標準的な問題の時も、分からないことを質問し合うようになったという。本時でも、比較的難しかった「媒介変数表示で表された関数」のグラフ作成で、生徒は活発に話し合っていた。

### 成果と課題

#### 授業に一層真剣に取り組み、自主的に数学の議論をするように

改善が進むにつれ、以前にも増して生徒が真剣に授業を受けるようになり、「数学の問題を解く楽しさが分かった」といった声が多く聞かれるようになった。生徒が授業開始5分前には準備を整えて着席するようになったことにも、学習への前向きな姿勢が表れている。そうした変化に伴い、学力も着実に高まっているという。

また、休み時間や放課後に、生徒同士で数学について議論する姿が見られるようになったことも大きな成果だと、射手先生は捉えている。

「以前は、数学は1人で問題を解く教科だと考えている生徒が大半でした。そうした側面もありますが、他者と議論して考えを広げてこそ、学びは深まります。社会に出れば、1人で解決できない問題ばかりです。今後も、数学の授業を通して、協働して学び、問題を解決する大切さや喜びを伝えていきたいと思っています」

## 単元の指導計画

【教科・科目】数学・数学Ⅲ 【分野・単元】微分法的应用 【テーマ・作品】関数のグラフ 【設定時数】全19時間の中の15時間目 【単元目標】微分法を用いて関数の増減やグラフの凹凸などを考察し、微分法の有用性を認識して、具体的な事象の考察に活用できるようにする。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	接続① 接続と法線	接続の方程式と法線の方程式を理解し、陽関数・陰関数・媒介変数表示で表された関数それぞれの曲線に対して、接続の方程式と法線の方程式を求めることができる。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性】	①接続の方程式(公式)と法線の方程式(公式)について説明。 ②例題解説を通じて、陽関数・陰関数・媒介変数表示で表された関数それぞれの曲線に対して、接続の方程式と法線の方程式の求め方を説明する。 ③演習プリントで生徒に実際に問題演習させ、自分で解けるようにさせる。 ④時間が余った生徒には、完成ノートに取り組ませる。	【主体的な学び】説明・例題解説は、分かりやすさ(特に媒介変数表示で表された関数)と効率を重視して進める。問題演習の時間を十分に確保し、授業時間内での理解・基礎学力の定着を図る。【対話的な学び】机間指導では、生徒の手が止まっているタイミングで、有効なアドバイスを。適宜、生徒個別に対応する。【深い学び】余力のある生徒には、陽関数・陰関数・媒介変数表示で表された関数それぞれの曲線と接続・法線のグラフを描かせ、その位置関係を視覚的に捉えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業内の主体的な取り組み。</li> <li>完成ノートの進捗状況。</li> </ul>
14	関数のグラフ ⑥ 関数のグラフのまとめ	導関数と第2次導関数を利用して、定義域・対称性・増減・極値・凹凸・変曲点・漸近線などを調べ、陽関数・陰関数・媒介変数表示で表された関数それぞれのグラフの概形を描くことができる。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、協働性】	①前時の内容(媒介変数表示で表された関数のグラフの概形の描き方)の定着度を確保するため、最初に復習テストを行う。 ②演習プリントで生徒に実際に問題演習させ、陽関数・陰関数・媒介変数表示で表された関数のグラフの概形の描き方を復習させる。 ③時間が余った生徒には、完成ノートに取り組ませる。	【主体的な学び】復習テストで前時の学習内容の定着度を確保する。演習プリントを通じて、前時までの学習内容を総復習させる。特に重要な分数関数のグラフは、概形の描き方に関して改めて指導する。【対話的な学び】復習テスト終了後、4人1グループで演習プリントの問題演習に取り組ませる。解答の制限時間が来たら、演習をいったん止めて、互いの解答を見ながら疑問点とそれに対する意見を出し合い、理解を深めさせる。必要に応じて、教師がヒントを出す。【深い学び】分数関数をベースとして、グラフの描き方とその工夫について、改めて理解させ、グラフを描けるようにする(グラフの概形のイメージを膨らませる)。	<ul style="list-style-type: none"> <li>復習テストによる基礎学力の定着度の確認。</li> <li>授業内の主体的な取り組み。</li> <li>協働的な学びに対する姿勢。</li> <li>完成ノートの進捗状況。</li> </ul>
15	関数のグラフ ⑦ コンピュータ いろいろな 曲線	関数グラフ作成ソフトを利用して、前時までに学習した陽関数・陰関数・媒介変数表示で表された関数それぞれのグラフの概形をパソコンの画面上に描き、グラフについての理解および考察をさらに深める。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①特に重要な内容(分数関数のグラフの概形の描き方)の定着度を再確認するため、最初に復習テストを行う。 ②関数グラフ作成ソフトを利用し、演習プリントに掲載されている、前時までに学習した陽関数・陰関数・媒介変数表示で表された関数のグラフをパソコンの画面上に描き、グラフについての理解および考察を深める。	【主体的な学び】復習テストで前時の学習内容の定着度を確保する。関数グラフ作成ソフトを使い、前時までに学習した関数のグラフをパソコンの画面上で描く実体験を通して、グラフについての理解を深めさせる。【対話的な学び】復習テスト終了後、4人1グループで関数グラフ作成ソフトを使い、前時までに学んできたグラフを描かせる。できないことや分からない点は、グループのメンバーに教えてもらいながら、主体的に取り組ませる。必要に応じて、教師がヒントを出す。【深い学び】関数グラフ作成ソフトでグラフを描く前に、どのような概形になるかをイメージさせる。実際のグラフと比較し、気づいたことを授業プリントに記入させる。また、授業プリントにある考察問題についても、グループごとに考えをまとめさせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>復習テストによる基礎学力の定着度の確認。</li> <li>授業内の主体的な取り組み。</li> <li>協働的な学びに対する姿勢。</li> <li>完成ノートの進捗状況。</li> </ul>
16	方程式・不等式への応用① 不等式の証明	関数のグラフを利用して、不等式を証明することができる。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性】	①例題解説を通じて、関数のグラフを利用した不等式の証明を理解させる。 ②演習プリントで生徒に実際に問題演習させ、自分で解けるようにさせる。 ③時間が余った生徒には、完成ノートに取り組ませる。	【主体的な学び】例題解説は分かりやすさ(特に2種類の証明方法)と効率を重視して進める。問題演習の時間を十分に確保し、授業時間内での理解・基礎学力の定着を図る。【対話的な学び】机間指導では、生徒の手が止まっているタイミングで、有効なアドバイスを。適宜、生徒個別に対応する。【深い学び】大学入試を見据えて、しっかりした証明を書けるよう、生徒の様子を見ながら、きめ細かく指導する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業内の主体的な取り組み。</li> <li>完成ノートの進捗状況。</li> </ul>

\*射手先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全19時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp/>)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

### 生徒の声



**石井 謙さん** 射手先生の授業を通して、粘り強く考えて答えを導き出す数学の面白さを知りました。

そして、答えに迫る方法の1つとして、グループワークが有効であることも学びました。まずは自分で問題に取り組んだ上で、グループ内で解答を突き合わせ、ほかに解法がないかを確かめることなどを通じて、考えの幅を広げています。分からない問題は、謙虚な気持ちで質問することも大事だと思ようになりました。今日の授業でも、媒介変数表示で表された関数のグラフの概形が分からず、「みんなはどう?」と質問し、グループのメンバーの考えを聞いたことで、概形をイメージすることができました。今では、数学以外の教科・科目についても、休み時間や放課後に友人と教え合うようになりました。



**幸田 大翔さん** 射手先生の授業では、先生の解説を聞いた後、自分でじっくり考えたり、「こういうアプローチもあるよ」といった友人の助言を参考にしたりと、頭を働かせる場面が多く、理解が深まりやすくなりました。授業進度が速くて気は抜けませんが、50分間みっちり学び、新しい知識を得たり、できなかったことができるようになったりする充実感があります。

今日の授業では、「5次関数の極値は最大で4つだと思おう」という私の意見に対して、グループのメンバーが「n次関数の極値は、最大で(n-1)個だよ」と発言し、「そう一般化できるのか」と感じました。そうして理解したことはずっと忘れないうちに、考えを伝え合う学習を繰り返す中で、抽象的な内容を他者に分かりやすく伝える力がついてきたと感じています。

社会と連携した学校改革

学校と地域・大学・企業が  
連携した活動で、生徒の  
学びに向かう意欲を醸成

変革のステップ

背景と課題

- 自信のなさからか、やりたいことがあっても、「自分には無理だろう」と尻込みをする生徒が多かった
- 学年によって学習指導や進路指導の方針・取り組みが異なり、指導の統一ができていなかった

実践内容

- **地域と連携した学校体制** 外部とともに教育活動を充実させるべく、コミュニティ・スクール(\*1)に設置された「学校運営協議会」の仕組みを変え、学校支援センター「浦高プライド」(\*2)を新設
- **教師間の目線合わせを強化** 外部のアセスメントや学校評価アンケートの結果などを管理職が分析し、改善点を示すなど、教師間の目線合わせを強化
- **「探究ゼミ」の実施** 自分で考え、答えを出す経験を通して達成感を味わえるよう、生徒に答えが1つではない問いに向き合わせる「探究ゼミ」を実施

成果と展望

- 自分の特性を理解し、意欲的に学習する生徒が見られるようになった
- 授業改善を志向する教師が多く見られるようになった

千葉県立浦安高校は、4年制大学や短期大学、専門学校などへの進学から就職まで、生徒の希望進路が多様な学校だ。以前は生徒の生活態度に課題が見られた時期もあったが、2004年度から千葉県教育委員会の「自己啓発指導重点校」に指定され、現在では生徒指導上、模範的な学校として地域にも認知されている。また、15年度には、同県教育委員会からコミュニティ・スクールの指定を受け、地域の教育力を生かした教育活動を展開してきた。

17年度に着任した若菜秀彦校長は、「真面目で素直な生徒が多いが、自信のなさからか、や

生徒が自信を持てるよう、多様な成功体験の積み上げを目指す

PROFILE



校訓に「明朗・友愛・努力」を掲げる。生徒の基礎学力の向上に力を入れ、習熟度別授業や少人数制授業、放課後に予備校から講師を招いて英語の学び直しを行う授業など、様々な取り組みを推進している。

設立	1973 (昭和48) 年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約240人

**2019年度進路実績 (現役のみ)** 私立大は、亜細亜大、国士舘大、駒澤大、東洋大、二松学舎大、日本大などに延べ50人が合格。短大、専門学校進学115人。就職33人。

住所	〒279-0003 千葉県浦安市海菜2-36-2
電話	047-351-2135

Web site <https://cms1.chiba-c.ed.jp/urayasu-h/>

\*1 学校運営に地域の声を生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくための学校運営協議会制度を導入した学校のこと。

\*2 コミュニティ・スクールの「学校運営協議会」の承認を得て設置された外部組織。地域住民らで構成され、学習支援や環境支援、部活動安全支援、地域活動支援などを行う。

りたいことがあっても、『自分には無理だろう』と尻込みをし、諦めてしまう生徒も少なくない」と感じ、生徒が積極的に自己実現を図れるよう、全校体制で支援を強化することにした。

「生徒一人ひとりに自分の強みを認識させ、自信をつけさせたいと考えました。そうすれば、やりたいことに挑戦しようとする意欲が醸成され、目標の達成に向けて粘り強く取り組む姿勢にもつながります」（若菜校長）

教師の負担を減らしながら、より機動力を高めるため、18年度には、コミュニティ・スクールに設置されている「学校運営協議会」の仕組みを変え、学校支援センター「浦高プライド」を新設した。外部との協働体制を整備し、地域や大学、企業などと連携した取り組みを充実させることを重視したと、若菜校長は語る。

「生徒の自己肯定感を高めるためには、多様な成功体験が必要ですが、学校だけでできることには限界があります。そこで、学校外のような組織や機関などと力を合わせ、教育活動の幅を広げていくことにしました」



校長  
**若菜秀彦** わかな・ひでお  
教職歴32年。同校に赴任して3年目。「教師はコミュニケーションの専門職。『聞く構え・徹底』を意識し、生徒と向き合っていきたい」

総務部長  
**久保善啓** くぼ・よしひろ  
教職歴8年。同校に赴任して4年目。国語科「グローバルに考え、ローカルに根差した行動を通して、よい社会を継承していきたい」

## 全教師の学校経営への参画意識を高め、教師間の連携強化を図る

若菜校長着任当時の同校では、各学年で学習指導や進路指導の方針・取り組みが異なっていたため、まず現状を共有することが必要だった。そこで、若菜校長自身が実態を知りたいという思いもあり、管理職が定期的に学校の課題を整理し、教師に示すことにした。例えば、同校では、生徒の学力を客観的な指標で測るため、1・2年次には3回ずつ、3年次には2回、外部のアセスメントを実施しているが、その結果は学年間では共有されていなかった。そのため、若菜校長は、アセスメントや学校評価アンケートの結果などから、学年ごとの課題や各学年に共通して求められる改善点などを分析し、職員会議で伝えている。

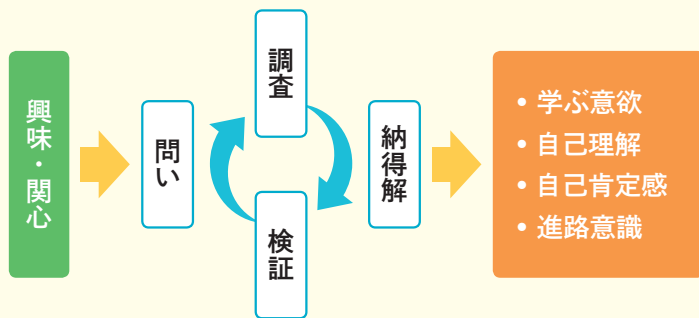
「学校が一丸となるためには、各教師が自分の学年だけではなく、他学年にも目を向ける必要があります。全学年の実態を示し、共通認識を図りたいと考えました」（若菜校長）  
次に、学年主任と分掌長による「連絡調整会議」の役割を拡充し、管理職が行っていた学校の重点目標の策定を、同会議が担うことにした。「各学年団・各分掌で、学校の課題やその対応策などについての議論を活性化させ、教師一人ひとりの学校経営への参画意識を高めよう」というねらいがありました。そうすれば、各教師が学校全体の視点を持つようになるで

しよう。教師間の連絡・調整にとどまらず、学校経営のあり方を検討する場として位置づけたいと、18年度には、同会議の名称を『学校経営会議』と改めました」（若菜校長）

## 生徒が自分なりの答えを見つけ、達成感を得る「探究ゼミ」

具体的な指導改善に向けても動き出し、校務分掌とは別に、若手教師やミドルリーダーを中心とする「プロジェクトチーム」を発足させた。「全教師が課題意識を共有するには、校務分掌の改編なども必要なので、時間がかかります。その間にも取り組みを前進させられるよう、指導改善に意欲的な教師が集まって新たなアイデアを語り合い、形にしていこうとチームを編成しました」（若菜校長）

同チームが検討し、18年度に始めた取り組みが、1年次の「総合的な学習の時間」で実施する「探究ゼミ」だ。千葉県内を中心に、10個の大学や団体と連携し、まちづくりをテーマとする「観光学」や、アニメーションリズムをテーマとする「日本文化」など、各大学や団体に1つずつ、計10分野のゼミを開設してもらおうとすると、各ゼミの指導者として、教員や専門家を派遣してもらっている。コミュニティ・スクールの「学校運営協議会」の委員が協力を要請してくれた大学や団体もあり、順調に環境整備を進めることができたという。生徒は関心があるゼミに所属し、数人ずつのグループに分かれた後、自分



\*学校資料を基に編集部で作成。

たちで問いを設定し、その答えを見つけられるよう、フィールドワークなどに取り組んだ。そして、3学期には、各ゼミ内で探究の結果を発表し、優秀グループを選抜。優秀グループは、学年大会でプレゼンテーションを行った。若菜校長は、「探究ゼミ」のねらいをこう語る。

「関心がある分野について自分なりの解を得ることで、生徒は自己肯定感を高めるでしょう。そうした体験を積み重ね、学ぶ意欲や進路意識などにつなげようと考えました(図)。また、探究する中では、調査で得られたデー

タの集計に数学が必要になるなど、教科の学習内容を活用する場面が少なくありません。教科学習の役立ちを実感させ、教科への関心も高めたいというねらいがありました」

18年度1学年団の教師は、各ゼミに1人ずつ入り、出欠の確認や引率などのゼミ運営管理を行った。そうした中、担当の教科・科目の授業に「探究ゼミ」につながる教育活動を導入する教師が徐々に増えてきた。例えば、プロジェクトチームのリーダーの1人で、国語科の久保善啓先生は、授業でプレゼンテーションの練習をさせたり、新聞記者らを招き、事実確認の重要性などについて講演してもらったりした。

『探究ゼミ』では、クラスメートと協働しながら、生き生きと取り組む生徒が目立ち、学びの面白さを実感していることが伝わってきました。そうした生徒を支援したいと、指導を工夫しました(久保先生)

### 生徒に探究を深めさせたいと、寄付金を募ってタブレットを購入

18年度の「探究ゼミ」では、探究の水準に課題があり、テーマに対する問題提起や解決策の提案などには至らず、調べ学習にとどまるグループが目立ったという。その要因は、2つ考えられた。

1つめは、ツールというハード面の問題だ。同校には生徒用のパソコンが少なく、生徒が思うように情報収集ができず、テーマから問いに

まで進化させられなかった。そこで、ICT環境を充実させるべく、学校支援センター「浦高プライド」の協力のもと、100万円を目標にクラウドファンディングに挑戦。40の個人や企業の支援により123万円を獲得することができ、情報収集のツールとして、34台のタブレットを購入した。

2つめの要因は、問いづくりへの生徒の習熟度が低かったことだ。そのため、19年度1学年の地理歴史・公民科の授業では、タブレットを活用し、校外学習を題材にした問いづくりを行っている。また、「探究ゼミ」の指導者には、参考資料として問いづくりのためのワークシートを配布し、テーマから問いへの進化を図った。

「調べ学習から探究学習へ発展させる鍵は、『なぜ?』という疑問に基づいた問いの設定にあります。そうした疑問は、多くの情報に触れることによって生まれます。そこで、気になることがあれば、生徒がすぐにインターネットで検索できるよう、各グループに1台ずつタブレットを支給したいと考えました」(若菜校長)

### 指導改善に求められる、教師のコーディネーターとしての役割

学校行事も「生徒に多様な体験をさせる」という観点から見直し、18年度には企業と連携した取り組みを模索。19年度1学年からは、1年次の校外学習と2年次の校外学習、沖縄県への

修学旅行を別々に捉えるのではなく、学校としてのねらいのもとに関連づけて設計している。

具体的には、1年次の校外学習では、民家体験を行い、2年次の修学旅行での民泊につながっている。また、2年次の校外学習では、グループごとにタブレットで東京都の魅力伝える映像を撮影し、民間業者に30秒間の動画に編集してもらおう。そして、その動画は、修学旅行での民泊先の方々との交流に生かす。さらに、修学旅行先では、沖縄県の魅力を伝える映像を撮影。それを民間業者に30秒間の動画に編集してもらった後、事後学習に用いる。

2年次のインターシシップも将来の進路決定に向けた重要な機会として位置づけている。19年度からは、学校支援コーディネーターが生徒にキャリアアカウンティングを実施し、生徒の希望に基づいてインターシシップ先を決めることにした。20年度からは、そうした支援をさらに拡大する方向で検討している。

「修学旅行は、生徒が他地域の文化に触れるよい機会です。その地域の人たちとじっくり語り合い、多様な考え方や価値観があることを意識できる行事にしたいと考えました。学校だけでは難しくても、企業や外部人材と力を合わせれば実現できる取り組みもあります。インターシシップもその一つです。そのため、教師には、学校外に目を向け、目的に応じて協働する相手を選ぶ、コーディネーターとしての役割も求めています」（若菜校長）

### 生徒に自分のペースで学び直しをさせ、学習意欲をさらに醸成

生徒の学習意欲を高めるためには、「内発的動機づけ」を強化する必要がある。そこで、学び直しの取り組みも、生徒が主体性を発揮しやすくなるように改めた。例えば、同校では、毎朝、全学年のホームルーム前の10分間を学校設定科目「ブラッシュアップ」とし、問題演習を行っている。以前は、学年ごとに教師が進度を決めていたが、19年度からは、生徒一人ひとりが自分のペースで取り組み、進捗に課題がある生徒には、担任が個別に声をかけることにした。

教科指導の改善にも着目し、教師が自分の指導の強みや課題を振り返ることができるよう、生徒に回答してもらおう授業評価アンケートを導入。そのきっかけは、コミュニティ・スクールの「学校運営協議会」で、教科指導の改善に向け、客観的な評価の必要性が語り合われたことだ。

「同協議会では、本校の課題が具体的に示されます。そうして、地域からの期待や要望を把握できることは、教師の意識を変えていく原動力となります」（若菜校長）

### 生徒の課題に応じた指導改善を全校体制で推進していきたい

同校の指導改善の成果は、やりたいことを主体的に捉え、行動する生徒の姿に表れている。例えば、18年度には、全生徒から希望者を募つ

て「社会貢献委員会」を設置。地域などから寄せられるボランティア活動の要請を同委員会が集約し、校内で参加者を募集することにした。その結果、18年には約500人だった参加者数は、19年には600人（10月現在）を超えている。学習意欲も高まっている。具体的には、19年度2学年の国語の授業では学び合いを行っているが、「探究ゼミ」のグループでリーダーとなった生徒が核となり、クラスメートからの質問に積極的に答えているという。

「分からないところがある生徒も、クラスメートや教師に、自分がどこに疑問を感じているのかを整理して説明し、納得がいくまで質問をするようになりました。学習意欲だけではなく、コミュニケーション能力も向上していると感じます」（久保先生）

学年の枠を超えた教師間の連携も強化されている。例えば、「学力向上推進委員会」を発足させ、教科や各分掌を中心に学力向上対策のアイデアを出し合える環境を整えた。また、学校評価アンケートの分析を部長会議で行ったり、毎週コマの中で学年主任会を設定し、養護教諭も参加して生徒の状況を共有したりするなど、ハード面での改善は徐々に浸透しつつある。

「全校体制で指導改善を図るといふ文化を根づかせたいと強く思っています。今後も、生徒の課題に応じて、様々な取り組みを外部の教育力を取り入れながら発展させていきたいと考えています」（若菜校長）

探究学習を軸にした学校改革

全校体制で資質・能力ベースの  
指導改善を推進し、  
自己実現への「志」を育む

変革のステップ

背景と課題

- 学習態度が受け身がちな生徒が増えていた

実践内容

- **「課題探究」の導入** 試行錯誤しながら課題を乗り越える経験を積ませるため、1・2年次に「課題探究」を導入。1年次は、笠岡市教育委員会との連携の下、地域課題への対応を通して社会への視野を広げさせ、2年次は、社会とのかかわりを考えながら自分の関心を深めさせることにした
- **カリキュラム・マネジメントの推進** 自己実現に向けた生徒の「志」を全校体制で育めるよう、新たな学校教育目標と「育てたい資質・能力」を策定。教師間の目線合わせを強化し、カリキュラム・マネジメントを推進する体制を整備した
- **ルーブリックによる評価の導入** 「育てたい資質・能力」の育成状況を測るために作成したルーブリックを用いて、生徒にも自己評価をさせている

成果と展望

- 学習意欲が高く、明確な希望進路を持つ生徒が増加
- 地域から「生徒の全人的な力を伸ばそうとしている学校」と評価されるようになった

PROFILE



旧制・笠岡町立笠岡女学校として創立。校訓に「自律・創造・友愛」掲げる。創立当時、同校の近くにあった笠岡湾で千鳥の飛ぶ姿が見られたことから、「千鳥」が同校の愛称となった。また、部活動が盛んで、加入率は約9割に及ぶ。

設立	1902(明治35)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約200人

**2019年度入試合格実績(現浪計)** 国公立大は、東京工業大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、岡山大、香川大、九州大、岡山県立大などに106人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ287人が合格。

住所	〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡3073-2
電話	0865-62-5128
Web site	<a href="http://www.kasaoka.okayama-c.ed.jp">http://www.kasaoka.okayama-c.ed.jp</a>

生徒の気質の変化に対応し、「志」を育む指導改善に着手

岡山県立笠岡高校では、2017年度から、高い目標を設定し、その達成を目指す意欲的な生徒を育成すべく、指導改善を推進している。同校がそうした方針を打ち出した背景には、生徒の気質の変化がある。少子化などの影響により、同校への入学志望者が減少傾向となり、高校入試の易化が不可避だった。そのため、中学校時代に一生懸命勉強して同校の合格を手にしたといったような生徒は以前に比べると少なくなっており、学習態度が受け身がちな生徒が目立つようになってきた。そうした中、同校は17年度入試で、9年ぶりに東京大学の合格

者を出した。その生徒は、もともとは別の大学を志望していたが、2年次に東京大学が実施した研究室ツアーに参加し、関心があった農学部の実験室の模擬講義を受講して大学の学びの楽しさを知ったことがきっかけとなり、同大学への挑戦を決意したという。成績が伸び悩む時期



**澤 顕義** さわ・あきよし  
進路課長  
教職歴21年。同校に赴任して13年目。「生徒に様々な活動の機会を提供し、生徒が成長を実感できるように支援していきたい」



**定藤 芳樹** さだとう・よしき  
進路課長補佐  
教職歴22年。同校に赴任して5年目。「生徒とともに学び、ともに成長していける教師でありたい」



**山本 晃** やまもと・あきら  
2学年主任  
教職歴18年。同校に赴任して3年目。「生徒よりも努力し、生徒とともに成長できる教師でありたい」



**森腰 巧** もりこし・たくみ  
1学年主任  
教職歴9年。同校に赴任して7年目。「教師が教えるのではなく、生徒が何をできるようになるかを考えた指導に力を入れていきたい」



**中桐 裕** なかぎり・ゆう  
進路課3学年責任者  
教職歴7年。同校に赴任して5年目。「授業を通して考える力を身につけさせるとともに、考える楽しさを伝えたい」



**植月 典久** うえつき・のりひさ  
進路課1学年責任者  
教職歴7年。同校に赴任して4年目。「生徒一人ひとりと真剣に向き合い、その可能性を最大限に引き出したい」

もあつたが、粘り強く学習し、合格を勝ち取ったと、進路課長の澤顕義先生は語る。

「その生徒の姿から、自分のやりたいことに挑戦しようとする『志』を持つことが、頑張り続ける力につながるのだと、改めて実感しました。また、社会の急速な変化に対応していくためには、自分で課題を見つけ、問題解決を図っていける、そうした資質・能力が求められます。そこで、その育成に向けた指導改善に着手しました」

## 市と連携した探究学習で、地域貢献への意欲を醸成

同校がまず取り組んだのは、1・2年次の「総合的な学習の時間」を中心に行っているキャリア教育プログラム「ACT（\*1）」の見直しだ。以前は、大学の学部・学科調べや進路講演会などで構成された進路学習に重点を置いていたが、17年度1学年からは、進路学習に加えて、生徒が社会的な課題と向き合う「課題探究」を実施することにした。

「教師から指示された学習にはしっかりと取り組めませんが、指示がないと動けない生徒が少なくありませんでした。そこで、答えが1つではない問いに向き合う経験を通して、自分で判断し、行動することの面白さを伝えたいと考えました。うまくいかないことも多いと思いましたが、試行錯誤をしながら課題を乗り越えていく経験は、生徒に『やればでき

る』という自信を与えるでしょう。そうした成功体験が、困難な状況においても自己実現を目指す『志』の醸成につながるのではないかと期待を持っていました」（澤先生）

1年次の「課題探究」では、生徒が5人1組のグループに分かれ、地域課題への対応を図る「地域学」に取り組む。地域の実態に即した取り組みになるよう、笠岡市教育委員会と連携し、「遠隔地の救急医療体制の確立」「笠岡駅前活性化」など、市が重要課題として位置づけるテーマを毎年複数提示してもらったことになった。各グループは、その中から関心のあるものを選び、テーマごとに市の職員の講演を聞いたり、職員とともにフィールドワークを行ったりしながら、課題への対応策を考えていく。また、文献の調べ方やアンケート調査の方法など、探究学習に必要なスキルを学べる、大学教員による研修会も実施。そして、探究学習の結果をポスターとレポートにまとめ、3月の発表会（\*2）で、市の職員や保護者らに発表する。17年度1学年を担当した中桐裕先生は、地域課題に取り組ませるねらいをこう話す。

「本校の卒業生の多くは、大学進学や就職で地元を離れます。他地域から故郷のことを考える人材も必要ですし、地元で働きながら、地域のために頑張る人材の育成も大切です。生徒には、『地域学』に取り組んで地域貢献への意識を高めてほしいと思っています」  
2年次の「課題探究」は、「テーマ探究」と

\*1 自ら行動し、自ら考え、自分の力で創造する生徒を育てたいという思いを込め、「Active」「Creative」「Thinking」の頭文字を取って命名。  
\*2 現在は、1年次の12月に発表会を実施している。

題され、生徒一人ひとりが自由に設定したテーマの探究に取り組む。「地域学」で習得した探究学習に必要なスキルを活用してデータを収集したり、似たテーマに取り組むクラスメートと議論をしたりしながら探究し、論文を作成する。

『「地域学」を通して、生徒は社会への視野を広げます。そこで、『テーマ探究』においては、社会とのかかわりを考えながら自分の関心を深めさせることにしました。例えば、福祉関係の職業に就きたいと考えている生徒が、日本とスウェーデンの福祉制度を比較するなど、希望進路と関連させたテーマを設定する生徒も少なくありません』（澤先生）

### 探究学習に取り組む中、「志」と責任感を抱いていく生徒たち

「地域学」は同校で初めての探究学習だったため、取り組みを始めた当初は、生徒に求める発表の水準などが分からず、教師も戸惑うことが多かったという。それでも、生徒の成長に寄与している実感があつたから、取り組みを継続できたと、2学年主任の山本晃先生は話す。

「地域課題と向き合う中、最初は控えめだった生徒が積極的にアイデアを出さず、少しずつ主体性が育まれていると感じます。それは、『自分でできる地域貢献を実現したい』といった思いが強くなっていったからでしょうし、そうした『志』を抱く生徒の姿に、私たちが励まされました」

17年度の「地域学」では、「笠岡駅前の活性化」のテーマに取り組んだグループが提案した「笠岡駅前イルミネーションの設置」というアイデアが市に採用されるなど、教師の期待以上の成果が上げられた。さらに、「地域学」が終わった後には、どのようなイルミネーションを設置するか、近隣の他校の生徒と協働で考案してほしいと、市から追加の協力要請を受けた。すると、そのグループの生徒は、『アイデアを出した自分たちが本校の代表として、他校の生徒とともに取り組みたい』と名乗り出たという。

「生徒たちの表情からは、『自分たちで責任を持ってやり遂げたい』という意欲が伝わってきました。主体的に課題と向き合うことのやりがいや面白さを実感できたのだと思います」（中桐先生）

### 全校体制での指導改善に向け、新たな学校教育目標を設定

学校が一丸となって生徒の「志」を育成できるように、指導体制の整備にも力を入れた。18年度には、「志高く自らの人生と社会の未来を拓く人を育てる」という新たな学校教育目標を打ち出し（図1）、その達成に向けた「求める生徒像」「育てたい人間像」「育てたい資質・能力」を策定した。進路課長補佐の定藤芳樹先生は、策定までに留意した点を次のように語る。

「改めて本校が目指す教育の方向性を明確にし、カリキュラム・マネジメントを推進し

#### 笠岡高校の教育方針

図1

##### ◎学校教育目標

志高く自らの人生と社会の未来を拓く人を育てる

##### ◎求める生徒像

- 夢の実現に向けて主体的に学ぶことのできる生徒
- 広く社会に目を向け、さまざまなことに挑戦する意欲を持った生徒
- 生徒会活動、部活動、ボランティア活動等に積極的に取り組み、リーダー性や協調性を発揮できる生徒

##### ◎育てたい人間像

- 知・徳・体の調和のとれた人格を身につけた人
- 新しい時代に必要な6つの力「未来開拓力」を身につけた人
- 生涯にわたって主体的に学び続け、地域社会やグローバル社会に貢献できる人

##### ◎育てたい資質・能力 未来開拓力

社会の中で役割を果たしながら自分らしい生き方を実現し、新しい知や価値を創造していくために必要な6つの資質・能力を「未来開拓力」と定義。

- 教養力…幅広い教養と課題発見・解決のための知識・技能
- 思考力…論理的に考え、批判的に掘り下げ、創造する力
- 表現力…思考・判断の結果や経過を分かりやすく伝える力
- 協働力…多様な他者とコミュニケーションをとり、協力する力
- 省察力…自らの行動を振り返り、改善し、前に踏み出す力
- 志力…志高く挑戦し、主体的に人生や社会の未来を拓く力

\*学校資料を基に編集部で作成。

たいと考えました。しっかりと合意形成ができるよう、教師間で協議を重ねました」

「育てたい資質・能力」について検討したのは、若手教師を中心にしたワーキンググループだ。具体的には、「省察力」「志力」などの6つとし、

それらを「未来開拓力」と総称していると、グループの一員である植月典久先生は話す。

「生徒や教師が日常的に学校教育目標を意識できるよう、『育てたい資質・能力』の数を絞ることに留意しました。大切にしていることのすべてを『○○力』と列挙するのではなく、主体性と挑戦する意欲などをまとめて『志力』とするなど、吟味を重ねました」

### 「未来開拓力」のルーブリックで、資質・能力ベースの指導を強化

22年度から年次進行で実施される次期学習指導要領に向けて、18年度には、2つの学校設定教科・科目を新設した。

1つめは、英語の4技能の総合的な向上を目指して全学年に設定された「Global English」だ。2年次に、1年次の教科書をもう一度用いて知識・技能の定着を促した上で、3年次には、英語による思考力・判断力・表現力を伸ばすため、プレゼンテーションの練習を主軸に据えた。2つめは、1・2年次の探究学習に続き、既習の知識・技能を活用し、考察できる資質・能力のさらなる育成を図る「探究」だ。理系では、2・3年次に設置した「自然科学探究」において、理科や数学、情報の学習内容を組み合わせた課題などに取り組み。文系では、3年次に設置した「人文社会探究」において、グループで人文科学の文献などを講読し、その内容について議論をした後、生徒一人ひとりが文献のテーマに

対する自分の考えを文章にまとめる。

19年度からは、生徒に「未来開拓力」を自己評価させるルーブリックを作成し(図2)、それを活用したeポートフォリオを構築している。例えば、体育祭や文化祭といった学校行事の後、生徒が自己評価を入力し蓄積していく。また、各学期の最後には、学期全体を通じた学習や生活などについての振り返りを行う時間も設けていると、1学年主任の森腰巧先生は話す。

「以前も行事の後には感想を書かせていましたが、生徒は何を書けばよいのか分からず、漠然とした内容になることもありました。ルーブリックによって振り返りの視点が明確になったことで、生徒は自分の課題を把握しやすくなったようです。『未来開拓力』の中から自分に足りない資質・能力を見つけ、その

向上を目指すなど、目標を持って行事に取り組む生徒が増えました」

### 「未来開拓力」を教育活動の柱とし、「志」をさらに伸ばす

一連の指導改善は、大きく実を結んでいる。例えば、「課題探究」に取り組む中で、高い「志」を抱く生徒が増えたことは、前述した通りだ。そうした意欲は進路選択にも表れ、「課題探究」で向き合ったテーマを追究するという観点から、大学・学部を選ぶ生徒も少なくなっている。また、教科学習においても、自分で課題を見つけ、それに取り組む生徒が増え、旧帝大などの最難関国立大学の合格者数の増加につながっている。

地域からの同校への評価も変わった。以前は「教科学習にしっかり取り組ませる学校」といった見方だったが、現在は「生徒の全人的な力を伸ばそうとしている学校」として注目されるようになった。「地域学」などを通して、資質・能力ベースによる指導改善の成果が地域に伝わっていることがうかがえる。

澤先生は、今後についてこう語る。

「20年度から、特別活動におけるキャリア教育などについてのポートフォリオ『キャリア・パスポート』の活用が、小・中・高で始まります(\*3)。それを見据え、教育活動を全般で、生徒の『未来開拓力』への意識をさらに高められるよう、指導改善を続けていきたいと考えています」

図2 「未来開拓力」のルーブリック

資質・能力・態度	省察力	志力
シーショ ケカ 協力 高め	自らの行動を振り返り、改善し、前に踏み出す力	志高く挑戦し、主体的に人生や社会の未来を拓く力
レベル 1	自分の行動を振り返り、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動につなげることができる。	高い志を持って将来の生き方や地域・国内外の未来を自分の将来を設計することができる。
レベル 2	自分で目標を立てることができる。	物事を前向きに捉え、社会の一員としての自覚を持ち、将来の進路について考えることができる。
レベル 3	自分の目標と現実の差を見つめることができる。	さまざまな活動に挑戦し、社会の抱える問題に目を向け、自分の適性に対する理解をしようとする可以尝试。

「未来開拓力」を構成する6つの資質・能力それぞれについて、5段階の達成目標を設定し、様々な教育活動の振り返りに活用している。\*学校資料を基に編集部が一部改編。

\*3 文部科学省では、「キャリア・パスポート」について、「記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない」としている。

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、取り組むべき練習を自ら考え、実行し、振り返るために、生徒が活用する「部活動目標達成シート」について議論した。

# Before

岩手県立宮古高校  
北川貴彦先生提供

## 「部活動目標達成シート」

### 課題

- ① 自己分析が不十分なため、取り組むべき練習内容を具体化できていない生徒が見られる
- ② 克服すべき課題だけでなく、これまでの活動を通して成長したことも認識させたい
- ③ 部員同士で練習を工夫し、高め合う雰囲気を醸成したい

### 検討メンバー



ツール提供者

岩手県立  
宮古高校

**北川貴彦**

きたかわ・たかひこ



千葉県立  
四街道高校

**望月正彦**

もちつき・まさひこ



福岡県立  
東筑高校

**辻本貢士**

つじもと・こうじ

令和2年 高総体までの目標達成計画

名前

① 現在の成績(個人)

地区予選結果

県大会結果

② チームについて

今後の目標

③ シートの書き方

- ・ 2次大会直後(高校総体、新人戦)に書く。
- ・ 「〇時点の目標」の欄は、漠然としたものでも具体的なものでよい。
- ・ 「～目標達成のためにすべきこと」の欄は、箇条書きで具体的なもので書く。
- ・ 何故その練習が必要かを説明できるようにする。

どんな選手になりたいか?

全国選抜個人戦予選会

1月時点の目標:

↓

春季選抜・地区大会

3月時点の目標:

↓

高校総体県大会

5月時点の目標:

1月: 目標達成のためにすべきこと (全国選抜個人戦予選会)

3月: 目標達成のためにすべきこと (春季選抜)

5月: 目標達成のためにすべきこと (県大会)

現状と目標との差を把握し、  
取り組むことを具体化させたい

岩手県立宮古高校の北川貴彦先生は、顧問を務める卓球部で、大会が終わるごとに、生徒に次の大会までの目標とその達成のために取り組むべきことを「目標達成シート」に記載させている。現状と目標との差を埋めるために、今の自分に必要な練習は何かを考えさせることが目的だ。しかし、的確に自己分析し、必要な練習を具体的に記載する生徒もいれば、漠然とした内容しか書けない生徒もいる。また、シートの仕様は自分が克服すべき課題の整理を中心としているが、「成長したこと」にも目を向けさせ、加えて、チーム貢献への意識を高められるように改良したいという願いがあった。

# 全学年 部活動目標達成シート



## After

### 改良ポイント

#### 1 目標との差を認識しやすいように、自己分析の欄を拡充

主に大会結果を記載させていた自己分析の欄を拡充。自分について詳しく振り返ることで、目標との差を埋めるための練習が考えやすくなる。

#### 2 他者評価を取り入れ、自分が克服すべき課題と、取り組むべき練習内容を明確にする

自分の課題を、チームメートにも指摘してもらおう。客観的に課題を把握することができ、自分が取り組むべき練習が考えやすくなる。また、チームメートに目を向ける習慣をつくることで、チーム貢献意識を高める。

#### 3 「技術面」「精神面」とに項目を分け、成長したことを記載させる

精神面の成長についても言及させる項目を追加。技術面と精神面の2つの視点で振り返りを促す。

### 目標達成シート

名前

#### ①今の自分について

	自分自身による評価	チームメートからの評価・アドバイス
技術面	<ul style="list-style-type: none"> <li>• できるようになったこと</li> <li>• 克服したい課題やさらに伸ばしたい長所</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• できるようになったこと</li> <li>• 克服するとよい課題やさらに伸ばすとよい長所</li> </ul>
精神面	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 成長を自覚していること</li> <li>• 克服したい課題</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 成長を感じる</li> <li>• 克服するとよい課題</li> </ul>

#### ②次の大会までの個人目標(なりたい選手像)とチーム目標

個人目標	チーム目標
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 技術面(具体的に数値で表す)</li> <li>• 精神面</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 大会成績</li> <li>• 理想とするチーム像</li> </ul>

#### ①と②の差を埋めるために次の大会までに取り組むべきこと、心がける練習態度、チーム貢献

自分のために	チームのために

他者評価も踏まえて  
これまでとこれからを考える

取り組むべき練習を具体化するにあたり、目標との差を自覚するための現状把握が不十分だった。そこで自己分析の欄を拡充した。まず、課題に気づきやすいように、チームメートからの評価を取り入れることとした。そして、「成長」についても記載する項目を追加して、技術面と精神面の2つの視点から分析させる。複数の視点を示せば、課題だけでなく成長したことについても考えやすい。シートは1大会ごとに1枚使用。他者評価は、日々の練習中のチームメートからのアドバイスを振り返って記載させる。そこには、普段から部員同士で高め合う雰囲気醸成するという意図もある。

次ページでは、  
3人の先生方の  
検討の様子を  
ダイジェストで紹介!



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

# 全学年 部活動目標達成シート



## 部活動の指導を改善する契機としてシートを議論

北川先生が卓球部で「目標達成シート」を活用した背景には、生徒が顧問やコーチに頼りすぎることなく、主体的に練習を改善し、仲間と高め合うチームになってほしいという願いがあった。単にシートを書きやすいものに変えるだけではなく、練習そのもののあり方が変わることにつながる改訂を目指して、検討会の議論が進んだ。

自分を客観視し、チームメートの技術や態度にも目が向くように、他者に関する気づきをシートに盛り込むのが、今回の改訂の柱となった。チームメートに関する練習中の気づきを本人に伝

### 活用の流れ

- 1 練習中のチームメートからの声かけなどを踏まえて、自分が今できていることや課題となっていることを記入する
- 2 次の大会に向けて、なりたい選手像とチーム目標、目標達成のためにすべきことを記入する
- 3 顧問やコーチは、生徒がシートに記入した内容を面談等で確認する

えるために、生徒同士の声かけが活性化することが期待される。練習中の声かけを後から振り返ることができるように、チームメートについて気がついたことをホワイトボードや付箋を使って記録する時間を確保するなど、練習の進め方やその環境の工夫についても必要性が確認された。

「できていること」よりも「できていないこと」に目が向きがちな生徒の思考を前向きなものにするため、現状や目標をできるだけ数値で表し、成長を可視化しやすくすることの大切さも検討会では共有された。同時に、数値で表せない価値や課題を、顧問やコーチ、あるいは部員同士の対話の中で確認していくことの大切さも指摘された。

## 検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

### より主体的に活動できる仕かけと支援を追究する

岩手県立宮古高校 北川貴彦 きたかわ たかひこ



部活動を通して私が生徒に育みたい力の1つは、目標達成までのプロセスを逆算する力です。自分が望んで参加している部活動だからこそ、主体的に取り組むことができるはずですし、そうした経験は、部活動以外、例えば受験勉強でも生きてきます。しかし、目標達成までのプロセスを考え、それを検証する機会は、教師である私をもっと生徒に提供していくべきだと、先生方とお話する中で気がつきました。

これまでも目標達成のために何をすべきかを書かせてきましたが、その際、他者の視点を入れたり、数値での表現を大切にしたりするという観点は十分ではありませんでした。何ができるようにしたいのか、何ができているのが具体的になることで、もっと効率的な練習を実現できそうです。

忙しさから部員と向き合う時間も減っていたことにも気がつきました。時間に限りはありますが、部活動を通して生徒が人間的に成長できるよう、よりよいサポートのあり方をこれからも追究していきたいです。

**北川先生プロフィール** 教職歴17年。同校に赴任して2年目。進路指導課、卓球部顧問、数学科、「人事を尽くして天命を待つ」を座右の銘に、最善の準備を常に心がける。

**学校プロフィール** 全日制・定時制・通信制/普通科/共学/1学年約200人(全日制)/2019年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、岩手大、東北大、千葉大などに69人が合格。私立大は、東北学院大、東洋大、日本大などに延べ125人が合格。

## 野球ノートでのやりとりを通して、技術と心を磨く

千葉県立四街道高校 望月正彦 もちづき・まさひこ



本校の野球部の「野球ノート」でも、チームメイトを観察することを大切にしています。生徒は、野球に関することはもちろん、生活の中での気づきなどを自由に書き、毎朝私に提出します。強制ではありませんが、毎日欠かさず書いてくる生徒もいます。それは、私が必ず一筆入れているからだと思いません。私が忙しい時は、「深い！」などと言ったり、大事な箇所を線を引くだけになったりしますが、生徒は「先生は何を深くと感じ取ったのだろう」「なぜ、ここに線を引いたのだろう」と考えます。そして、自分で考えるから、グラウンドでの動きも変わっていきます。3年間で26冊書いた生徒もいました。今回改良したシートでも、教師からの一筆はぜひ入れてあげてください。

野球ノートの中の生徒の言葉を、部内報でも紹介しますが、高校生がこれだけ深い洞察力と豊かな感性を備えているのかと、保護者やほかの先生を驚かせます。部活動を通して人間力の向上が、書くという行為によって促進されているのです。

**望月先生プロフィール** 教職歴34年。同校に赴任して3年目。2学年主任。硬式野球部部長。国語科。「二人ひとりか人生の土台となるような充実した高校生活を送れることを願っています」望月先生の前任校での部活動指導について、本誌2015年2月号特集で紹介しています

**学校プロフィール** 全日制/普通科/共学/1学年約320人/2019年度入試合格実績(現役のみ)/私立大は、専修大、東洋大、日本大、武蔵大などに延べ182人が合格。

## 部活動で、自分と未来はよりよくできることを知る

福岡県立東筑高校 辻本貢士 つじもと・こうじ



顧問を務めるバスケットボール部では、京都大学のアメリカンフットボール部の指導者から教わった「チーム&自己分析シート」を活用しています。チームの目標、現状、問題と原因、その解決策を分析し、自分の役割を考えさせます。大切にしているのは、例えば、シユートの成功率を分析する中で、「試合に勝つためにはその成功率を何%にしなければいけないのか」などと、数値で表すことです。何がどれくらい足りないのかを明らかにして、目標達成までのプロセスを自覚する経験は、高校卒業以降も役立ちます。また、部内の役割など、数値化できない成長を評価するのは、面談が効果的です。自分だけに関心を持ってもらい、認められる時間は、生徒を勇気づけ、より積極的にします。面談で教師側が思いもよらない生徒の能力を発見することもよくあります。

部活動は、究極のアクティブ・ラーニングが成立する場だと思っています。部活動を通して、「未来は変えられる」ということを生徒に実感させたいです。

**辻本先生プロフィール** 教職歴22年。同校に赴任して11年目。主幹教諭。教育推進部長。バスケットボール部顧問。数学科。「自分で考え、自らの意志で行動できる生徒を育てたい」

**学校プロフィール** 全日制/普通科/共学/1学年約320人/2019年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、北海道大、東京工業大、東京大、京都大、九州大などに145人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ257人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

### 指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材を検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認ください

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。

# 真正な課題設定と問いかけにより、 課題に対する当事者意識を高める

## 義務教育学校の「総合的な学習の時間」



土佐山の魅力を伝える観光ツアーの予行演習をグループで振り返る。「階段が急なので、高齢者の手を引いた方がよい」などと、様々な意見が出た。後日、再び予行演習を行い、実際に商品化した。

### 土佐山学の概要

土佐山学舎では、1・2年生の生活科と、3～9年生の「総合的な学習の時間」を「土佐山学」と称して、9年間一貫したカリキュラムを編成している。そのすべての活動に「地域」「キャリア」「コミュニケーション」の3つのキーワードを織り込み、体験や交流によって得られる気づき・発見・出会い・探究心を基に、児童・生徒が主体的に考え、判断し、行動・表現する力を引き出すことをねらいとしている。9年生では、9年間の総仕上げとして、それまでの学びを生かした課題を毎年、設定している。

### ◎土佐山学の主な内容(例)

**ふるさと土佐山の川を守ろう(4年生)** 市内を流れる川の現状を調べ、自分たちでできることを考え、川を守る作戦を立てて漁業組合の人と一緒に実行する。

**伝えよう、木の魅力(7年生)** カンナで削った木のくずを使い、自分たちで作ったコサージュの普及に取り組み、森林を守り広める方策を考える。

**土佐山活性化プロジェクト(8年生)** 土佐山のPR方法を考え、地域の人と一緒に実行したり、模擬議会で発信したりした後、活動を振り返る。

### 私が訪問しました

高知県立  
高知西高校  
**西村芳江**  
にしむら・よしえ



◎教職歴18年。同校に赴任して8年目。グローバル教育部所属。SGH(\*)事業の高校2年生の探究授業を企画運営して3年目となる。高知大学大学院博士課程に籍を置き、分子生物学の研究を行う中で得られる実感から、探究活動に必要な要素を高校での授業にどう生かすかを考えている。

### 高知県立高知西高校

全日制/普通科・英語科/共学/1学年約280人/2019年度入試合格実績(現浪計): 国公立大は、筑波大、東京外国語大、岡山大学、広島大学、高知大学などに97人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ194人が合格。

\*文部科学省スーパーグローバルハイスクール。

### 私が案内しました

高知県・高知市立  
義務教育学校土佐山学舎  
**福井佳織**  
ふくい・かおり



◎教職歴25年。同校に赴任して5年目。研究主任。2017年度、高知県内の若手・中堅職員の良い教育実践を表彰する「土佐の教育実践表彰」を受ける。「土佐山学」(生活科、総合的な学習の時間)の実践と研究を行う中心的な役割を担っている。

### 高知県・高知市立義務教育学校土佐山学舎

持続可能な地域づくりに向けて高知市が策定した「土佐山百年構想」の一環として、地域の小・中学校が合併し2016年より義務教育学校となった。義務教育9年間で、前期4年、中期3年、後期2年に区分し、発達段階に応じたスモールステップによるカリキュラムを展開。

\*義務教育学校のため、小学校1年生～中学校3年生を1～9年生と呼称する。

\*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

**西村** 本校の「総合的な探究の時間」は、SDGs（\*1）を切り口に課題を設定していますが、課題を自分事とするのに苦労する生徒もいます。今回見学した、「総合的な学習の時間」の「土佐山学<sup>とさやまがく</sup>」では、9年生が自分たちで企画した「土佐山観光ツアー」を成功させるため、前時に行ったツアーの予行演習を振り返っていました。「降雨時、参加者にはどこで待機してもらうのか」などと、どの生徒も、当事者意識を持って意欲的に改善策を話し合う様子が印象的でした。

**福井** このツアーは、地域住民や旅行会社などの協力を得ながら、実際に集客を行い、有料で催行します。当日のガイドも生徒が行います。教師が設定した真正な課題に取り組み中で、生徒は自分たちの言動が実社会に影響を与えることに気づき、自分なりの考えを積極的に伝え合おうとする姿勢が生まれます。

**西村** そうした姿勢を義務教育段階から身につけ、高校で発展させていくことで、より高度な探究課題に対しても主体的に取り組めるようになりますね。中学校と高校では課題設定の仕方に違いはあるものの、生徒の当事者意識を高めることの大切さは共通しているようです。

真正な課題設定によって学びが社会に影響を与えることに気づかせ、教師の問いによって自分事にさせていく流れが分かりました



当初の単元計画から大幅に変わっても、課題が生徒自身のものとなるまで待ちながら、様々な問いを投げ続けます



**福井** 授業では、「生徒からこんな発言が出てきたらいいな」というイメージを持ちながら、生徒が「自分たちが解決する!」という気持ちになるまで、何度も問いかけ、待つことを心がけています。先ほどの授業でも、世の中には様々な立場の人がいて、そのことに配慮する大切さに気づいてほしいと考えていました。すると、観光スポットまで坂道が続くため、参加者には歩きやすい靴を準備してもらうなど、装備面での注意喚起をする必要性に気づいた生徒がいたので、それ

だけでなく、高齢者や体の不自由な人が参加した場合への配慮の必要性にも思いを馳せられるように、「どんな人が申し込んでくると思う?」「ガイド役の人は事前にどんなことを案内すればよいか?」などと問いかけました。

**西村** 福井先生が問いかけを繰り返して生徒の考えを深めさせる様子から、思考が熟するのを待つ大切さを改めて感じました。また、生徒が答えに詰まった時、その課題は誰のため、何のためなのかという上位目的に立ち返る問いを何度も投げかけていたことも心に残りました。今日の学びを踏まえて、課題に対して生徒がより主体的にかかわることができるような指導を追究したいです。

今日の学びを  
自校の指導につなぐ

教科の枠を超えて  
教師が連携しながら、  
探究学習を推進したい



土佐山学舎では、「土佐山学」を柱に据え、各教科だけではなく、行事等も含めたカリキュラム全体で生徒を伸ばす体制が確立されています。各教師が教科の垣根を超えて相互理解を深めて連携すれば、生徒は学びの意義を一層理解し、探究学習の質も高まります。そうした体制を実現するには、学校全体で方向性や取り組みを共有することが必要だと実感しました。どのような生徒を育てたいのか、地域とどのようにかわっていくのかといった学校教育の原点に立ち戻りながら、「総合的な探究の時間」だけにとどまらず、学校という組織の中で、できることを考えていきたいと思います。



旅行会社の社員からのアドバイスを基に、自分たちの企画をどのように改良するとよいかを話し合った。福井先生は、誰の、何のためのツアーなのかを生徒に問い続けることで、生徒の当事者意識を高め、改善策が生徒から活発に出される場をつくり上げていった。



# 1年次から多様な留学機会を与え、 学びの意欲を高めるきっかけに

## 名古屋商科大学 留学プログラム

### ヨーロッパ約75日間の 1人調査旅行に挑戦!

2年次にヨーロッパ各国を回りながら自分で設定した研究調査を行う「ギャップイヤープログラム」に参加。他の参加者とパリで事前研修を受けてから調査をスタートしたため、不安は少なかったです。(小塚さん)



### ベトナムで海外の同世代の仲間と ボランティア活動を行う

1年次に「国際ボランティアプロジェクト」でベトナムに行き、保育園で子どもに英語を教えたり、壁(写真)の補修を手伝ったりしました。帰国後は、長期留学を目指して、英語の学習に力を入れています。(丸本さん)



### 4か国25都市を回り、視野が広がった

ヨーロッパでの活動中は、調査を行う日と観光する日(写真はミラノ大聖堂)を決め、計画的に調査を進めました。一番の収穫は、幅広く学ぶ必要性を実感できたことです。経営だけでなく、心理学やマーケティングにも興味を持ち、学んでいます。(小塚さん)

開学当初から国際化に取り組み、世界59か国149校の大学と提携。豊富な留学プログラムを用意しており、卒業までに学生の約4分の1が何らかの留学プログラムに参加するという。1年次から参加可能な留学プログラムも多数あり、その代表的なプログラムの1つが、海外の同世代の仲間と一緒にボランティア活動を行う「国際ボランティアプロジェクト」。

名古屋商科大学は、世界で活躍するグローバル人材の育成を教育目標に掲げ、実践的なビジネススキルが修得できる4学部8学科(\*2)を設置している。

### 1年次から挑戦できる ボランティア留学



コミュニケーション学部\*1  
英語学科3年  
**丸本紗代子**  
まるもと・さよこ  
岐阜県立大垣南高校卒業。  
長期留学を希望しており、  
同大学に入学。



経営学部  
経営学科3年  
**小塚健太**  
こづか・けんた  
愛知県・私立至学館高校卒業。  
経営学を学び、将来は  
起業するのが夢。

\*1 コミュニケーション学部は、2018年度より国際学部へ改組。\*2 経済学部(総合政策学科/経済学科)、経営学部(経営学科/経営情報学科)、商学部(マーケティング学科/会計ファイナンス学科)、国際学部(グローバル教養学科/英語学科)の4学部8学科。

クト」だ。

コミュニケーション学部英語学科3年の丸本紗代<sup>さよ</sup>さんは、1年次の夏季休業中にベトナムの保育園でのボランティア活動に参加した。国籍の異なる10人と言葉の壁を超えて協働したことで、学びの目標が明確になったという。

「中国と韓国から来た学生と仲よくなり、留学後も互いの家を行き来するくらいに絆を深めました。ただ、私の当時の英語力は低く、日常会話をするのも一苦労でした。帰国後は、英語力を高めるために英語の学習に力を入れ、長期交換留学に挑戦したいと考えるほどになりました」

## 海外で開拓者精神を身につけるプログラムも

経営学部経営学科3年の小塚健太<sup>けんた</sup>さんは、2年次に1・2年生向けの留学プログラム「ギャップイヤープログラム」に参加した。約75日間かけて1人でヨーロッパを回りながら自分で設定した研究テーマについて調査を行い、開拓者精神を身につける留学プログラムだ。

小塚さんは、「なぜ、ファストファッションがヨーロッパで流行している

か」を調査するため、フランス、スペイン、イタリア、イギリスの4か国25都市を訪れ、店舗で消費行動を観察し、現地の顧客130人へ街頭アンケートを実施。渡航中、小塚さんが苦労したのは言葉の壁だ。街頭での調査を想定し、タブレット端末を使つて現地語でのアンケートに回答してもらい準備をしたが、最初は思うように調査が進まなかった。

「現地語で挨拶をしても通じず、立ち止まってもらえませんでした。勇気を奮い立たせ、身振り手振りも交えてアンケートを依頼したところ、答えてくれる人が増えていきました。大切なのは言葉だけではなく、熱意だと学びました」(小塚さん)

留学中は大学にレポートを週1回提出し、帰国後は調査結果をまとめて提出することで、教養教育科目単位として最大10単位が認定される。

「経営学でPDCAサイクルの重要性を学んでいましたが、研究においても自分でPDCAサイクルを回すことが重要だと実感し、経営学がより面白く感じられるようになりました。現在はマーケティングの研究室に所属しています」(小塚さん)

留学後にも語学力を鍛える環境が

整っている。図書館内のセルフ・アクセス・センター(SAC)では、個別に外国語学習法や海外留学などについてのアドバイスを受けられる。

## 奨学金と単位認定を受けられ、複数の留学挑戦も可能

同大学は、2年次以降、本格的に海外で学びを深めたい学生のために、「サマープログラム」「交換留学」などの学術系留学も充実させている。成績や語学力などの基準を満たし、選考に通過すれば、そうしたプログラムでの欧米の有名大学への留学も可能だ。また、すべての留学プログラムに対して航空運賃代や留学先授業料などの給付型奨学金が設けられている。

丸本さんは、2年次に香港中文大学での1年間の交換留学、3年次に「海外インターンシップ」に参加した。どの留学プログラムも単位が認定され、複数の留学にも挑戦でき、休学せずに4年間での卒業が可能だ。「海外の同世代の仲間と接し、自分の意見を持つことの重要性を学び、新しい自分に変われました。将来は、日本と海外の架け橋になれる仕事に就きたいです」(丸本さん)

## 大学の思い

海外留学に挑戦して、人生が変わる経験をしてほしい



国際交流委員会委員長  
国際学部部長  
植村 猛  
うえむら・たけし

本学では、1935年の学園創立以来、「フロンティア・スピリット(開拓者精神)」を建学の精神として、教育を実践してきました。それは、学園創立者がカナダ留学時代に肌身で感じた教育精神であり、今の学生にも一番必要なものだとは感じています。失敗を恐れずに、新しい世界に挑戦する意欲は、国際的なビジネスを行う上でも非常に大切です。

そこで、1年生でも挑戦できる様々な留学プログラムを用意しています。また、経営学の大学評価の世界的権威であるAACSB International(※3)を取得して、海外の有名大学との提携による「交換留学」を充実させるほか、「グローバルフィールドスタディプログラム」(80日間、2人1組での世界一周など)といったユニークなプログラムも提供しています。さらに、2020年度入試から「ダブルディグリープログラム入試」を開始し、本学卒業時に留学先と本学の学位の両方取得できる特別枠を用意します。今後も、世界を舞台に活躍したいと考える学生を育成していきます。

\*3 米国の経営学教育の第三者評価機関による教育の国際認証。名古屋商科大学は、2006年に国内2例目となる認証を取得。



# 淡路島を舞台に幅広く農学を学び、 地域創成に貢献するリーダーを養成

吉備国際大学 農学部 地域創成農学科



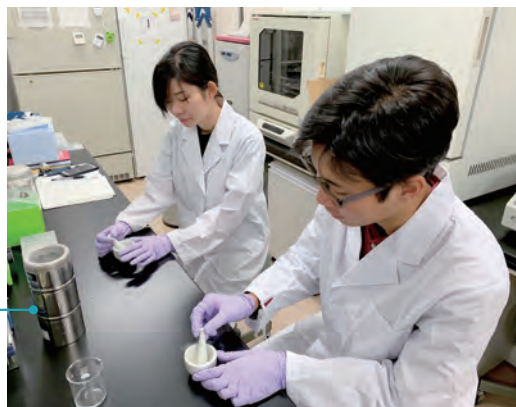
## キャンパス近くの広大な農場で 季節の野菜を育てています

淡路島には農閑期がないため、「フィールド実習」を通年で行うことができます。季節に応じた野菜を、仲間と協力し合いながら育てています。写真は、特産の玉ねぎの収穫の様子です。(富永さん)



## 希少な柑橘、ナルトオレンジを 守るための研究をしています

ナルトオレンジは、約300年前に淡路島で誕生した柑橘ですが、栽培する農家は現在十数園。果皮の香りが強いなど、魅力の多い柑橘なので、後世に残すために研究中です。(阪上さん)



## 果実のDNAを分析し、繁殖過程を調べています

ナルトオレンジの葉からDNAを抽出し、どのように繁殖してきたのかについて分子生物学的な研究を行っています。卒業研究では、種子のないナルトオレンジの開発にも取り組みたいと思っています。(富永さん)

「フィールド実習Ⅰ・Ⅱ」では、米

同学科の魅力は、大規模農場を営む専業農家が多い淡路島で、6次産業化（\*2）までのプロセスを実習や見学を通して間近に学べることだ。本格的な農業実習が1年次からカリキュラムに組み込まれており、

1年次から自分たちで  
作物を育てる実習がスタート

吉備国際大学農学部地域創成農学科（\*1）は、日本有数の農業生産地である淡路島にキャンパスを有している。農業の生産・加工・経営全般にわたる専門的な知識と技術を学び、地域創成に貢献できるリーダーを育成するカリキュラムを特徴としている。



農学部  
地域創成農学科4年  
**阪上綾香**  
さかうえ・あやか  
兵庫県立伊丹北高校卒業。  
農家になるのを目指して、  
同学科に入学。



農学部  
地域創成農学科3年  
**富永和希**  
とみなが・かずき  
大阪府立北千里高校卒業。  
農業と地域創成に興味があり、  
同学科に入学。

\*1 2018年4月、醸造学科の開設に伴い地域創成農学部は学部名称を農学部に変更。今回取材した2名は旧地域創成農学部地域創成農学科のカリキュラムを履修している。  
\*2 1次産業を担う農林漁業の生産者が、2次産業である加工と、3次産業である流通・販売にも取り組むこと。

や野菜などを育てながら、栽培技術の基本を習得する。実習はキャンパス近くの農場で行われ、学生が5人程度のチームとなって、課題作物を中心に育て、その出来栄を競う。4年生の阪上綾香さんは、その実習を次のように振り返る。

「春学期の課題作物はスイカで、水や肥料をやる頻度、雑草の除去などは、チームごとに計画して行いました。最後は収穫したスイカの糖度や重さを競ったのですが、同じ畑でも、手間のかけ方でスイカの味が大きく変わること学びました」

## 農業における生産だけでなく、加工、経営まで幅広く学ぶ

1・2年次は、農業技術、食品化学・加工、農業経済・経営、地域創成の4分野の基礎を学ぶ。3年生の富永和希さんは、1・2年次に生産についてだけでなく、流通学や生物学なども学び、視野が広がったという。

「特に興味を持ったのは、『植物育種学概論』です。祖父が米農家で、イネの病気に悩んでいたので、イネの品種改良を学べば多くの農家に役立つと思いい、3年次以降、育種学を学べる分野に進もうと決めました」

## 農業の「今」に触れ、進路選択に役立てる

3年次からは、「農業技術分野」「食品化学・加工分野」「農業経済・経営分野」「地域創成分野」から1つの分野を選択し、より専門的な知識や技術を学ぶ。さらに、「食農コープ実習」では、南あわじ市役所や市内の農業法人などで就業体験をする。富永さんは、玉ねぎを育てる農業法人で実習をした。

「1年次の実習でも玉ねぎを育てましたが、3年次の実習先では商品として販売するため、より厳しく選果をするなど、1年次とは違いがあり、現場で学ぶ意義を感じました」

同学科では、地域の農家との交流行事もあり、阪上さんは、女性農家と交流できるイベントに参加した。

「大学の实習や農家でのアルバイトを通じて、正直、女性が農業を仕事として続けるのは体力的に厳しいと感じていました。でも、イベントで女性の農家の方と話し、手入れの頻度を工夫するなどして効率的に作物を育てることで、仕事の負担を減らすことができると知って、将来への希望を持ってました」

## 地域創成につながる研究に取り組む

阪上さんと富永さんは、「農業技術分野」コースの松原健一郎准教授の研究室に入り、ともに特産のナルトオレンジについて研究している。富永さんは当初、イネの品種改良を専攻しようと考えていたが、地域とかわりながら研究を進める先輩に触発され、ナルトオレンジを研究した。

阪上さんは、ナルトオレンジが淡路島でどのように繁殖したのかを追究する卒業研究に取り組んでいる。通常、柑橘は接ぎ木（\*3）で増やすが、ナルトオレンジは種からも繁殖させていったのではないかと仮説を立てた。島内の農家を1軒ずつ訪ねて、ナルトオレンジを地域活性化につなげたいという想いを伝えることで、オレンジの葉を提供してもらい、DNAマーカー（\*4）を調べている。

「実習や研究を通じて、地域の方とつながりながら働く農業の魅力を確認しました。内定をいただいた小売業の会社では、農業も営んでおり、大学の学びを生かしていきたいです」（阪上さん）

## 大学の思い

### 地域創成のチャンスは農業にこそある



農学部地域創成農学科  
准教授  
松原健一郎  
ひばら・けんいちろう

本学科の大きな特徴は、自然豊かな淡路島において、大規模農場を営む農業農家の近くで学びを深められることです。大学の農場は、農家の農場に囲まれているため、周囲の農家の種植えのタイミングに合わせて作物を育てていきます。少しでも草むしりを怠ると、農家の方に厳しく叱られます。

農家の減少は、どの地域でも大きな問題ですが、農業が地域創成のチャンスになると考えています。例えば、育てにくく収穫量の少ない作物でも、味の個性を打ち出せば、地域活性化に貢献することができます。本学科では、強い香りに特徴のあるナルトオレンジについて様々な視点から研究を行い、地域活性化につなげようと考えています。実際に、ナルトオレンジを使ったアイスの開発など、企業と連携し、商品化につながったケースもあります。

本学科には、農家になりたいと入学する学生も多くいますが、就職先は公務員、製造業、小売業と様々です。農業をトータルに学習し、地域のために活躍できる人材をこれからも育てていきたいと考えています。

\*3 植物の枝を切り取って、類似の植物に接合させて増やす方法。柑橘は接ぎ木で繁殖させることが多い。  
\*4 遺伝子の本体であるDNAを構成する4種類の塩基の並び方を調べ、品種や個体を識別させる際の目印のこと。

## これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる一助となるよう、今号も、対話の場づくりに取り組む実践者に話を聞いた。

# 教師全員で学校の課題に向き合い、 学びやすく、働きやすい環境をつくる

## 長崎県・私立長崎南山中学校・高校

◎神言修道会を経営母体とする長崎南山学園が、カトリック長崎教区立東陵学園を継承して1952年に創立。以来、ミッションスクールとして、「Hominis Dignitati（人間の尊厳のために）」という教育目標を掲げ、それを支える3つの校訓「高い人格」「広い教養」「強い責任感」の下、グローバル時代を生きるために必要な資質・能力を育む「リーダーシップ教育」に力を入れている。

◎設立 1952（昭和27）年 ◎形態 全日制／普通科／男子校 ◎生徒数 1学年中学校約60人、高校約250人 ◎2019年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、山口大、長崎大、熊本大、琉球大、首都大学東京、神戸市外国語大などに34人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、西南学院大などに延べ251人が合格。 ◎URL <http://www.n-nanzan.ed.jp/>



副校長  
**藤田 仁** ふじた・ひとし  
教職歴34年。同校に赴任して34年目。「弱立場の人にこそ、思いやりの心を寄せられることのできる人を育てたい」



企画構想部部长、学校改革推進プロジェクト座長  
**福田鉄雄** ふくだ・てつお  
教職歴38年。同校に赴任して3年目。管理職参与。国語科。「明日を生きる希望を持つことのできる“力”を育てたい」



企画構想部主任、図書主任、生徒会主任  
**中島 寛** なかしま・ひろし  
教職歴21年。同校に赴任して22年目。国語科。「教育には挑戦が必要である。挑戦なきところに成長・進化なし」

### 自校の 風土に合った 組織体制を構築する

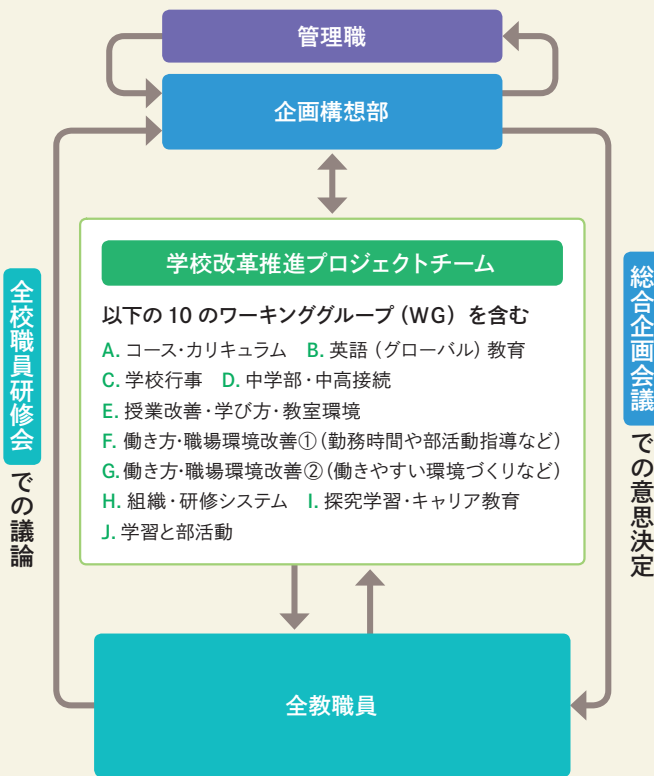
高大接続改革への対応、そして、実施が近づく新学習指導要領に向けた授業改善の推進のため、長崎南山中学校・高校では、17年度から学校改革に取り組んでいる。教師一人ひとりが学校改革を自分事と捉えて参画し、さらにそれぞれが抱える課題を学校全体で共有して、働きやすい学校環境をつくるために、同校では、学校改革を推進するための組織体制を「ミドル・アッパードアウン方式」の考え方で構築した上

で、月1回の「全校職員研修会」を実施している。以下、「ミドル・アッパードアウン方式」と「全校職員研修会」の取り組みを中心に、同校の改革の歩みを紹介する。

同校は、創立60周年を迎えた12年度、「人間の尊厳のために」という教育目標を達成するべく掲げられた「高い人格」「広い教養」「強い責任感」の校訓の下、グローバル時代に必要な資質・能力を育成するため、「リーダーシップ教育」をスタートさせ、様々な教育活動の見直しを進めてきた。5年が経過する中で、そうした営みの成果と課題を整理する時期が来ていたと、藤田仁副校長は振り返る。

「私立学校ゆえ、教師の顔触れがほとんど変わらない中で、私たちは、本

図1 長崎南山中学校・高校の「ミドル・アップダウン方式」体制

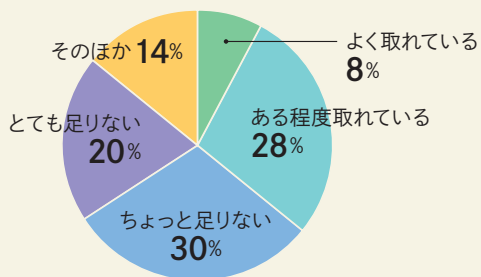


現場から課題を吸い上げ、迅速に対応の意思決定をするために、同校で構築された組織体制。上記のWGは第1期のものであり、第2期では、探究学習とキャリア教育が独立したテーマになるなど、11のWGに再編されている。

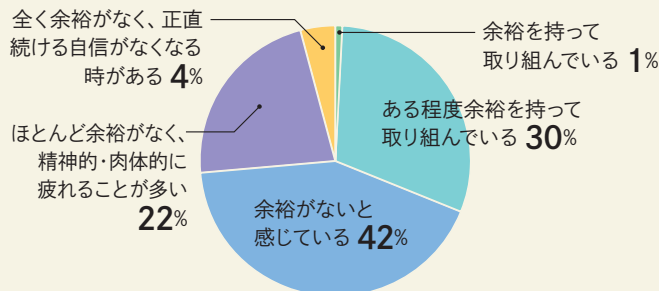
\*学校資料を基に編集部で作成。

図2 「学び方」「働き方」に関する課題

Q. 教材研究など、授業の準備時間は思うように取れていますか



Q. 現在の仕事について



\*学校改革推進プロジェクトチームによるアンケートの結果(2017年)を基に編集部で作成。

校の理念を踏まえたリーダーシップ教育の実現のために、まだできることがあるはずだという思いを抱きつつ、同時に、今後何をしていけばよいのかが見えづらくなっていました」

授業、ホームルーム、学校行事、そして部活動と、「リーダーシップ教育」を実践する場面は多様に存在するが、その実践は、個々の教師の創意工夫に委ねられることが少なくなかった。一方で、教師の働き方への関心が社会的に高まり始めている中で、個々の教師

に負担をかけない形で、全校的な指導改善を続けていくために、教育改革と組織改革を同時に進めていく必要があったと、長崎県立高校の校長として学校改革を推進してきた経験を持つ福田鉄雄先生は語る。

「全校的な指導改善は、組織改革なしには実現しません。ただ、管理職が強力で改革を推進するようなトップ・ダウン方式は本校の文化としてなじまないですし、かといって、ボトム・アップ方式では推進に時間がかかり、

新学習指導要領等への対応が後手に回る恐れがあります。そこで、管理職と教職員全体をつなぎながら今後の改革の方向性を構想し、各分掌と連携してスピーディーに企画・運営・推進していく企画構想部を立ち上げました(図1)」

同校の改革の意思決定のプロセスにおいて特徴的なのは、学校改革推進プロジェクトチーム(以下、学校改革推進PT)の存在だ。学校改革推進PTは、17年4月、各分掌のサブリー

ダー、さらに外部アドバイザーなどを含む10人余りのメンバーで構成された組織で、企画構想部の諮問機関としての役割を担う。そして、学校改革推進PTには、付帯する組織として、学校が対応すべき課題別に5人程度の教師で構成されるワーキンググループ(以下、WG)がある。WGに参加する教師は、教科や分掌を横断する形で招集されるが、WGのリーダーを学校改革推進PTのメンバーが務めることで、現場の教師の声をしっかりと

拾い上げ、企画構想部に伝えることができる。そうして得られた現場の課題や声を、企画構想部が学年・教科・分掌と連携しながらまとめ、管理職に報告したり、承認を求めたりする。このように、企画構想部と学校改革推進PTが「ミドル・アップダウン方式」の核となっているのだ。

## 教師に学びを保障するため、全校研修日を設置

企画構想部や学校改革推進PTのメンバーは、先進校視察などを行う中で、教師一人ひとりが学び続けることが、指導力向上に不可欠だと認識し、学校にどのような仕組みをつくれれば、教師の学びを支援できるのかを検討した。そうした動きの契機になったのは、17年夏に実施した全教職員へのアンケート（P.53図2）だったと、企画構想部主任の中島寛先生は説明する。

「高大接続改革に対する意識からタブレットや電子黒板の活用状況まで、アンケートの項目は多岐にわたります

図3 これからの教育に対応する「学び」のための「働き」方改革

- ① 授業時間の整理（0時限カット、50分×7コマ、土曜授業の廃止）
- ② 「全校研修日（全日または半日）」を原則月1回実施
- ③ 「個人研究日（週1日または半日）」の設置
- ④ 「個人研究費（年1万円）」の新設
- ⑤ 「コース会議」の設置
- ⑥ 『研究紀要』の発刊

\*学校資料を基に編集部で作成。

したが、働き方に関する質問では、「勉強したいけれど、その時間がない」と、先生方から率直な声が上がりました」

学校改革推進PTのメンバーであった藤田副校長、福田先生、中島先生は、各分掌のサブリーダーとアンケートの結果について話し合う中で、教師にとって学びやすい環境をつくること、学校改革の成功の鍵を握ると確信した。

「先生方が無理をして時間を捻出し、勉強するような対症療法ではなく、教師も学びやすい学校をつくるという体質改善が必要だと思いました。自分の関心に合わせて勉強したり、お互

図4 「全校職員研修会」の内容例

- ・ワーキンググループからの中間報告
- ・各教科からの「主体的・対話的で深い学び」の実践報告
- ・多面的・総合的評価とポートフォリオに関する講演会
- ・グローバル教育の現状を学び、育みたい資質・能力を考える講演とワークショップ
- ・「学びの共同体」による学校改革に関する講演、公開授業研究会の参観
- ・各部活動の年間行事と進路指導年間計画の共有
- ・先進校視察報告
- ・「総合的な探究の時間」の運用について
- ・高大接続のあり方についての講演会
- ・タブレットを活用した教育に関する講演会
- ・自校教師による研究授業

月1回の「全校職員研修会」は、午前にWGや分掌、教科などからの発表が行われ、午後はICT活用やグローバル教育、ポートフォリオなど、特定のテーマに特化した学習会となるケースが多い。



全校研修日の午前に行われたWGの話し合いの様子。ここでの議論が、学校改革推進PT、さらに企画構想部での議論につながっていく。

\*学校資料を基に編集部で作成。



全校研修日の午後に行われたワークショップ形式での話し合いの様子。教科や分掌を超えて「育成を目指す資質・能力」を語り合った。

いの実践から学び合ったりする時間を確保するために必要なことは何かを、学校改革推進PTのメンバーと話し合いました」（藤田副校長）

17年の冬、学校改革推進PTでの議論の結果を企画構想部がまとめ、校長に実行施策を提案した。企画構想部の部長として福田先生は、「朝補習や土曜授業を廃止する」「月1回、授業や部活動を休みにして全校職員研修会

を実施する」「個人研究日を設置する」などの18年度からの実行施策（図3）を携えて、校長との面談に臨んだ。校長は、「先生方が話し合った結果、必要だと考えたことなのであれば、すぐに始めましょう」と快諾したという。

「『本当によいのですか？』と、私の方が聞き返したくらい即決でした。それどころか、『よいことであれば早く始めませんか』と、17年度中に全校

職員研修会を実施することを逆提案されました。月に1回授業を休みにして、生徒は自宅学習の日とするには、保護者の理解が必要ですから、校長はすぐに保護者向けの文書の作成を始めました」（福田先生）

## 学び合い、語り合える 土壌を生かして 教育目標を探究する

18年1月から毎月1回行われている

る「全校職員研修会」は、WG、教科、分掌、学年からの発表、大学教授や他校の教師を招いた講演会、ワークショップ形式での話し合いなど、内容は時機に応じて様々だ（図4）。また、半日を自主研修として、各教師が教材研究などに充てることもある。個人研究日を利用して他校の研究授業に参加する教師も増え、今では大半の教師が授業にグループワークを取り入れるなど、授業の様子が大きく変わった。

「校外で学んできたこと、実際に授業で実践してみたこと、さらに『研究紀要』に書かれた内容などを、教師同士で語り合う場面が増え、教師間の相

図5 学校改革のこれまでとこれから

2017年4月 ● 学校改革推進プロジェクトチーム発足

2017年8月 ● ワーキンググループ人選スタート

2018年1月 ● ワーキンググループの活動スタート  
● 「全校職員研修会」スタート

2019年度の検討テーマと成果

- 「グローバルリーダークラス（2、3年次クラス）」の新設
- 「南山リベラル・アーツ（自主選択講座）」の設置
- 3年間にわたる「総合的な探究の時間」の実施
- 中学部における「学びの共同体」の全校実施

\* 学校資料を基に編集部で作成。

互理解が進んでいます」（中島先生）

「ミドル・アツプダウン方式」での学校改革も着実に進んでいる。企画構想部と学校改革推進PTが打ち出した改革項目を、各教科や分掌が速やかに実行できるように、企画構想部のメンバーが教科や分掌のサポートに入ることも増えてきた。既に、体育祭の開催時期、定期考査と追試のあり方、卒業生の進路の情報管理方法などが、この2年間で見直されてきた。

19年度からは、企画構想部と各分掌・学年・コース長が参加する「総合企画会議」を月に1回開催している。企画構想部が全教職員に提示する実行項目の方針や内容を、「総合企画会議」で承認を得るようにすることで、各分掌・学年・コースへの理解・浸透をよりスムーズにすることが、同会議の設置のねらいだが、企画構想部の意思決定機関としての存在感が一層高まった。

「提案や相談を、企画構想部や学校改革推進PTに直接持ちかけてくる先生も増えていきます。どちらか、メンバーに若手の先生がいますので、話しかけやすいようです」（藤田副校長）

学校を取り巻く環境の変化への対応と、「リーダーシップ教育」のさらなる推進を目的として始まった同校

の改革は、19年度からの「グローバルリーダークラス」の新設、選択授業カリキュラムの拡充などの形で結実しようとしている（図5）。そうした中、教師たちが感じているのが、長崎南山中学校・高校として育成を目指す「リーダーシップ」を、今以上に生徒や教師にとつてよりどころとなるような言葉で表現することの必要性だ。

「20年度からは、3年間にわたる探究学習が始まります。探究する力とはどのような力なのか、リーダーシップとはどんな資質なのか、教科や学年を超えて教師、生徒が共有できる言葉が必要だと感じています。これまでの2年余りで、私たちは学校の動かし方を学びましたが、それは主に身近な課題を原動力にしたものでした。ミドル・アツプダウン方式の学校改革や、全校職員研修会等の取り組みによってできた土壌を生かして、今後も『どのような教師でありたいのか』『学校はどうあるべきか』といった理想を語り合い、それらを共通の言葉にして、これからの教育を具体的に形づくっていきたくて考えています」（福田先生）

教師が対話し、学び合う環境を整えた同校の学校改革は、目指すゴールを更新しながら、これからも進んでいく。

## 2019年10月号へのご意見

### 探究学習の本来の目的を見つめ直した

10月号の特集は、探究学習における教師の役割に焦点をあてた内容で、すべての教師にとって有意義な記事だった。東京都・私立かえつ有明中・高校の記事にあったように、教師の価値観を生徒に押しつけるのではなく、「聴くことが大事」という考え方に大変共感した。時間が限られるため、生徒の学びのプロセスより、形にすることを優先して指導しそうになってしまう時がある。記事を読み、探究学習の本来の目的を見つめることができた。

山形県立米沢東高校 高橋英路

### 探究学習の実践に向けて役立つ記事

10月号の特集を読み、教師主導ではなく、生徒の考える機会を奪わない取り組みには、我慢が大切だと感じた。兵庫県立加古川東高校の取り組みでは、指導案作成による教師の負担軽減、役割を与えることによる生徒の主体性や自己肯定感の向上など、参考になることが多かった。探究学習お役立ち文献&ウェブサイトは、他の教員と情報共有したいと思った。

静岡県・沼津市立沼津高校 谷野公彦

### まずは自分の授業改革から

「The OECD Learning Compass 2030」(\*1)の中でも、「Transformative Competencies (よりよい未来の創造に向けた変革を起こす力)」は、探究学習で育成を目指す資質・能力と合致すると感じ、AARサイク

ル(\*2)をいかに授業に取り入れるかが、キーワードになると感じた。先日、福島県立ふたば未来学園中学校・高校を訪問し、公立学校でも生徒の探究学習を中心とした教育活動ができると分かった。まずは自分の授業から改革していきたい。

東京都立羽村高校 久富悠生

### 教科の枠を超えた活動の工夫を学んだ

本校では、情報科の授業を3人のチーム・ティーチングとし、家庭科や体育科など様々な教師が担当している。10月号の「実践 アクティブ・ラーニング」の情報科の授業では、他教科とつながりが多いという教科特性を生かして、教科の枠を超えた活動や思考を深める発問をしている工夫が参考になった。

徳島県 匿名希望

### 若手教師を学校改革の原動力に

10月号「指導変革の軌跡」の静岡県立焼津中央高校の記事では、意欲的な若手教師が学校を動かしていく様子がよく分かった。トップダウンとせず、まず若手教師の意見を組み入れるという考えが勉強になった。

栃木県立真岡工業高校 半田高史

### よい言葉は受け継がれる

10月号「教師を育てた言葉たち」で紹介された「雲上蒼天」が、様々な形で受け継がれていることに感動した。気持ちばかりが先走らないように、生徒と向き合っていきたいと思った。

山形県 匿名希望

OFF SHOT



今号の『学校教育デザイン』を描く道標の取材で訪れた東京都・私立山崎学園富士見中学高校は、図書館がとても斬新でした。その名は「Learning Hub」、2018年の完成です。フロアは2階に分かれていて、下の階はアクティブ・ラーニングに合う可動式の机や椅子があり、生徒は探究学習や学び合いで活用しています。上の階はあちこちに椅子があり、どこに座っても、離れた椅子に座った生徒との視線がずれる工夫が施されていて、読書をしやすい環境がつけられているのだそうです。司書教諭の宗愛子先生は、この図書館の設計段階からかわり、「自分の思いを反映した学びの場にした」と言われていました。そして、「読書会」や「ビブリオバトル」などの様々な図書館活用策も実施してきたとのこと。自分が高校時代に利用した図書館と比較して、大きな進化と今後の可能性を感じました。(広瀬)

『VIEW21』高校版 公式アカウント

LINE@

友だち募集中!

『VIEW21』高校版や教育に関連する最新情報をタイムリーにお届けします。\*お友だちの登録方法は、右の2次元バーコードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。



VIEW21 高校版 2020 2 月号

次号は2月14日発行(予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

\*1 よりよい社会を実現するために求められる学びの枠組みとして、OECDが策定した。

\*2 「The OECD Learning Compass 2030」を育む学習過程として、「Anticipation」(見通し)、「Action」(行動)、「Reflection」(振り返り)から成るサイクルのこと。

## 教師を育てた 言葉たち

No. 017

岡山県立総社高校  
**三村美紀**先生  
みむら・みき

◎教職歴31年。同校に赴任して2年目。倉敷工業高校、倉敷青陵高校などを経て、総社高校の教頭を務める。岡山大学文学部が開催する講演会「教科書からひろがる〈知〉の世界」の企画・運営に参画するなど、岡山県の教育力向上に尽力する。



**生** 徒課長のA先生から、「三村先生は、**岡山**の教育をどうしたいのか」と問われたのは、3校目の勤務校である工業高校で5年目を迎えた頃です。生徒と真正面からぶつかりながら、「よいクラス」「よい授業」が作れるようになったと自信を持った時期でした。また、工業高校からも国立大学の推薦入試で合格者を出せるような体制を構築しようと、国語、数学、英語の先生方とプロジェクトチームをつくらうとしていた時でもありました。A先生の言葉は、そのプロジェクトの進め方について相談した時に発せられたものでした。

予想外の問いかけに、私は「仕事の進め方の相談をしているのに、なぜ、そんな大きな話を？」と戸惑いました。「自分にとっては壮大なことすぎて、考えたこともありません」と答えた私に、A先生は、「教師は、今できることをやるだけではなく、理想を持ち、5年先、10年先の教育を考えなければいけないんだよ」とおっしゃいました。その時、私は「分かりました」と返事をしたと思います。でも、その後、私がA先生の言葉を思い出すことはありませんでした。

**県** 内有数の進学校に異動して9年目、私は教職大学院への進学を勧められました。「私よりもふさわしい先生がいるのになぜ？ 子どももいるし、仕事、勉強、家庭の両立なんて……」と困惑しましたが、「三村先生が学んだことを、県全体に還元してほしい」と校長から言われた時、A先生の言葉を思い出したのです。目の前のことに取り組むだけでなく、大きな視野で行動を選択すること、周囲からの

求めに応えることも大切だ……A先生の教えが、10余年を経て胸に落ちた気がしました。私はすぐにA先生に相談のメールを送りました。A先生の返信には、「自分が今できることだけでなく、求められていることを選びなさい」とありました。

**教** 職大学院での学びを通して、私は、よりよい指導を岡山県全体で実現していくためには、教師一人ひとりにもっと勉強が必要だと実感しました。どんなに指導力があっても、その力を他者に伝えるように言語化し、理論と実践を往還できなければ、周囲を巻き込むことは困難です。教師こそ、学び続けなければいけない職業だと確信しました。

大学院で出会った研究者や小・中学校、高校の先生方と、私は、岡山の教育について語る会を立ち上げ、今年7月には、7回目の勉強会を開催しました。人脈が広がり、どんな時に、誰の力を借りればよいか分かるようになったこと、自分の中の疑問や悩みをいろいろな人と考えることの楽しさを知ったことも、教師としての成長だと感じています。私以上に私のことを理解し、「きっとできる」と信じてくれる方々に出会えたからこそその成長だと思っています。

実は、大学院進学にあたって、当時小学生と中学生の息子たちにも相談していました。返ってきた言葉は「お母さんは、それができる人だと思われたから声がかかったんだよね？」と、私の背中を強く押すものでした。仕事が忙しくて、ランドセルの中も見てあげたことがなかったのに、彼らは私のことを見てくれていたのです。

岡山県立総社高校 全日制／普通科・家政科／共学／1学年約280人／2019年度入試合格実績（現浪計） 公立大は、北海道大、筑波大、岡山大、広島大などに63人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、同志社大、立命館大などに延べ294人が合格。

# VIEW21

ビュー21 高校版 Volume5 2019年12月号  
2019年12月16日発行/通巻第379号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング  
©Benesse Corporation 2019

お客様  
サービスセンター

**[フリーダイヤル] 0120-350455**

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17

9KVOL5

 Benesse